注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
レイ・アルメリアの物語

【作者名】
長月エイ

【あらすじ】
日本の魔法学校に通っていた如月伶は、とあるきっかけでダンブルドアに誘われ、両親の母校ホグワーツに編入する。
そんな彼女が、ホグワーツで仲間と出会い、成長していく物語。

1・スカウト

夏休みが今年も始まった。暑い日が続くけど、私は毎日部活ざんまいだ。

私は如月伶（きさらぎ　れい）。

青龍学院魔法学校中等部の2年生で、父さんがイギリス人、母さんが日本人のハーフだ。

クィディッチ部でチェイサーをやっている。

今日もチームのチェイサー2人と、上空15m地点で話をしながらキャッチボールをしていた。

話題は、先日の全日本学生大会のことだ。

うちの学校は決勝戦まで勝ち進んだ。

けど決勝戦で、私がゴールした直後、相手のシーカーにスニッチをつかまれて負けたんだ。

「《あの試合、最後の逆転は酷いですよね。せっかく伶が点を入れたのに。ハイ、御堂（みどう）先輩、パスです！》」

東郷史子（とうごう　ふみこ）がクアッフルを投げた。

彼女は私の同級生で、東郷飛行具社という箒メーカーの社長令嬢だったりする。

「《というか、うちのシーカーがだらしない！》」

相槌を打ってクアッフルをキャッチしたのは、御堂藍子（みどうあいこ）先輩。

高等部2年、うちのエースだ。

「《伶ちゃんが得点した後、さっさとスニッチを取らないから。フミちゃん、パス》」

御堂先輩が愚痴り、史子にクアッフルを投げ返す。
「《ところで伶。知ってる？　今、ホグワーツの校長が来てるんだって。何て名前だったけかな、ダンボ？　ダブルド？　ダンボール？》」
史子が、私にクアッフルを投げる。
「《フミぃ～、それ言うならダンブルドア。けど、何で彼がここに？》」
私はキャッチしながら答え、先輩にパスを出す。
「《ルーピン先生をホグワーツに引き抜くためらしいわ。あれ？　伶ちゃん、親子なのに聞いてない？　ほい、パス！》」
御堂先輩が、私にクアッフルを投げ返す。
「《え、先輩、今なんて？》」
私はクアッフルをキャッチしたまま固まる。
先に反応したのは、史子だった。
「《やだぁ。リーマス先生の授業、好きなのに！　イギリスに行っちゃうの!?》」
リーマス・ルーピンは、私の父さんだ。
この学校で3年程前から英語の先生をしている。
ていうか、父さんのイギリス行きの話なんて、今初めて聞いたんだけど！
いや、待てよ？……2・3日前、イギリスから、父さんに手紙が来ていたような。
「《お～い、如月ぃ～！》」
校舎から、キャプテンで高等部3年の河口先輩が、クィディッチ場へ走ってきた。
「《学院長先生が、お前を呼んでるってさ！》」
「《ハイ、行きます！　あ、フミ、これ！》」

私は返事をして、史子にクアッフルを投げる。
そして地面まで降り、着替えて学院長室へ向かった。

学院長室に入ると、程よく冷却魔法が効いていて、外の暑さが嘘みたいだった。
「《如月さん、練習中に呼び出してごめんなさいね。さあ、ルーピン先生の隣に座って》」
初老の魔女、学院長の土御門（つちみかど）先生が、ニコニコと私を迎える。
「伶、こっちだよ」
父さんが英語でそう言って、自分の隣をさす。

私が座ると、土御門先生は杖を振って麦茶を出した。

ソファーには父さんの他に、2人の西洋人魔法使いが座っていた。
長い髪とヒゲの半月眼鏡の老人は、たぶんホグワーツのダンブルドア校長だ。
ダンブルドアの隣にいる男は、父さんの学生時代の同期で、私とも知り合いだった。
そして彼の服装は、周りから明らかに浮いていた。

私は、制服の白い半袖のセーラー服。
父さんは、洗いざらしの白い長袖カッターシャツ。土御門先生は、爽やかな水色のワンピース。
ダンブルドアは、若草色の薄い麻のローブ。
みんな夏向きの涼しそうな服。

なのにコイツときたら！
この真夏に、分厚い布地の真っ黒なローブ。
しかも、ローブの下は黒い厚手の詰襟服で、ボタンをきっちり一番上まで留めている。

真夏の日本をナメてるとしか思えない!!
いくら魔法で温度調節できるといっても、見た目の季節感ってものがあるよ。
それに、整髪剤ベッタリの肩までの黒髪、血の気のない顔は相変わらずなんだなぁ。

「初めまして。如月伶……伶・アルメリア・如月・ルーピンです。よろしくお願いします」
「アルバス・ダンブルドアじゃ。こちらこそ、よろしくのう」
私は一応、フルネームを名乗った。
長い名前なので、滅多に名乗ることはない。
それにここ日本だと、母さんの苗字「如月」の方が使いやすいので、普段は「如月伶」で通している。

私はダンブルドアに手を差し出し、握手した。
彼の手首のアメジストのブレスレットが、若草色のローブにマッチして、とてもおシャレだった。

「スネイプさんお久しぶりです」
一応黒ローブにも挨拶すると、軽くうなずいたけど、しかめ面だ。
というか、この人はしかめっ面が基本だけどね。

「レイは、アズサにそっくりじゃのう。じゃが、髪の色はリーマスじゃな」
ダンブルドアは、私と父さんを見比べて微笑む。

梓（あずさ）というのは、死んだ母さんの名前だ。
私は母さん似の典型的日本人顔。
外見で父さんから受け継いだところといえば、鳶色の髪ぐらいかな。

「ところでリーマス、手紙は読んでくれたかね？」
ダンブルドア校長の言葉に、父さんがうなずく。
「では、さっそく本題なんじゃが……」

御堂先輩の言ったとおりだった。
ダンブルドア校長は、父さんをホグワーツの「闇の魔術に対する防衛」の教師にスカウトしに来た。
一緒に話を聞いて欲しいということで、娘の私も呼ばれたらしい。

けど、ひとつ大問題があった。
「あの、お話はわかりました。ですが、ダンブルドア先生。父には『持病』がありますよね？」
私の言葉に、父さんが大きくうなずき言った。
「先生。本当に私で宜しいのでしょうか？」

父さんは人狼だ。満月の夜に変身して凶暴化する。
といっても、今は脱狼薬を正しく飲めば変身しても理性を保てる。
しかも、この病気は満月に変身した人狼に咬まれなきゃ感染しない。
遺伝もしないので、私も当然人狼ではない。
けど、人狼はヨーロッパでは偏見が強く、バレると酷い差別を受けるようだ。

うちの学校は通学制で、授業は基本的に昼間だ。
天文学だけは夜に授業があるけど、父さんは英語担当だから、関係ない。
けど、ホグワーツは全寮制なので、生徒も教師も学校に住むことになる。
果たして病気を隠し通せるのかな？

「本人や実の娘でさえ懸念しているというのに、校長。我輩、やはりこの男については、」
スネイプの言葉にダンブルドア先生が割り込んだ。
「リーマス、レイ、心配無用じゃ。セブルスが薬を作ってくれるからのう」

スネイプは苦虫を１０匹まとめて噛み潰した顔をしながら、首をわずかに縦に動かす。
どうやら、彼が脱狼薬を煎じてくれることは既に決まっているっぽい。
まあ、ダンブルドアに頼まれたから「嫌々引き受けました」って顔に書いてあるけど。

しかし父さんには、まだ迷いが見えた。

すると土御門先生が英語で言った。
「ルーピン先生。当学院としては、生徒に慕われている優秀な教師である貴方が去ることは、非常に惜しい。しかしながら、母校で教鞭を執ることは、貴方の長年の夢でしたよね。なら、この機会を逃してはなりなせんよ」

土御門先生に続けて、私も言う。
「父さんは、防衛呪文に詳しいし、闇の生物についてもよく知っている。『闇の魔術に対する防衛術』の先生にはピッタリだと思う。引き受けたら？」

父さんは目を瞑ってしばらく考えていた。
そして、しばらくして口を開いた。
「お引き受けします」
しっかりとした口調で、父さんは宣言した。

するとダンブルドアは、今度は私を見て言った。
「ところで、レイ。君もホグワーツに来る気はないかのう？」
半月型の眼鏡の奥で、ダンブルドアの水色の瞳がキラキラ輝いていた。

2・父さんの電話

ダンブルドア校長の計らいにより、私もホグワーツに行くことになった。担任でクィディッチ部顧問でもある高砂(たかさご)先生や、チームのメンバーと別れるのは、少し寂しかったけどね。

高砂先生は「《イギリス料理はマズイから、覚悟しろよ！》」なんて言ってた。

え、私はそんなことないと思うけど。

少なくとも、ロンドンの漏れ鍋の料理は、結構おいしいと思うよ。

私は13歳なので、3年生に編入することが決まった。

どうやら、あのヴォルデモートを倒したことで有名なハリー・ポッターと同級生になるらしい。

あと、ダンブルドアとの打ち合わせで、私が父さんと親子であることは、秘密にして欲しいと頼んだ。

周りに先生の娘だと知られてると、いろいろ面倒だったからね。

学期末になると、大変だったなあ。

テストに出る問題を教えろとか、自分の成績を上げるように父さんに頼んでくれとか。

知るかっての！

当然、片っ端から断ったし、父さんだって、そんな生徒には取り合わなかったけどね。

ダンブルドア校長とスネイプが来て3日後。

父さんは準備の為、一足先にイギリスへ出発した。

そしてそれは、父さんが出発した翌日だった。

朝、私はいつも通り玄関に新聞を取りに行った。

すると、一面トップに目が釘付けになった。

長いボサボサの髪と無精髭の男の写真が、こちらをギラついた目で睨みつけている。

男は必死になって何か喚いているように見えた。

一瞬、男と目が合い、慌ててそらす。

◆シリウス・ブラック　アズカバンを脱獄◆

イギリスのアズカバン監獄に収監されていた囚人、シリウス・ブラックが脱獄した。

ブラックは、１９８１年にマグル１２人と魔法使い１人をイギリスのロンドン中心部で爆殺した罪で、終身刑となっていた。

アズカバン監獄は、絶海の孤島にあり吸魂鬼（ディメンター）による厳重な監視体制でよく知られている。

過去に逃走に成功した囚人は、一人もおらず……

記事をそこまで読んで、私は顔を上げた。

シリウス・ブラック。

うちの両親と同級生で、不死鳥の騎士団で一緒に闇の勢力と戦っていた。

いや正確には、奴は闇の陣営のスパイで、ヴォルデモートの手下だったんだ。

さらに悪いことに、ブラックは、父さんの3人いた親友のうちの1人でもあった。

あと2人は、ジェームズ・ポッターとピーター・ペティグリュー。

ジェームズ・ポッターは、ハリーのお父さんだ。

ブラックの裏切りで、彼は妻（つまり、ハリーのお母さん）と共にヴォルデモートに殺された。

当時、ポッター家は、ヴォルデモートに命を狙われていた。
シリウス・ブラックは「忠誠の術」を使い、「秘密の守人」として、ポッター家の居場所という秘密を自分の中に封じ込めた。
しかしその「守人」であるブラックこそが、ヴォルデモートの手下だった。
そうして、ヴォルデモートはポッター家の居場所を知り、ポッター夫妻を殺したんだ。

その時、ヴォルデモートは、赤ちゃんだったハリーも殺そうとした。
けど、ハリーだけは殺すことができず、逆に自分が力を失ってしまった。
ヴォルデモートは今、生死不明な状態で、行方不明になっているらしい。

一方、ピーター・ペティグリューは、ポッター家襲撃事件の翌日、彼はブラックを追いかけ、捕まえようとしたけど、逆に殺された。
12人のマグルと一緒にだ。

そのシリウス・ブラックが脱獄した。
しかも、絶対に脱獄不可能といわれている、あのアズカバンから。
そんな恐ろしい話、信じられないし、信じたくもなかった。

だけど、むしろ父さんが心配になった。
こんな事件が起きて、父さんは今どんな気持ちで、何を考えているんだろうか？

その時、普段はめったに使うことがない電話機のベルが鳴った。
「《はい、如月です》」
日本語で返事をすると、英語で返ってきた。
「ああ、伶かい？僕だよ」
父さんだった。

「そちらは朝だね。おはよう。」
時差があるので、イギリスは夜のハズだ。
「父さん。あのね……」
「シリウス・ブラックのことだね？　伶のことだから、きっと僕を心配していると思っていた」
父さんには、お見通しだった。
「あいつが脱獄したと聞き、やはり僕は教授の話を辞退すべきだと思った」
「何言ってんの！　父さんは関係ないよ。ただ学生時代に仲が良かっただけで、ブラックの脱獄の手引きをしたわけでもないのに」
思わずため息が出る。
「ダンブルドア先生は、わざわざ日本にやって来て、父さんをホグワーツに誘ったんだよ？　それを断るなんて……」
「大丈夫。辞退はしない。ダンブルドア先生に説得されたからね」
ああ、よかった。
「もっとも、セブルスは強硬に反対していたけど。ブラックの狙いは、恐らくご主人様を倒したハリーだ。そして『ルーピンはブラックが、ホグワーツに入る手引きをする可能性がある』ってね」
「いや、有り得ないでしょ。父さんが手引きとか」
私はクールにそう言った。
まあ、スネイプと父さん達は学生時代、犬猿の仲だったらしい。
だから、あいつのひねくれた考えも理解できるんだけど。
「もちろんだ。君に誓って、あいつの手引きなどしない。ところで、伶。実は……」

話をまとめると、ホグワーツ職員はブラック対策で、緊急で警備を強化することになったらしい。
だから、新学期が始まるまで、父さんもホグワーツにカンヅメになるとのこと。

しかも、学校が始まるまで、私は母さんの弟の悟（さとる）叔父さんの家に滞在する予定だった。
けど、間が悪いことに、叔父さんは急にアメリカに1ヶ月出張しなければいけなくなったらしい。
というわけで、私は漏れ鍋に泊まることになった。

「ヒースロー空港には、マッド・アイに迎えに行ってもらうから、よく言うことを聞きなさい。じゃあ、僕は寝るよ。おやすみ」
父さんはそう言って電話を切った。

3・いざ、イギリスへ

8月もあと1週間と少しとなったある日。
私はイギリスのヒースロー空港に降りたった。
時差ボケで、少し頭がぼーっとする。

［脱獄囚シリウス・ブラックを見かけたら、ロンドン警視庁へご連絡を！」
ロビーのあちこちに、そんなポスターがあった。
まさか、スコットランドヤード（ロンドン警視庁）もブラックを追ってるとは思わなかったな。
もっとも、マグル向けのポスターだから写真は動かないけどね。

ロビーを見渡すと、杖をついた老人がいた。
隣には、風船ガムのようなショッキングピンクの短髪をツンツンさせた若い女性もいる。

老人はマッド・アイ（本名はアラスター・ムーディ）。
元・凄腕闇祓いで、父さんとお祖父ちゃんの古い知り合いだ。
昔、死喰い人との戦いで、口が歪み、鼻と左目を失くした為、かなり迫力のある顔だったりする。
しかも、左目には、ぐるぐる回る魔法の義眼が入ってるし！
小さい頃は、怖くてマトモに顔が見られなかった。
ついでに言うと、左脚は義足だ。
いや、怖いのは見た目だけで、実は結構いい人なんだけどね。

「久しいな、レイ。しばし見ぬ間に背が伸びたか？」
マッド・アイは目を細める。
「お久しぶりです、マッド・アイ。お元気でしたか？」
私も挨拶をしたけど、ところで隣の女性は誰？

「レイ、紹介する。彼女はニンファドーラ……」
マッド・アイの言葉に、女性はツッコミぎみに言う。
「トンクスよ！　トンクス！　ト・ン・ク・ス!!　トンクスでいいから。よろしく、レイ」
彼女が握手を求めてきたので、私も慌てて手を出す。
「如月伶です。よろしくお願いします」
「レイ。彼女はこう見えて闇祓いの見習いだ。そそっかしいが、なかなか見どころがある」
そう言ってから、マッド・アイは付け加えるように私にこっそり耳打ちした。
「レイ。彼女はファーストネームを呼ぶと、機嫌を損ねる。苗字で呼べ」
どうやら、彼女は自分のファーストネームが気に食わないらしい。
ニンファドーラって、カワイイ名前なのになぁ。

何故、私を元・凄腕闇祓いと闇祓い見習いが空港まで迎えにきたのか？
実は、私のお祖父ちゃんは世界的に有名な魔法薬学者で、現職の日本の魔法大臣なのだ。
一応、私はＶＩＰの身内なので、ブラックが逃亡中の今、安全を考えてこうしたらしい。
わざわざ魔法を使わず、飛行機で移動したのも、セキュリティ上の理由だそうだ。

それから、私達は地下鉄でロンドン中心部へ出た。
途中、マッド・アイが切符を買うのに手間取っていた。
見かねたトンクスが、テキパキと券売機を操作し、３人分の切符を買ってくれた。
実は、彼女のお父さんはマグル生まれだそうで、地下鉄には慣れて

いるらしい。

漏れ鍋に着くと、マスターのトムに挨拶して荷物を預け、財布だけを持って出た。

買い物の前にグリンゴッツ銀行で日本円を両替する。

グリンゴッツでは、たくさんの小鬼が忙しそうに働いていた。

日本だと、魔法界とマグルは同じお金を使っているんだ。

けど、イギリスだとマグルと魔法界のお金は違う。

それにイギリス魔法界のお金は、すっごくややこしい。

確か、29クヌート銅貨が1シックル銀貨で、17シックルが1ガリオン金貨だっけ？

どうしてこんなにキリが悪いのか、いまだに意味不明だよ。

さて、ホグワーツで使う学用品なんだけど、杖・鍋・薬瓶・真鍮の秤は持っている。

箒は3年生だから、持ち込みOK。

ちなみに、私の箒は「縮小スイッチ」がついていて、小さくして携帯できるスグレモノだ。

メーカーはもちろん、史子の実家、東郷飛行具社だ。

買わなきゃいけないのは、制服と羊皮紙・羽根ペン・インク、あとは教科書ぐらいかな。

両替が済むと、まず制服を買いにマダム・マルキンの店へ行く。

ずんぐりむっくりの優しそうなマダムが、ニコニコしながら採寸してくれた。

私が制服のローブを仕立てている間、マッド・アイは外で退屈そうにしていた。

けど、トンクスは楽しそうに店内を見て回っていた。

それから文具店で羊皮紙・羽根ペン・インクを買った。

文具店を出たあと、トンクスが私に尋ねた。
「ところで、ホグワーツには、梟・猫・ヒキガエルなどのペットの持ち込みができるけど、レイは何か飼わないの？」
梟が欲しいと言うと、マッド・アイとトンクスは、イーロップふくろう百貨店に連れて行ってくれた。

4・使い魔

イーロップの店内は薄暗く、宝石のようにキラキラと梟の目が光っていた。
「うわ、ここ相変わらず暗いよね。何か出てきそう」
店内を見渡しながら、トンクスが言う。
「もっとも、まさかこんなところには、ブラックは潜んでおるまいて。だが、油断大敵！」
マッド・アイの魔法の義眼はグルグルと動いていた。

【いらっしゃいませー！】
元気な声が聞こえたので、一瞬、店員が挨拶したのかと思った。
けど、店員は奥のカウンターで大いびきで爆睡中だ。

じゃあ、あの子か。
放し飼いの茶色い梟が、止まり木の上から、丸い黄色い目で私を見ている。
「やあ。さっき挨拶してくれたのは、君だね？」
私が梟に話しかけると、思った通りの反応がきた。

【何でわかると!? つーか、まさかアンタ……】
梟は目をキョロキョロさせたので、私はニヤリと笑って尋ねる。

「ここには、シリウス・ブラックは来てないよね？」
【ブラックっち、脱獄囚のか？　大丈夫。うちには来とらんし、ダイアゴンでも見とらんけん】
「マッド・アイ、トンクス。この子が言うには、ダイアゴンでは、ブラックは見てないって」
「レイは梟と話せるの!?」

驚くトンクスに、マッド・アイが答える。
「ああ、この娘は『鳥語聞き』だからな」
「鳥語聞き」とは、鳥の言葉を理解する能力だ。
蛇語使いのパーセルマウス程ではないけど、ちょっと珍しい。
けど、母さんの実家の如月家は、この力を持つ人が多い家系なんだ。
例えば、悟叔父さんがそうだったりする。

そういえば、ダンブルドアも鳥語聞きだと聞いたことがあるなぁ。
噂によると、不死鳥を使い魔にしてるんだとか。
ホグワーツに行ったら、その不死鳥に会えるのかな？

【アンタ。やっぱ鳥語聞きやん！　俺、配達の速さと正確さには自信があるばい。俺を飼わんか？】
最初の梟が言うと、そこから梟達の猛烈なＰＲ合戦が始まった。

【えーっ、俺にしなよ。長距離飛ぶのは得意だぜぃ】
【あたしを飼ってよ～】
【いえいえ、ぜひワタクシを！】
【僕をぜひ！】
【鳥語聞き様、わたくしめをぜひぜひお願いします！】

すると、居眠りしていた店員がついに目を覚まし、あくびを噛み殺しながら立ち上がる。
「ふぁあ。さっきから何だウルサイなぁ？　ホーホーって・・あ、いらっしゃいませ！」
店員はやっと私達に気づき、慌ててカウンターから出てきた。

「で、レイ。どれするのだ？」
マッド・アイが尋ねる。
「最初に話しかけてきた子かな。ほら、黄色い目の茶色い羽の」

なんだか、この子とは気が合いそうだ。

最初に話しかけてきた梟は、フワリと飛び上がると、店の奥のカウンターに止まる。

【ありがとうございます！　オレ、頑張るけん！】

そう言って、カウンターの上で羽をパタパタさせた。

こうして、私はその梟を飼うことになった。

名前は「ヒキャク」に決めた。

運び屋＝飛脚っていう、単純な理由だったけど、本人（本鳥？）は、気に入ったみたいだった。

梟を買ったら、あとは教科書だけだ。

選択教科は、魔法生物学とマグル学にしていた。

私達はヒキャクの入った籠をぶら下げ、フローリシュ・アンド・ブロッツ書店へ向かう。

書店の店先を見て驚いた。

大きな檻が置かれていて、中で数百冊の本が取っ組み合いをしていたんだから。

周りには、破れた本のページが散らばっている。

しかも緑の表紙には金文字で「怪物的な怪物の本」と書いてあった。

「まさか……これ魔法生物飼育学の教科書だよね？」

トンクスがリストを見て、声を上げた。

すると、店長がすっ飛んできた。

「お客様もホグワーツですか……」

まるでこの世の終わりみたいな声だった。

そして店長は、ため息混じりに檻へ手を突っ込む。

「イタッ!!」

本が、店長の手をガブりと噛み付いた。

それを見たマッド・アイが、警戒モードで杖を構えた。

その時、籠の中でヒキャクが羽毛を逆立てて叫んだ。

【背表紙を撫（な）でれ！　そしたら、大人しくなるけん！】

え、撫でる？……そんな馬鹿な？

ためらう私に、ヒキャクはツッコミ気味に叫ぶ。

【早よ撫でんかいっ！】

私は、店長の手に噛み付いた本に手を伸ばし、勇気を出して背表紙をそろ～っと撫でた。

本はフルルっと軽く身震いをして、あっさり大人しくなった。

その後、他の本も買って、レジでお金を払う。

レジを待っている間、目に付いたのは、ギルデロイ・ロックハートのコーナー。

青い瞳と輝く金髪の魔法使いのポスターがベタベタ貼ってある。

ハンサムだけど、キザっぽい笑顔がなんだか胡散臭いぞ。

◆店頭在庫限り大特価!!◆

［トロールとのとろい旅］

［雪男とゆっくり一年］

［狼男との大いなる山歩き］

［自伝　私はマジックだ］

在庫処分セールをやっているみたいで、本は元の値段の半額以下で叩き売りされていた。

しかも、天井スレスレまで山積みにされている。

これ、地震が来たら大変だなぁ……なんて、思っていたら。

ドン！　ズサズサズサーっ！

「うわぁ～っ!!」

トンクスがつまづいて、本の雪崩を起こしたらしい。
彼女は店員にめちゃくちゃ睨まれて「ごめなさい、ごめなさい」と何度も謝っていた。
ま、マッド・アイが、あきれ顔で杖を一振りして、崩れた本をあっさり片付けてくれたんだけど。

こうして買い物が終わった私は、マッド・アイとトンクスにお礼を言って別れた。

5・3人組登場

漏れ鍋に戻ると、トムがグラスを磨きながら迎える。
「キサラギ様。荷物は部屋に運んでおります。早いですが、夕食にしましょう」
そう言って、トムはローストビーフを出してくれた。
こんがり焼けた肉が、とてもおいしい。

食事をしていると裏庭の方から、私と同じぐらいの歳の少年が店内へ入ってきた。
身長は私よりも少し低いようだ。
クシャクシャの黒髪に丸メガネ、そして緑の目、この顔はまさか!?
「おや、ポッター様。お帰りなさいませ。夕食はローストビーフですよ」
トムが少年に挨拶をして、夕食の準備をする。

やっぱり、ハリー・ポッターで間違いない。
父さんの学生時代のアルバムにあった、ジェームズ・ポッターさんの写真にそっくりだ。

「ねえ、よかったら、一緒に食べない?」
声を掛けると、彼はぎこちなく私を見た。
「私は如月伶。あ、苗字は『如月』だよ。日本の魔法学校から、今度ホグワーツの3年生に編入するんだ。伶って呼んでね」

私が自己紹介すると、やっとハリー・ポッターの表情が柔らかくなった。
「ハリー・ポッターだよ。ハリーでいいよ。君も3年生になるんだね。よろしく」

それから、私とハリーはいろんな話をした。
ハリーの寮はグリフィンドールだってこと。
クィディッチでシーカーをやっていること。
マグルの親戚に育てられていること。
ご両親の悪口を言われて頭にきて、親戚のおばさんを風船のように膨らませてしまったこと。
その事件がきっかけで、家出したこと。

私も日本の学校やクィディッチのことを話した。
ハリーとは初対面だったけど、話が弾んですっかり仲良くなった。

翌朝、早く目が覚めた私は、買った教科書をパラパラ眺めていた。
文章はもちろん英語だらけだ。
それを見て、いよいよホグワーツに編入する実感が湧いてきた。
授業の科目や進度は、青龍学院とだいたい同じだ。
けど、英語と陰陽道・呪術の授業がない……。
って、ここはイギリスだから当たり前か。
見た感じ、魔法薬学だけはかなり進んでいるようだけど、魔法薬は得意だから平気だ。

あと、ハリーはヘドウィグという真っ白な梟を飼っていて、私は彼女とも仲良くなった。
むしろ、うちのヒキャクの方がヘドウィグを気に入ったらしい。
ハリーは、私が鳥語聞きと知って驚いていたけど、ハリーの方がよっぽどスゴかった。
パーセルマウスなんて、レア過ぎる!!

それからの私は、連日ハリーとダイアゴン横丁を歩いてまわった。
気になったのは、超高級競技用箒ファイアボルトだ。
１０秒で時速２４０ｋｍまで加速っていうのが、スゴい。
日本のマグルの超特急・新幹線と、ほぼ同じ速さだ！

一度でいいから、乗ってみたい。
けど、「価格はお問い合わせ下さい」って、一体いくら出せば買えるんだろう？

新学期が近づくにつれ、横丁はたくさん買い物客が来るようになっていった。
どうやら、ハリーはその中に、親友2人がいないか探していたようだったけど、見つからないみたいだった。

そして、新学期まであと1日となった日。
ついにハリーは2人を、フローリアン・フォーテスキューのアイスクリーム店で見つけた。

燃えるような赤毛のひょろ長い少年と、小麦色に日焼けした前歯がちょっと大きい栗毛の少女。
ハリーがやっと会えたと嬉しそうに2人に駆け寄り、私を紹介してくれた。

赤毛の彼はロナルド・ウィーズリー、通称ロン。
お父さんがイギリス魔法省に務めているらしく、ハリーが親戚のおばさんを膨らませて家出したことは聞いたらしい。

栗毛の彼女はハーマイオニー・グレンジャー。
学年トップの秀才らしい。
両親はマグルで、歯科医なんだとか。

2人とも3年生で、グリフィンドールだそうだ。

私が自己紹介すると、ハーマイオニーが早速質問してきた。
「ところで、レイ。日本人は、みんな黒髪だって聞くけど、あなたは鳶色なのね？」

「父さんがイギリス人で、死んだ母さんが日本人なんだ。髪の色は父さん譲りだよ。ついでに言うと、2人ともホグワーツのグリフィンドール出身で、ハリーのご両親と同級生だったんだ」
「へえっ、じゃあ、レイのパパとママって、僕らの先輩なんだ！」
ロンが嬉しそうに言った。

それから私達は、アイスクリームを食べながら、ロンの新しい杖を見せてもらったり、ホグワーツでの授業について聞いたりした。
それにしても、ここのチョコチップアイス、めちゃウマだなあ。

授業といえば、今年ハーマイオニーは、選択教科を全部（数占い・魔法生物飼育学・占い学・古代ルーン文字・マグル学）をとるつもりらしい。
フローリシュ・アンド・ブロッツ書店のはち切れそうな紙袋が3つもあったよ。
「これから1年、食べたり眠ったりする予定はあるの？」なんて、ハリーが心配するのも無理はない。

ふと、ハーマイオニーの紙袋に、怪物本がスペロテープでぐるぐる巻きされて入っているのが見えた。
本は、テープを外そうとジタバタもがいている。
そこで、私はヒキャク直伝「怪物本を大人しくさせる方法」を3人に伝授した。

早速、ハーマイオニーは恐る恐る、自分の怪物本を取り上げて背表紙を撫でる。
すると、本はあっさり大人しくなった。

ていうか、書店の店長さん……。
私が本を撫でて大人しくなったのを見てたのに、何で何もしてなかったの？

そりゃ、暴れまくる数百冊の本を1つ1つ捕まえ、背表紙を撫でるのは大変だろうけどさ。

「わあ、レイ！　あなたってすごいわ！　ありがとう！」

ハーマイオニーは、私に勢い良くガバッと抱きついてきた。

うう、喜んでくれるのはいいけど、苦しい……欧米人スキンシップ過剰だ……。

なんてしばらく思っていたら、やっとハーマイオニーが離してくれた。

そして私達は、ハーマイオニーが梟が欲しいということで、見に行くことになった。

ペットショップの店内はいろんな動物の臭いがして、しかも壁一面のゲージから、ガーガー、キャンキャン、シューシューと鳴き声が響いていた。

梟を買うついでに、ロンの鼠の具合が良くないので診てもらう。

ロンはポケットから鼠を出し、店員に差し出した。

鼠のスキャバーズはかなり痩せていて、髭もダランと垂れていた。

店の鼠と比べてもヨボヨボで、しかも前足の指が1本欠けていた。

店員は、しばらくスキャバーズを診てから、ロンに「ネズミ栄養ドリンク」をすすめようとした。

その時、私の顔をチラッと見たスキャバーズが、キィィッ!!　と悲鳴を上げて飛び上がった。

ありゃりゃ、私嫌われたのかな。

次の瞬間！

オレンジ色の毛玉が、シャーシャーっと音をたてて、スキャバーズ目がけて飛びかかってきた。

「コラッ！　クルックシャンクス、ダメッ！」
店員は叫んだけど、オレンジの毛玉はスキャバーズを追いかけて店を出て行った。
ロンとハリーがその後を追いかける。
しばらくして、スキャバーズは見つかったみたいだけど、ロンもハリーも疲れた顔をしていた。
ところが、ハーマイオニーは、このオレンジの毛玉……じゃなかった、猫を気に入ったらしい。
なんとこの猫（クルックシャンクスという名前だそうだ）を飼うことにした。
これには、ロンが猛反発していたけど、もう買っちゃったものは仕方ない。
それにしても、クルックシャンクスって、舌を噛みそうな名前だ。

そして私達は漏れ鍋に戻る。
メガネをかけた頭の薄い中年魔法使いが、新聞を読みながらカウンターに座っていた。
彼はハリーと知り合いらしく、2人はブラックのことについて話をしていた。
ブラックは残念ながら、まだ捕まってないようだった。

「ところで、レイ・キサラギは君かい？」
中年の魔法使いが、私に気づいたみたいだ。
「はい。私です」
「私はアーサー・ウィーズリー。そこいるロンの父親だ。ホグワーツに編入する君を、キングズクロス駅に案内するように頼まれた」
言われてみれば、確かにロンに似ている。
「如月伶です。よろしくお願いします、ミスター・ウィーズリー」
私は、ロンのお父さんと笑顔で握手をした。

その時、山のような荷物を抱え、赤毛の集団が店内へ入ってきた。
体格の良い中年の優しそうなおばさん。
イタズラっぽい目をした双子。
メガネをかけた生真面目そうな若い魔法使い。
ハリーを見て、真っ赤になった女の子。
みんなロンの家族だった。

中年女性が、ロンのお母さんのモリーさん。
双子はロンのお兄さん、フレッドとジョージ。
メガネの人もロンのお兄さんで、パーシー。
で、女の子がロンの妹のジニー。

家族多いなあ、とか思っていたら、実はロンにはあと2人お兄さんがいるらしい。

夕食はハリー、ハーマイオニー、ロン、ウィーズリー家のみんなと一緒に食べた。
ジニーは時々ハリーをチラチラ見て恥ずかしそうにしていて、食事の間全然喋らなかった。
アーサーおじさんや双子は、私に日本の魔法学校のことをいろいろ尋ねた。
けど「侍」や「忍者」なんて、今時いないよ！

その夜は、ハーマイオニーとジニーと一緒の部屋で寝ることになった。
2人から、授業のことや、ホグワーツに住んでいるゴーストのことを、教えてもらった。
ジニーは人見知りするタイプだと思っていたら、実はそうでもないようだ。
なかなかお喋りで、話上手だったよ。

「ハリーのことが好きなの。でも本人の前に来ると、緊張して上手に話せなくて、困ってるの」
って、ジニーは言っていた。

明日はいよいよホグワーツ。
けど、シリウス・ブラックが捕まっていないことだけが気がかりだ。

６・ホグワーツ急行

翌朝、魔法省の車でキングズクロス駅まで送ってもらった。
ホグワーツ急行が出発するのは、９と４分の３線。
ホームへ行くには、９番線と１０番線の間の柵に突っ込まないといけないらしい。
父さんから聞いてたけど、柵に突っ込むのはちょっと怖いよ。

まず、ハリーとアーサーおじさんが通り抜ける。
アーサーおじさんは、ハリーのカートを押し、９番線のマグルの列車を興味深そうに見ていた。
そして、ハリーに目配せし、何食わぬ顔で柵に寄りかかり、ハリーもその真似をした。
２人の姿がスーッと柵に吸い込まれて消えた。

「レイ、わかった？　私も初めての時は、とても怖かったけど、一度やればコツはつかめるわ」
ハーマイオニーが荷物のカートを確認しながら言う。
「うん、わかった」
私は深呼吸して、９番線と１０番線の間に向かって、カートを押す。

【えらく人が多いな。９月１日やけん、仕方ないけど】
カートに載せた鳥籠で、ヒキャクが目をキョロキョロさせていた。

「ついて来て。怖かったら走ってもいいけど、立ち止まっちゃダメよ」
私は壁に吸い込まれるハーマイオニーの背中を追って、壁に突っ込んだ。
次の瞬間、赤いＳＬが停まるプラットホームに出た。
よし、看板は「９と４分の３」と書かれている！

荷物を列車に積みこんだあと、モリーおばさんは子供達と別れのキスをし、私、ハーマイオニー、ハリーをギュッと抱きしめてくれた。
その後、ハリーはアーサーおじさんに呼ばれて少し話し込んでいたようで、発車寸前になり、ハリーは列車に駆け込んできた。

ハリーはロンとハーマイオニーを呼んで言った。
「君達だけに話したいことがある」
その言葉を聞いて、ロンはジニーを追い払う。

「その話って、まさかシリウス・ブラックのこと?」
私が尋ねたら、3人は固まった。
「あ、話を聞いちゃマズイんなら、私、席外すよ」
そう言うと、3人は顔を見合わせてから、一緒に居てもいいと言ってくれた。

それから私達は、人がいない客室を探して、とうとう最後尾までやってきた。
で、やっと空いている場所を見つけたんだけど……。

「《うわっ、父さん!!?》」
ホグワーツ急行に乗るなんて、聞いてない!
ていうか、ホグワーツにいるんじゃないの!?

「レイ、どうしたの。急に大きな声出して?」
ハリーに尋ねられ、慌てて何でもないと答えたけど、内心冷や汗モノだ。
危ない、危ない!
叫んだのが日本語で良かった。
英語だったら一発で親子だってバレてたぞ。

父さんは窓側の席でグッスリ眠っていた。

にしても、もう少しマシなローブはなかったの？
なにもこんなツギハギを着なくてもいいのに。

「この人誰だと思う？」
ロンがひそひそ尋ねた。
「ルーピン先生」
ハーマイオニーが、トランクの名札を見て答える。
彼女は父さんが新任の「闇の魔術に対する防衛術」の教授だと気づいたみたいだ。

「ま、この人がちゃんと教えられるならいいけど。強力な呪いをかけられたら一発で参っちまうように見えないか？」
ロンがさり気なく失礼なことを言うので、私は「人は見かけによらないよ」と抗議した。

落ち着いたところで、ハリーはアーサーおじさんとの話の内容を教えてくれた。
やはり、シリウス・ブラックの狙いはハリーらしい。
そういえば、父さんもこの前電話で、同じことを話してたな。

その時、ハリーのトランクからヒューヒューと音が聞こえてきた。
鳴っていたのは、スニーコスコープだ。
きっと私に反応したんだ。
そこで寝ているのが、自分の父親だってこと隠してるからだよね。

そのうちスニーコスコープの音が酷くなって、父さんが起きるんじゃないかと心配になった。
だから、スニーコスコープをハリーにしまうように頼んだ。

今度はホグズミードの話になった。
ホグズミードはイギリス唯一の魔法使いだけの村だ。

３年生以上は休暇の時にそこに行く許可が出るけど、ハリーは許可証に保護者のサインがもらえなくて行けないらしい。

あ、私もまだサインもらってないや。

私の場合はいつでももらえるから、まあいいか。

するとロンが、ハリーが許可証にサインをもらえないなら、フレッドとジョージに学校から抜け出す秘密の道を教えてもらえば良いと言い出した。

「ロン！　ブラックが捕まってないのに、ハリーは学校から抜け出すべきじゃないわ！」

ハーマイオニーが、ピシャリと言った。

「私も同感だ。ブラックは１３人を一瞬で吹っ飛ばしたんだ。１人ぐらい殺すのは朝飯前だよ。もし、奴の狙いが君なら、学校を抜け出すのは自殺行為だよ？」

私の言葉にうなずいて、ハーマイオニーはクルックシャンクスの入った籠の紐を解こうとした。

ロンが嫌がったけど、クルックシャンクスは籠から飛び出し、ロンの膝の上に乗っかった。

ロンのポケットが、ブルブル震える。

きっとスキャバーズが入っているに違いない。

「どけよ！」

「ロン、やめて！」

ロンとハーマイオニーが激しく言い争った。

しばらくして、車内販売の魔女がやってきた。

ハーマイオニーが、何か食べた方がいいと、父さんを起こそうとしてくれた。

だけど、父さんはやっぱり眠ったままだった。

まあ、新学期の準備とか、ブラック対策で忙しかったから疲れてるんだろう。
それに満月は、もうすぐだったっけ。

「ところで寮は、どうやって決めるの？父さんに聞いても教えてくれなかったんだ」
私はチラッと父さんの方を見て言ったら、ハリーが教えてくれた。
「帽子をかぶるんだ。そしたら帽子が寮の名前を叫ぶんだよ」

帽子をかぶるだけか。
良かった、難しい試験とかじゃなくて。

ちなみに青龍学院には、国語と算数の入学試験がある。
でもクラス分けは、単純明快にクジ引きだった。
ホグワーツだと寮は7年間変わらないらしい。
けど、中高一貫の青龍では、高等部に進級した時に一度だけクラス替えがあるんだ。

しばらくして客室に人が来た。

ハリー達3人が、心底嫌そうな顔をする。
顎の尖った青白い少年が、がっちりしたゴリラっぽい奴を2人引き連れている。

「へえ、誰かと思えば。ポッター、ポッティーのいかれポンチと、ウィーズリー、ウィーゼルのコソコソ君じゃないか！」

うわ、何だコイツ。
後ろで、お供のゴリラ2人もトロールみたいに笑っているし。

「ところで、そいつらは誰だ？」

青白い少年は、父さんと私を指差して言った。

「こちらで眠っているのは新任のルーピン教授。で、私は如月伶。日本の青龍学院魔法学校からの編入生。ちなみに私は日本人だから、苗字は『如月』の方。それと君、人を指差すのは失礼だと親に教わらなかった？」

私がイライラと答えると、青白い少年は一歩引いた。

「キサラギ……？　まさか日本の魔法大臣の孫娘が編入するって⁉」

「うん、それは私のことだね。それが何か？」

「父上が仲良くするようにとおっしゃった。僕と向こうに行こう。こんな連中と一緒にいるのはダメだ。傷モノのポッターに、純血とは名ばかりの貧乏ウィーズリー、穢れた血のグレンジャー……」

は、「穢れた血」って、有り得ない！

「断る。さっきから君は本当に失礼だね。この3人は私の友達だよ。友達を悪く言う奴とは、仲良くできない。特にハーマイオニーに謝れ。マグル生まれを侮辱するなんて魔法使いの風上にも置けない」

すると失礼少年は顔を真っ赤にした。

「それに私は、まだ君の名前を聞いてない。親に教わらなかった？人に名前を尋ねる時は、自分から名乗れって」

すると、やっと失礼少年はドラコ・マルフォイと名乗り、ゴリラ2人を連れて出て行った。

ハリー、ハーマイオニー、ロンはその様子を楽しそうに見ていた。

「マルフォイの奴、いい気味だ！……それにしてもレイ、何で教えてくれなかったの⁉　お祖父さんが、日本の魔法大臣だって！」

ハリーが私に尋ねた。

「ああ。別に隠してたわけじゃないけど、特に言う必要もないと思っ

てさ」

そう私が答えると、ハーマイオニーは得意げに言った。

「あらハリー。私はレイの苗字を聞いて、すぐそうかなって思ったわ。日本のカオル・キサラギ大臣って、とっても有名な方よ。元々は魔法薬学者で、数々の成果をあげているの。ベアゾール石の解毒作用に関する研究とか、トリカブト系脱狼薬の開発とか……」

ちなみにお祖父ちゃんの名前は、漢字では「如月薫」と書く。

「もういいよ、ハーマイオニー。とにかくレイのお祖父ちゃんは、エライ人だってことはわかった。けど、本当にスカッとしたよ！　見たか、あのマルフォイの顔！」

ロンがすごく嬉しそうだった。

どうやら、あのドラコ・マルフォイは、ハリー、ロン、ハーマイオニーの天敵のようだ。

家が純血の旧家っていうのを鼻にかけるお坊っちゃまで、寮はスリザリンらしい。

けど、あんな騒動があったのに、まだ父さんは眠っていた。

7・吸魂鬼（ディメンター）

しばらくして、列車が急に速度を落とし始めた。
まだ着かないはずだと、ハーマイオニーが時計を見て言う。
窓の外は真っ暗で、風が強く雨も激しく、まるで台風のようだ。
やがて、汽車は完全に止まった。

突然明かりが消え、室内は真っ暗になってしまった。
「一体何が起こったんだ？」
「イタッ！」
「今の私の脚だったのよ！」
ロンがハーマイオニーの脚にぶつかったらしい。
ロンが曇った窓ガラスを拭き、外の様子をうかがう。
「なんかあっちで動いてる。誰か乗り込んでくるみたいだ」

その時、誰かが客室に入ってきた。
どうやらネビルという名前の男の子で、ハリー達の知り合いらしいけど、顔はよく見えない。
真っ暗なせいで、今、何がどうなっているのか、さっぱりわからない。
「そうだ、梟達に聞いてみよう！梟は暗いところでも、目がよく見える」

「レイ、梟に聞くって、どうやって？」
ロンが言った。
「そうか、その手があった」
ハリーの声がした。
「レイ。もしかして『鳥語聞き』なの？」
ハーマイオニーが言った。
「うん、そうだよ。とにかく、聞いてみる」

私は、キラキラ光る４つの目を見て尋ねた。
「ヒキャク、ヘドウィグ、どう？　何か見える？」
【よ～わからんけど、向こうから女の子が来よる】
【あれはジニーよ】
ヘドウィグが言ったと同時に、ジニーが入ってきた。

「ジニー、大丈夫？」
「その声は、レイ？」
「入って、ここに座れよ…」
「ここじゃないよ！　ここには僕がいるんだ！」
「アイタッ！」
暗いから大混乱だ。
しかも９月なのに、なんだか寒気がしてきた。
なんだかものすごく嫌な予感がする。
父さんを起こさないとヤバイ。

「起きて！　起きて下さい、父さ・・じゃなかった、ルーピン先生!!」
かなり乱暴に揺さぶると、やっと父さんは目を覚ました。

「静かに！」
寝起きでかすれ気味だったけど、父さんの声は不思議とよく響く。
みんながピタッと動きを止めた。
そして、父さんは手のひらに灯りの炎を持って立ち上がり、鋭い目つきで辺りを警戒した。
「動かないで」

その時、客室のドアがスーッと開いた。

寒気が激しくなり、一気に全身にザワザワと鳥肌が立った。
手足の先から凍りついていくような気がした。

そこに立っていたのは、黒い長いマントを着た影のようなモノ。
マントから伸びる手は蝋のように白くて、かさぶただらけだ。
これって、まさか吸魂鬼（ディメンター）!?

吸魂鬼は、ガラガラと空気を吸い込むような音をたてながら、客室内をぐるりと見渡した。
ハリーが突然、硬直して席から転がり落ちる。
「「は、ハリー!!?」」
私、ロン、ハーマイオニーの声が重なった。

父さんが杖を取り出し、倒れたハリーを跨いで、吸魂鬼に向かう。
そして、鋭く言い放った。
「シリウス・ブラックをマントの下に匿っている者は誰もいない。去れ」
けど、吸魂鬼は動かなかったので、父さんは杖を吸魂鬼に向け、呪文を唱えた。

「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ！」
杖から発射された銀色の物体が吸魂鬼を攻撃する。
やがて、吸魂鬼はスーッといなくなった。

間もなくハリーが目を覚ました。
父さんが、トランクから巨大な板チョコを取り出して割り始めた。
そして一番大きな欠片をハリーに渡し、私を含めた客室内のみんなにもチョコレートを配る。

父さんは今起こったことをみんなに説明した。
やっぱり、今のはアズカバンの看守、吸魂鬼だった。
きっと、逃げたシリウス・ブラックを追ってきたんだ。

父さんはハリーにチョコを食べるように言って、運転手と話す為に客室を出た。
とりあえず、私はもらったチョコをかじると、体が温まってきた。
しばらくして、父さんが戻ってきたけど、私以外誰もチョコを食べていなかった。
見かねた父さんが、ふっと笑う。
「おやおや、チョコレートに毒なんか入れてないよ……」
父さんのセリフに、思わず私は笑った。
「ふふっ、ハリー、食べないんだったら、私がチョコもらうよ？」
すると、ロンからツッコミが来た。
「おいおい。レイはさっき食べてただろ？」
「あ、バレた？」
私がペロッと舌を出すと、客室が爆笑に包まれた。
「イッチ年生は、こっちだ！」
汽車を降りると、巨大な男が1年生を誘導していた。
ホグワーツの森番、ルビウス・ハグリッドだ。
父さんの昔のアルバムで、写真を見たことがある。
私達は湖とは逆の馬車道へと向かう。
そこには、１００台ぐらいの馬車が止まっていたんだけど、引いている馬を見てゾッとした。
それはただの馬じゃなくて、ツヤのある巨大な翼を持ち、真っ黒い骨と皮だけのような姿だった。
目は白く濁り、どこを見ているのかわからない。
「レイ、馬車がどうかしたの？」
ハーマイオニーに尋ねられ、我に返る。
え、ハーマイオニーには、あの変な馬みたいな生物が見えないの？

すると、父さんが一緒に乗ろうと声をかけてきた。
父さんと私が乗り込むと、馬車の扉が自動で閉まり、動き出した。
父さんがホグワーツ急行に乗っていたのは、やはりシリウス・ブラック対策だったらしい。
ちなみにあのトランクには、ロンドンで仕入れた教材などが入っているそうだ。

「伶、大丈夫だったかい？　ダンブルドアは、ホグワーツの警備の為に吸魂鬼を受け入れた。だから、万が一に備え、チョコレートを準備していた。さすがに、吸魂鬼が列車に乗り込んで来たのは、予想外だったが」
「大丈夫、私は寒気がしただけ。でも、ハリーが心配だよ。倒れてたし」
「伶、いつの間に、ハリーと仲良くなったんだい？」
「漏れ鍋で一緒だったんだ。ハリーって、本当にジェームズさんにそっくりだね」
すると、父さんは昔を懐かしむように、ゆっくりうなずいた。

「ホグワーツに着いたら、まずダンブルドア先生に吸魂鬼の件を報告をしなければ。あと、組み分けの説明もあるから、伶も一緒に来なさい」
「うん、わかった。ところで、この馬車を引いているのは何？」
「セストラルだ。そうか……伶なら、見えても不思議じゃないね」
セストラルは人が亡くなる瞬間を見て、かつその死を実感した者にしか見えないらしい。
私は3年前、お祖母ちゃんが胃ガンで亡くなる時に立ち会っていたから見えたのか。

「伶、見てごらん。あれがホグワーツだよ」
父さんが指差す方向に、巨大な建物が見えてきた。
テンションが上がってきたけど、それに水を差すように、門には吸魂鬼が立っていた。

ふと父さんがポケットから何かを取り出した。
「そうだ、伶。君にこれを渡しておこう」
渡されたのは古びた鍵だった。
「僕の部屋の合鍵だ。失くさないように気をつけて。用があったら、遠慮なく訪ねてくるといい」

8・組み分け

やがて馬車がホグワーツに着く。
ホグワーツへ続く石段は生徒達でごった返していた。
私達もその流れにのって、石段を登る。
玄関に着くと、私と父さんは校長室へ向かった。

しばらく廊下を歩いてから、父さんは巨大なガーゴイル像の前で立ち止まった。
父さんが像に向かって「アーモンドチョコレート」と言う。
すると、像がピョンと動き、螺旋階段が現れる。
階段に立つと、まるでマグルのエスカレーターのように階段が動いてグルグルと上に運ばれた。

「おお、リーマスにレイ。待っておったぞ」
部屋に入ると、ダンブルドア校長が出迎えてくれた。

「レイ、ホグワーツにようこそ」

校長室は広い円形の部屋だった。
壁には歴代の校長の動く肖像画が飾ってある。
そして室内には、様々な魔法道具が置いてあった。
奥には金色の止まり木があり、燃えるように紅い羽をした鳥がいた。
長い尾羽は金色で、美しく光り輝いている。
これがダンブルドア校長のペットの不死鳥かな？

【アルバス、彼女が噂のサトル・キサラギの姪っ子か？】
不死鳥は威厳たっぷりに、ダンブルドアに話しかけた。
「そうじゃよ。さあレイ、紹介しよう。わしの相棒、フォークスじゃ」

「初めまして、如月伶……伶・アルメリア・如月・ルーピンです。よろしくお願いします」
私はフルネームで自己紹介する。

「ところで、あなたは悟叔父さんを知ってるんですか？」
【ああ、知っとるとも。学生時代の彼は、我の良き話し相手であった。何しろアルバスの他に、我の言葉を解するのは、彼ぐらいしか居らなんだったからのう】
そう言って、フォークスはパタパタと羽を震わせた。

「さて、リーマス。梟便で手紙を送った件について、話を聞こうかのう」
ダンブルドアに促され、父さんは列車での出来事について報告した。
しばらくダンブルドア校長は、話を厳しい顔つきで聞いていたけど、ふと私に尋ねた。
「レイは大丈夫だったかね？」
「はい。でも、怖かったです。もし、父が乗り合わせてなかったらと思うと、ゾッとします」

報告が終わると、父さんは先に大広間へ向かい、私は寮や得点制度について説明を受けた。

その時、ドアがノックされた。
入ってきたのはスネイプだ。

「校長、組み分け帽子をお借りしに参りました」
「頼んだぞ。セブルス」
ダンブルドア校長は、スネイプに古びた魔法使いの三角帽子を渡した。
その帽子のボロさ、父さんのローブといい勝負だった。

あれを頭へ載せて寮を決めるんだな。

スネイプは私に言った。

「これから組み分けを行う。お前は編入生なので最後だ。呼ばれるまで、しばらく待機しろ」

やがてスネイプが戻ってきて、私を大広間へ連れて行った。

大広間には、４つの長テーブルが置かれていて、生徒が各寮に分かれて座っていた。

テーブルの上には何千ものロウソクが浮いている。

中央正面には、三本脚のスツールの上に、さっきの古帽子が置かれていた。

側には、髪をひっつめにした四角いメガネの魔女が立っている。

あ、ミネルバ・マクゴナガル！

２０世紀で、全世界合わせて7人しかいない登録アニメーガスの１人じゃん！

青龍学院にいた時、変身術の授業で習ったぞ。

そんなすごい人が先生って、ホグワーツ恐るべし。

「今年は3年生に編入生が入ります。ミス・キサラギ、前へ」

マクゴナガル先生に呼ばれ、前に出て自己紹介する。

「如月伶です。日本の青龍学院魔法学校から来ました。よろしくお願いします」

実は、小学5年生の時、１度転校したことがある。

父さんが青龍で働くことが決まり、それにともなって学校の近くに引っ越すことになったんだ。

けど、その時よりも2倍緊張したよ。

なんといっても、１０００人近い全校生徒が、私に注目しているん

だから。
とにかく、私はスツールに腰掛け、帽子をかぶる。
すると、組み分け帽子がテレパシーのように話しかけてきた。
（リーマス・ルーピンとアズサ・キサラギの娘か。ほう、お主も「鳥語聞き」だな。さすが日本の名門、キサラギ家の子じゃ。優れた頭脳と冷静な思考力、そして魔法の才能にも恵まれている……ならば、入れるとすればレイブンクロー……）
レイブンクローなら悪くないな。
けど、せっかくホグワーツに来たんなら、父さんや母さんと同じ寮が良いかなあ。
（ほう、その手があった。確かに。困った人間を見ると放っておけず、すぐさま手を差し伸べる行動力、お主にはそちらの方が向いておるかもしれぬ）
帽子は高らかに叫んだ。
「グリフィンドール!!」
グリフィンドールのテーブルから「編入生を獲得したぞ!!」と歓声が上がった。
フレッドとジョージが、ピューと口笛を吹いている。
私はハーマイオニーの隣に座った。
ちなみにグリフィンドールの寮監は、あのマクゴナガル先生らしい。
ちなみに彼女は、副校長でもあるそうだ。
「あの者達が、危害を加える口実を与えるでない。吸魂鬼に許しを乞

うても、出来ぬ相談じゃ」
前では、ダンブルドア校長が吸魂鬼について、注意事項を述べていた。

その後、新任の先生として父さんが紹介されると、パラパラとやる気がない拍手が起こった。
けど、父さんの活躍を目撃したハリー、ロン、ハーマイオニー、ジニー、同じ客室にいた丸顔の男の子（ネビル・ロングボトムという名前らしい）は、大きな拍手をしてくれた。

一方、スネイプは、憎々しげに父さんを見ていた。
まあ、いろいろ思うところがあるんだろうね。

次に森番のハグリッドが、魔法生物飼育学の先生として紹介されると、盛大な拍手が起きる。
「そうだったのか！　噛み付く本を教科書指定するなんて、ハグリッド以外にいないよな？」
ロンがテーブルを叩きながら叫ぶ。

「え、ハグリッドって、そういう人なの？」
私が尋ねると、ハーマイオニーが答えた。
「レイ、ハグリッドは良い人よ。けど、凶暴な生き物が大好きっていう、困ったところがあるの」
「そうそう、前にドラゴンを飼おうとして、大騒動になったんだよ」
ハリーもハーマイオニーに同意した。

「さあ、宴じゃ！」
校長が宣言すると、目の前に食べきれないぐらいのご馳走がズラリと並んだ。

漏れ鍋の食事もおいしかったけど、ホグワーツの料理は格別だ。

ホグワーツの料理、すっごくおいしい！
青龍時代の担任・高砂先生は「料理がマズイんじゃないか」と心配してたけど、杞憂だったね。
特にデザートのチョコレートサンデー!!
今まで食べてきた中で、いちばんおいしかった！
だけど、キャロットグラッセはいらない。
人参は嫌いなんだ!!

宴会が終わると、ハリー達3人は私を連れ、ハグリッドの所に行く。
「おめでとう、ハグリッド！」
ハーマイオニーが歓声を上げた。
ハグリッドは、魔法生物飼育学の先生になれたことに嬉し泣きしていた。

私はハグリッドとは初対面なので、自己紹介する。
「初めましてハグリッド教授。如月伶です。よろしくお願いします」
「おおっ、お前さんがレイか。アズサにそっくりだ！　あ～、俺のことは、ハグリッドって呼び捨てで構わねえ。よろしくな」
そう言って、彼は涙でグシャグシャの顔をナプキンで拭った。

「ミス・キサラギ、ミス・グレンジャー」
マクゴナガル先生が、私とハーマイオニーを呼んだ。
「ミス・キサラギ、ようこそグリフィンドールへ。寮監のミネルバ・マクゴナガルです」
マクゴナガル先生って、真面目で厳しそうだ。
こりゃ逆らっちゃダメだな。

「ミス・キサラギは、ミス・グレンジャーと2人部屋になります。ミス・グレンジャー、貴女の荷物は新しい部屋に移動してありますので、確認なさい」

寮の部屋はなかなか快適そうだった。
ベッドは日本ではあまり見かけない天蓋付きだ。
机と小さな本棚があって、勉強もはかどりそうだね。
何よりルームメイトが、知り合いのハーマイオニーなので、ちょっと安心だった。

9・再会

翌朝、私達が朝ご飯を食べに大広間に行くと、ドラコ・マルフォイが、ハリーが吸魂鬼に襲われて気絶したことでからかってきた。
ま、相手にするのも馬鹿馬鹿しいので、みんなでスルーしたけどね。

ご飯を食べながら時間割を確認すると、私のホグワーツでの最初の授業はマグル学となっていた。

それにしても、ハーマイオニーの時間割が変だった。
同じ時間に占い学、マグル学、数占い学が重なっている。
3つの授業にどうやって同時に出るんだろう？
マクゴナガル先生と一緒に決めたから大丈夫だって、ハーマイオニーは言っていたけど。

そして、朝食が終わると、ハーマイオニーは、ハリーやロンと一緒に占い学へ行ってしまった。
あれ？
でも、マグル学の方はどうするんだろう？

「伶！」
大広間を出ようとすると、誰かが私を呼んだ。
振り返ると知り合いだ。
印象的な切れ長の黒い目、スッキリ通った鼻筋、サラサラの黒髪で背が高い美少年。

私は日本語で返事をした。
「≪晶（あきら）じゃん！　ホグワーツにいたんだ！≫」

彼は橘晶（たちばな　あきら）。

父さんが青龍学院で働く前、私達は彼の家の近所に住んでいた。
私が引っ越すまで、同じ小学校に通っていたんだ。
ちなみに彼の実家は、日本では有名な魔法病院で、そこは父さんのかかりつけでもあった。

「《ああ、俺、1年生の最初からココにいるんだ。俺も3年生だから、ヨロシクな》」
「《3年生？　小学校の学年は1つ下だったのに？　あ、そっか、ここイギリスだもんね》」
私は2月生まれで、晶は同じ年の8月生まれ。
イギリスだと9月から学年が始まるから、晶は私と同じ学年になるんだね。

「《しっかしお前、何でグリフィンドールになるんだよ。うちの寮だったら、一緒にクィディッチできたのに。残念だぜ》」
晶の寮はハッフルパフだそうで、ローブに穴熊の紋章がついていた。

「《それにしても、お前が来たのもビックリしたけど、何で、お前のお父さ・・うぐっ！》」
「《しーっ！声が大っきい！》」
私は反射的に晶の口を塞ぐ。
日本語だから良かったけど、英語なら一発アウトだ。

「《ゲホッ！　何すんだ、いきなり!?》」
咳き込んで涙目で睨む晶を無視し、事情を話す。
晶には、私と父さんが親子であることと、父さんの「持病」について黙っておくように頼んだ。
晶も父さんの持病を知っているからね。

「《ところで晶、今から何の授業？》」

私が尋ねると「マグル学」だと教えてくれた。
「《ラッキー！　他の友達はみんな占い学に行っちゃったから、知ってる人が一緒でよかったよ》」
「《俺も。周りは占い学を取る奴ばかりで、マグル学はアーニーぐらいしか居なくてさ。しかもアイツ、俺を置いてさっさと行きやがったし！》」

そして、私は晶と歩き始めた。
途中、動く階段とか、動く壁とかにおっかなびっくりしながら、なんとか教室に着く。

「レイ、こっちよ！」
晶と一緒に教室に入ると、何故かハーマイオニーが先に席に着いていた。
え、さっき君はハリーやロンと占い学に行ったんじゃ？

「あら。ミスター・タチバナと知り合いなの？」
ハーマイオニーが私と晶を見て尋ねると、晶が英語で答えた。
「俺と伶は幼馴染なんだよ。実は俺に英語を教えてくれたのは、伶のお父さんなんだぜ。俺、彼に憧れて、この学校に入ったんだ」
へぇ、晶がホグワーツに留学したのは、父さんの影響だったのか。

「あれ、アキラ。編入生の子と一緒だったんだ？」
ハーマイオニーの斜め後ろで、ぽっちゃりした男の子が晶を呼んだ。
「アーニー！　よくも俺を置いてけぼりにしたな!?」
晶がジロりと睨みつけたら、男の子は「ごめん、ごめん」と謝る。
それからオッホンと咳払いをして、私に自己紹介した。

「始めまして。僕はアーニー・マクミランといいます。寮はアキラと同じハッフルパフです。よろしくお願いします」

アーニー・マクミランは、育ちが良さそうなおっとりとした雰囲気の少年だった。
どっかの失礼坊ちゃまとは大違いだ。
「如月伶です。寮は昨日組み分けされたとおり、グリフィンドール。晶とは昔からの知り合いです。こちらこそ、よろしくお願いします」
私も笑顔で自己紹介をした。

そうこうしていると、担当のチャリティ・バーベッジ先生が入ってきた。
まだ若くて明るい魔女だ。
彼女はクラスを見渡して言った。

「この授業の趣旨は魔法使いとマグルの相互理解を深めることです。マグルは、魔法を使えませんが、その代わり科学技術を駆使して様々なものを発明し、生活を便利にしてきました。ところで、マグル出身、又は身内にマグル出身者がいる生徒に言っておくわ、」
バーベッジ先生は一旦言葉を切る。

「簡単に単位が取れると思ったら大間違いよ。私、レポートをいっぱい書かせるの大好きだから、覚悟しといてね～！」
てへっと、バーベッジ先生は可愛く笑ったけど、言われた私達生徒は笑えないよ。

まあ、授業は悪くなかったかな。
今学期はマグルの生活について学ぶという。
始めに、今日はマグルの家事について講義があった。
そして、さっそく「マグルと魔法使いの洗濯方法の違いについて羊皮紙1巻半論述せよ」というレポート課題が出た。

授業の後、晶と別れ、私とハーマイオニーは変身術へ向かった。

教室の前に着くと、ハーマイオニーが言いにくそうに切り出した。
「レイ、悪いけど先に行っててくれないかしら。ちょっとお手洗いに行ってくるわ」

１０・条件反射？

次は、マクゴナガル先生の変身術の授業だ。
授業開始ギリギリになって、ハリーとロン、そしてどういう訳かハーマイオニーまで一緒に駆け込んできた。
ハリーは一番後ろの席に座ったけど、何故かクラスのみんなは、ハリーのことをチラチラ盗み見ていた。

授業が始まった。
マクゴナガル先生が、みんなの前で動物もどき（アニメーガス）の実演をしてくれることになった。
うわー、ラッキー!!
まさかこんなに早く、彼女の変身が見られるなんて！

先生がオホンと咳払いをして目を閉じると、みるみる体が縮む。
そして、トラ猫の姿に変わった。
目の周りにメガネと同じ形の模様がある。
私がパチパチと拍手をすると、すぐ先生は元に戻った。
「おや何故ミス・キサラギ以外、誰も拍手をしないのですか？」

あ、本当だ。
私以外、誰も手を叩いていないぞ！

するとハーマイオニーが、占い学でハリーが死ぬという予言をされたことを話した。

変だな？
ハーマイオニーは私と一緒にマグル学に出ていたはずだ。
なのに、どうして占い学で起きたことを説明できるんだろう？

するとマクゴナガル先生は、占い学のトレローニー先生が最初の授業で生徒の死を予言するのは、毎年の恒例行事なのだと説明した。

それからマクゴナガル先生は言った。

「ポッター、私の見るところ、貴方は健康そのものです。ですから、今日の宿題は免除したり致しませんからそのつもりで。ただし、もし貴方が死んだら、提出しなくても結構」

私とハーマイオニーは、同時に吹き出した。

お昼を食べながら、ロンはまだハリーの死の予言を心配していた。

するとハーマイオニーは、占い学そのものがいい加減だと言い出した。

「レイ、あなたは占い学を取らなくて、正解だわ。あんな不確かなもの、学問とは呼べないわ」

「トレローニー先生は君にまともなオーラがないって言った！　君ったら、たったひとつでも、自分がクズに見えることが気に入らないんだ」

ロンがそう言うと、ハーマイオニーが教科書をガン！　とテーブルに叩きつけた。

ハーマイオニーは「占い学なんてクズだ！」とか言って、大広間を出て行ってしまった。

次は魔法生物飼育学で、外での授業だった。

失礼少年マルフォイが、お供のゴリラ（クラッブとゴイルというらしい）といるのが見えた。

どうやら、スリザリンと合同授業になるようだ。

生徒がそろうと、ハグリッドは、みんなを放牧場に連れて行った。

「イッチ番先にやるのは、教科書を開くこった」
ハグリッドの言葉にマルフォイが気取った声で、「どうやって？」と尋ねる。
周りを見れば、みんなはあの怪物本をベルトで縛ったり、スペロテープでグルグル巻きしたり、大きなクリップではさんだりしていた。

そんな中、私、ハリー、ロン、ハーマイオニーの４人だけは、教科書をさっと開いて見せる。
すると、ハグリッドは嬉しそうに「お前さん達、どうやった？」と尋ねた。
私が背表紙を撫でたと答えると、ハグリッドはますます嬉しそうだった。
「そう、撫ぜりゃーよかったんだ」とハグリッドは言った。

放牧場の向こうには、馬と鷲を足したような巨大生物がいた。
「ヒッポグリフだ！美しかろう」
ハグリッドが自慢顔で言った。
確かに、鷲のような貫禄たっぷりな頭や、灰色、栗毛、赤銅色などの毛並みはキレイだよね。

「まんず、イッチ番先にヒッポグリフについて知らねばなんねえことは、こいつらは誇り高い。すぐ怒るぞ、ヒッポグリフは、絶対、侮辱してはなんねぇ」
ハグリッドは、ヒッポグリフについて解説する。

その後、ハリーを指名して、バックビークという名の灰色のヒッポグリフを連れて来た。
ハリーはハグリッドに言われるとおり、バックビークにお辞儀した。
すると、バックビークが、お辞儀を返してきた。

ハグリッドは大喜びで、ハリーにクチバシを撫でさせた。

それから、ハグリッドは、ハリーに背中に乗るように言った。
ハリーがバックビークの背中に飛び乗ると、ハグリッドは勢いよくバックビークの尻を叩く。
すると、４ｍはありそうな巨大な翼でヒッポグリフは空へ舞い上がった。
ハリーを乗せたバックビークは、辺りを一周すると、ドシンと着地した。

ハリーの成功を見て、私達もヒッポグリフに挑戦だ。
私は赤銅色のヒッポグリフと対面した。

まず、瞬きせず目をじっと見つめる。
それからお辞儀をして、「よろしくお願いします」と挨拶だ。
すると【うむ、良かろう】という声が聞こえた。

驚いて顔を上げると、ヒッポグリフがお辞儀を返しながら言った。
【そなた、拙者の言うことが理解できるとみえる。もしや『鳥語聞き』では？】
「ええ、そうです。でも、まさかヒッポグリフとも話ができるとは思いませんでしたが」
【鳥語聞きの娘よ、拙者のクチバシを撫でるが良い】
などと、私がヒッポグリフと話していると「ヒィーっ!!」とマルフォイの悲鳴が聞こえた。
【この無礼者！『醜いデカブツの野獣』などと、我を愚弄（ぐろう）しおって!!】
鋭い鉤爪が、マルフォイの腕を切り裂く。
どうやらマルフォイはハグリッドの注意を無視して、バックビークを激怒させたらしい。

ハグリッドは、慌ててバックビークをなだめ、首輪をつける。

私はチッと舌打ちして、マルフォイに駆け寄った。

あの馬鹿！

ハグリッドが「侮辱するな」って注意したのに！

マルフォイの腕には、深い長い裂け目ができていて、赤黒い血がドクドクと流れ出ている。

ありゃりゃ、こりゃ太い静脈を切ったかな？

「僕、死んじゃう。見てよ！　あいつ、僕を殺した！」

男のくせにピーピー騒ぐな。

動脈は切ってないんだから、簡単に死ぬわけがない。

「うるさいな。騒ぐと出血が酷くなるよ。Ｅｐｉｓｋｅｙ！」

私はマルフォイの腕をガッとつかんで、治療呪文をかけた。

マルフォイは、ギャーギャー泣いてたけど、無視だ。

呪文のおかげで、傷口は浅くなったけど、まだ少し血が出ていた。

一応、包帯も巻いておくか。

私は再び杖を取り出して「Ｆｅｒｕｌａ！」と唱えた。

「君はハグリッドがあれだけちゃんと『ヒッポグリフを侮辱するな』って注意したのに、まともに聞いてなかった。そのケガ、はっきり言って自業自得だね」

私はそう言い捨て、ハグリッドにマルフォイを医務室へ連れて行くように頼んだ。

マルフォイは唇を噛み締めて私を睨んでいた。

マルフォイがケガをしたことで、スリザリン生は、ハグリッドをクビにすべきだと騒ぎだした。

「マルフォイは大丈夫かしら?」
さすがにハーマイオニーも心配していた。
するとハリーが校医のマダム・ポンフリーの腕なら、あれぐらいのケガを治すのは楽勝だと言う。

ロンが私に「マルフォイなんか助けることなかったのに!」と言った。
「ああ、アレは条件反射みたいなもんだね。ケガ人をみると、放っとけなくてさ」
私は苦笑いした。

それよりも、むしろハグリッドの方が心配だ……。
というわけで、ハリー、ロン、ハーマイオニーは、ハグリッドの小屋へ様子を見に行くことにしたようだ。

１１・返り討ち

一方、私は寮の談話室で、チョコレートをかじりながら、マグル学のレポートと格闘していた。
書くのに時間がかかるから、ハリー、ハーマイオニー、ロンには付き合えなかったんだ。

だって羊皮紙と羽根ペンって、本当に書きにくいんだよ！
でも、学年末試験の時は、専用の羽根ペンと羊皮紙を使うらしいから、そうも言ってられない。
青龍学院では、マグルのノートとシャープペンシルを使ってよかったんだけどね。

そこへ、フレッドとジョージが疲れきった顔で、よろよろと談話室に入ってきた。
２人とも何故かお腹を痛そうに押さえている。
「あぁぁ、ルーピンには参ったぜ」
「あぁぁ、まったく困ったもんだ」
そしてあろうことか、２人とも頭から、私の書きかけのレポートの上に倒れこんできた。

ガッシャン！

テーブルの上のインク瓶が派手に倒れ、みんなの視線が、いっせいにこっちに集まる。
気づけば、私のレポートの上に黒いインクが広がっていた。
「うわああ、あと１０ｃｍまで書けてたのに!!」

チョコが無事だったのは、不幸中の幸いだ。

「あ、レイ、ごめんよ……」
双子は体をノロノロと起こし、インクだらけの顔で謝った。
「レイ、インクをなんとかする」
ジョージが杖を振った。
羊皮紙一面に広がっていた黒いインクは消えた。
というよりも、羊皮紙自体が完全に真っ白になった。
げ、文章まで消えてる!?
「うわああ、レポートが!!」
私が叫ぶと「ゴメンやり直しだ」と、今度はフレッドが杖を振る。
ようやくレポートは、元の書きかけの状態に戻った。
「で、ルーピン先生がどうしたの?」
私は話を元に戻す。
闇の魔術に対する防衛術の授業で、何か問題でもあったんだろうか?
まさか父さんに限って、ヘマはやらないと思うんだけど。
フレッドが話をしだす。
「我らは、ルーピン教授に元気が足りないと考えた。だから、強力な『元気が出る呪文』を掛けて差し上げたのだ」
「ところが、奴は恩を仇で返したのだ!」
「おかげで、我らの腹筋は崩壊寸前なのだ」
え……腹筋?
「「おのれ、ルーピンめ」」
双子は怒りの表情を見せるけども、インクだらけの顔なので、あま

り迫力がない。

「え、話がよくわからないよ？」

私がそう言うと、話を聞いていたジニーが解説する。

「あのねレイ。ルーピン先生は、フレッドとジョージが掛けた呪文を……」

そこまで言って、ジニーはぷぷっと吹き出した。

すると、奥で本を読んでいたパーシーが、クスクス笑いながら続きを教えてくれた。

「先生は見事な『盾の呪文』で、呪文を跳ね返し、２人を返り討ちにしたそうだ」

すると双子は恨みがましい顔で、パーシーを見た。

「「笑うなパース！　コッチは授業の間ずっと笑いが止まらなくて、大変だったんだ！　いまだに腹筋が痛くてたまらないんだ！」」

「お前達が自分達でまいた種だ。ルーピン先生に減点されなかっただけでも、感謝しろ」

パーシーはピシャリと返す。

アハハハ、父さんに挑戦するなんて、２０年早いよ！

元・悪戯仕掛け人を見くびってもらっちゃ困るね。

などと思いつつ、私はチョコを一口かじった。

「それにしても、ルーピンの実力はホンモノだな」

「うん、今年の闇の魔術に対する防衛術は期待できるな。けど、次こそアイツをギャフンと言わせてやろう！」

双子は肩を組んで、男子寮へ上がっていった。

＊

金曜日の放課後、寮に向かって歩いていると、マクゴナガル先生に

呼び止められた。
「ミス・キサラギ。ミスター・マルフォイがケガをした時、応急処置をしたそうですね？」
「あの……もしかして、何か問題でも？」
マルフォイは、まだ痛がっているという噂だ。
あいつが「私の手当が下手なせいだ」って言ってたら、嫌だな。
「いいえ。貴女の応急処置が非常によくできていたと、マダム・ポンフリーが褒めておられました。ですから、グリフィンドールに１０点与えましょう」
先生はそう言って去っていった。

ああ、良かった。
とりあえず、私の手当には問題無しとお墨付きがもらえた。
それに点数もゲットしたし！

＊
編入から1週間がたった。
私はようやくホグワーツの生活に馴染んできた。
最初こそ、編入生の私は珍しがられた。
だけど、今では前からココにいたように、みんな普通に接してくれる。

青龍学院と比べて、ホグワーツの授業や先生達はかなり個性的だ。
一番気に入ったのは、吹けば飛ぶような小柄なフリットウィック先生が教える呪文学。
授業が実技メインでとてもわかりやすい。

逆に一番苦手だと思ったのは、ゴーストのビンズ先生の魔法史だ。
眠い、眠い、眠すぎる。
あの授業を録音して眠れない時に聞いたら、きっといい睡眠薬にな

るに違いない。
もっとも私は日本にいた時から、魔法史だけは苦手で、父さんに残念がられていたけどね。

そういえば、魔法薬学と、父さんの闇の魔術に対する防衛術の授業は、まだ受けてないんだよね。

まわりのみんなに聞けば、魔法薬学担当のスネイプの評判は最悪だ。
スリザリンを贔屓しまくりで、他の寮からガンガン点数を引きまくるんだって。
特にあいつにとってハリーは天敵らしく、いつも目の敵にされるそうだ。

逆に父さんの評判は上々だった。
フレッドとジョージを返り討ちにしたのも、ポイントが高かったみたい。
上級生は口を揃えて「やっとマトモな先生が来た」と言っていた。

なんでも、今までの先生達がかなり酷かったらしい。
しかも、闇の魔術に対する防衛術は呪われているという噂があって、毎年のように先生が変わっているらしい。

でも、父さんならきっと大丈夫。
持病さえバレなきゃ、きっと問題なくやっていけるハズだ。

12・グリフィンドールの天敵

いよいよ、スネイプの魔法薬学の授業を受ける日がやってきた。

魔法薬学の教室は地下にあった。

教室は薄暗くひんやりしていて、いかにもスネイプにはお似合いだ。

まあ、薬品っていうものは直射日光を避けて、暗く涼しい所に保管するのが基本。

だから、教室が地下にあるのは、一応理にかなってるんだけどね。

授業の課題は「縮み薬」だった。

私はハーマイオニー、ネビルと同じテーブルになった。

横で見ていると、ハーマイオニーの調合はとても手際がいい。

材料の切り方、鍋の混ぜ方は、全て教科書どおりで完璧だ。

一方、ネビルの調合はとても危なっかしかった。

スネイプの目が気になるのか、ビクビクしてて作業に集中できてない。

「ネズミの脾臓は1つ、ヒルの汁はほんの少しだ。量を間違えれば、薬は毒となる」

スネイプは、黒板に調合の注意点をいっぱい書いていた。

授業も半ばを過ぎた頃、右腕に大げさな吊り包帯をしたマルフォイが現れた。

そして、わざわざハリーとロンがいるテーブルに着席した。

こいつ一体、何を企んでいるんだか。

「先生、僕、雛菊の根を刻むのを手伝ってもらわないと、こんな腕なの

で」
マルフォイが言うと、スネイプはその作業をロンに命じてやらせていた。

はぁ、それがマルフォイの狙いだったのか。
まったく嫌な奴だ。

私が萎び無花果（しなびいちじく）の皮をむいていると、隣のネビルが鍋に大量のヒルの汁を入れようとしている。
わわ、ちょっと待て！

「ネビル、ヒルの汁が多いよ！」
私が横から教えていると、スネイプがやってきた。

「キサラギ、私語をするな」
スネイプは不機嫌全開で怒った。
えー、ネビルが失敗しそうなのを止めただけじゃん。

少しムッとしながら、私はイモムシを自分の鍋に入れ、左回りに2回かき混ぜる。
そして、刻んだ雛菊の根も入れた。

よし、材料は全部加えたから、あとは煮込むだけだ。
私の鍋の薬は、少しずつ明るい黄緑色になってきた。

しばらくしてから、またスネイプはやってきた。
奴は私の鍋をチラッと見て、フンっと鼻を鳴らす。

うっわ～、感じ悪っ！
でも、スネイプは何も言わなかったから、薬はちゃんと出来ているってことだよね？

もし問題があれば、アイツのことだから、絶対に嬉しそうに嫌味を言ってくるだろうから。

それから、スネイプはネビルの鍋を覗き込み、中身を柄杓ですくって見せた。

明るい黄緑色になるはずの薬がレモン色になっていた。

あれは、もしかして鼠の脾臓の入れ過ぎかな？

あの色だと、２つぐらい入れちゃったかな？

「ロングボトム、我輩はハッキリ言ったはずだ。鼠の脾臓は１つでいいと……」

どうやら、私の予想は正しかったらしい。

スネイプが嫌味ったらしくネビルをネチネチ責める。

ネビルは震えていた。

見かねたハーマイオニーが「手伝う」と言いだした。

けど、スネイプは「出しゃばるな」と冷たく言って、他のテーブルを見に行く。

しかし「出しゃばるな」と言われて、素直に引き下がる私とハーマイオニーじゃない。

スネイプが立ち去った瞬間、私はネビルの鍋に皮を剥いた萎び無花果を３つ放り込む。

ハーマイオニーがそれを見て、すかさずネビルに指示を出した。

私もコソコソとアドバイスをしていく。

ネビルはふうふう大汗をかきながら、なんとかハーマイオニーと私の指示をこなしていく。

こうして、どうにかネビルの縮み薬は成功した。
ネビルの使い魔のヒキガエルに試したら、ちゃんとオタマジャクシになったんだ。

グリフィンドール生は歓声をあげ、私とハーマイオニーは顔を見合わせてニヤリとする。

「手伝うなと言ったはずだ、ミス・グレンジャー、そしてキサラギ。グリフィンドール１０点減点」
スネイプの目は誤魔化せなかったらしい。
ていうか、私達が手伝ったのはバレバレだったみたいだ。

でも、納得いかない!!
何で私達が怒られるんだよ!!

そしてスネイプは授業を終わらせた。

ムカついた私は、道具を片付けながら呟く。
「《何だよスネイプの奴。薬は完成したんだから、減点することないじゃん。ムカつく！　だいたい、生徒が調合に失敗しそうになってたら、普通は止めるでしょうが！》」

「レイ、今、何て言ったの？」
ネビルに言われて、今の呟きが日本語だったことに気づいた。
「あ、ごめん。いや、減点が納得いかないなって、思ったんだ」
ネビルが「ごめん、僕のせいで……」と申し訳なさそうに謝った。
「いいよ、次に同じ失敗をしなければさ」
私が慰めるとネビルは少し笑う。

「ネビル、あなた頑張ってるわ！　スネイプなんかに負けちゃダメよ」
ハーマイオニーも一緒になって、ネビルを慰めた。
「それにしても、レイ。どうしてあそこで、萎び無花果を入れるっていう判断ができたの？」
ハーマイオニーが尋ねた。
「ネビルはネズミの脾臓を入れ過ぎていたでしょ？　だから、それを中和する材料を入れるべきだと考えたんだ」
「でも、どうして3つなのかしら？　まさか勘じゃないわよね？」
「よくぞ聞いてくれました！　あれはね、薬の色の濃さで判断するんだ。縮み薬はネズミの脾臓を入れれば入れる程、黄色が濃くなるから」
ハーマイオニーは私の解説に感心し、ネビルはあっけにとられていた。

13・まね妖怪

昼食後は、待ちに待った闇の魔術に対する防衛術の授業だ。
父さんは教室に入るなり、みんなに教科書をしまうように言った。
そして、杖だけを持ってついてくるように指示した。

廊下を歩いていると、ポルターガイストのピーブズがいた。
物置の鍵穴にガムを詰めて遊んでいる。
父さんを見て「バーカ、マヌケ、ルーピン」とからかってきた。
「フィルチさんが箒を取りに入れなくなるじゃないか」
父さんが注意したけど、聞きやしない。

ちなみに、フィルチというのは、ホグワーツの用務員をしている老人の名前だ。
フレッドとジョージによれば「根性曲がりのくそジジイ」らしい。

ピーブズが、父さんにアッカンベーをかます。
おいおい、父さんに喧嘩を売るとはいい度胸だな。
どうなっても知らないよ？

父さんはため息をついて、杖を取り出す。
そしてみんなによく見ておくように言ってから、クールに呪文を唱えた。
「Ｗａｄｄｉｗａｓｉ！」
鍵穴からガムが吹っ飛び、ピーブズの鼻にハマった。
ピーブズはもんどり打って「チクショー覚えてろよ！」とか言いながら、去っていった。
「先生、かっこいい」

ディーン・トーマスが父さんを尊敬の目で見ていた。

しばらく歩くと職員室に着いた。

他の先生達は授業中らしく、椅子に座ったスネイプしかいなかった。

父さんが職員室のドアを閉める。

「ルーピン、開けて置いてくれ。できれば見たくないのでね」

スネイプはそう言って立ち上がり、大股でドアの前まで歩いていった。

そして振り向いてこう告げた。

「このクラスにはロングボトムがいる。この子には難しい課題を与えないよう御忠告申し上げる。Ｍｉｓｓ．グレンジャーが耳元で指図したり、キサラギが横から手を出したりするなら別だが」

ネビルの顔が真っ赤になり、ハリーがスネイプを睨みつけている。

私もスネイプを睨みつけ、ハーマイオニーもムッとしていた。

すると父さんは言った。

「ネビルには最初の段階で、アシスタントを務めてもらいたいと思います。それに、ネビルはきっと、とても上手くやってくれると思いますよ」

するとスネイプは、嫌な笑みを浮かべて出て行った。

どうせネビルに出来っこないとか思ってるんだろうけど、それって教師としてどうかと思うぞ？

父さんがみんなを部屋の奥の洋箪笥の前に集めると、箪笥がガタガタ揺れた。

「中にまね妖怪（ボガート）が入っている」と父さんは言った。

まね妖怪か。
道理でスネイプが見たくないと言った訳だ。

父さんが、みんなにまね妖怪の特徴を尋ねる。
手を挙げたのは、私とハーマイオニーだった。
父さんはハーマイオニーを指名した。

「ボガートは形態模写妖怪です。私達が一番怖いと思うのはこれだ、と判断すると、それに姿を変えることができます」
ハーマイオニーの上手な説明に、父さんが感心する。

それにしてもスネイプの怖いものって、何？

「まね妖怪を退治をする時は、誰かと一緒にいるのが一番だ。向こうが混乱するからね。首のない死体に変身すべきか、人肉を食らうナメクジになるべきか？　私はまね妖怪がまさにその過ちを犯したのを見たことがある。一度に2人を脅そうとして半身ナメクジに変身したんだ。どう見ても恐ろしいとは言えなかった」

いや、首なし半身ナメクジは、余計気色悪かったってば!!

あれは、3ヶ月ぐらい前の話だったな。
青龍学院の倉庫にまね妖怪が出て、2人の生徒が父さんに助けを求めたんだ。
その時、ちょうど私も居合わせたから、そのまね妖怪を見てるんだけど、充分怖かったよ！

私の心の中のツッコミは当然聞こえる訳もなく、父さんの説明は続く。

「まね妖怪を退散させる呪文は簡単だが、精神力が必要だ。こいつを本当にやっつけるのは『笑い』だ。初めは杖なしで練習しよう。私に続いて言ってみよう。Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ、馬鹿馬鹿しい！」

みんなが「Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ！」と声を揃えた。

それから父さんは、予告どおりネビルを指名した。

父さんがネビルに世界で一番怖いものを尋ねると、小さい声で「スネイプ先生」と言った。

それを聞いてクラス全体が爆笑し、ネビル自身も少し笑った　。

「スネイプ先生か。ふむ、ネビル、君はお祖母さんと暮らしているね？」

「え……はい。でも……。僕、まね妖怪が、祖母ちゃんに変身するのも嫌です」

ネビルは不安げに答えると、父さんは今度はネビルのお祖母さんが普段どんな服を着ているのか尋ねた。

その後、父さんはボガート撃退作戦を説明し始める。

「ボガートが洋箪笥からウワーッと出てくるね、そして君を見るね。そうすると、スネイプ先生の姿に変身するんだ……」

そこから説明された内容にみんな大爆笑だった。

うまくいったら、すっごく面白いことになるよ！

それから父さんは、みんなに自分の怖いものと、それをどうやったら面白くできるかを考えるように言った。

私は蛇が大の苦手だ。

理由は、５歳の時にマムシに襲われて死にかけたからだ。
薬の材料で使う蛇は死んでるから何とか触れるけど、あんまりいい気持ちはしない。

「脚をもぎ取ってと……」
後ろでロンの声が聞こえたけど、何だろう？

「みんな、いいかい？」
父さんの掛け声で、いよいよスタートだ。
ネビルが引きつった顔で袖まくりし、杖を構えた。
父さんも杖を洋箪笥の取っ手に向ける。

１・２・３!!……バンっと扉が開く。
スネイプが、ギラギラした目つきでネビルに向かっていく。
それを見たネビルは、口を金魚みたいにパクパクさせた。

「り、り、Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ！」
ネビルが、どうにか呪文を唱えた次の瞬間！
パチンと音がして、ボガートスネイプがつまずく。
すると、スネイプの姿が作戦どおりとんでもないことになった。

緑色の長いレースの縁取りをしたドレス。
頭には虫食いのあるハゲタカの剥製がついた高い帽子。
首には狐の毛皮でできた襟巻き。
手には真っ赤っかな、巨大なハンドバッグ！

あのスネイプが女装だ!!

職員室が吹っ飛ぶかと思うぐらいの大爆笑が起きる。
こっそり父さんが私にウィンクして見せた。

一方、ボガートのスネイプは、途方に暮れて固まっている。

「パーバティ、前へ！」

父さんが、パーバティ・パチルを呼ぶ。

まね妖怪はパチンと音を立て、血だらけの包帯を巻いたミイラに変わった。

彼女が呪文を唱えると、ミイラの包帯がほどけ、ミイラはつまずき、頭から落ちる。

どんどん順番がまわっていく。

「伶、前へ！」

ついに私が呼ばれた。

まね妖怪がガラガラヘビに変わる。

げ、ちょっと、蛇がデカ過ぎない!?

何で私の背丈ほどもあるの!?

しかも、尻尾を震わせ、ガラガラいわせてくる。

「Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ！」

後ずさりしながら叫ぶと、ヘビは巨大なハンドバッグに変わった。

ふぅ、どうにかやっつけたぞ。

その後もまね妖怪は、次々と姿を変える。

ロンの前では巨大蜘蛛に変わっていた。

へぇ、ロンは蜘蛛が苦手なんだ。

「Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ！」

勢い良くロンが呪文を唱えると、蜘蛛の脚がなくなり、体がゴロゴロ転がりだした。

ロン、脚なし蜘蛛は余計に怖いよ！
脚なし蜘蛛は、ハリーの前で止まる。

「こっちだ！」
父さんが、ハリーの前に割り込むように、脚なし蜘蛛の前に出た。
パチンと音をたて、蜘蛛は白く輝く球体に変わる。

「Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ！」
父さんは、うんざり顔で呪文を唱え、再びネビルを指名した。

って、今のは「満月」だ!!
見えたのは一瞬だったけど、鋭い人なら父さんの「持病」に気づくかも！

まね妖怪は再びスネイプになる。
ネビルが呪文を叫ぶと、一瞬、スネイプはネビルのお祖母さんバージョンに変化する。
「ハハハ！」
ネビルが大声で笑い飛ばすと、まね妖怪はついに破裂した。

授業後、みんな興奮しまくっていた。
特にまね妖怪と戦った生徒はテンションが高かった。

「先生は、どうして水晶玉なんかが怖いのかしら？」
ふと、ラベンダーが考え込んだ。

水晶玉か。
父さんの「持病」を知らなきゃ、そう見えるんだ。
なら、それに乗っかろう。

「きっと昔、水晶玉占いで、怖いお告げを聞いてトラウマになったん

じゃない？」
私がそう言ってのけると、ラベンーダーは納得したみたいだ。
ふう、うまくごまかせたかな？

14・お茶の時間

放課後父さんの事務所を訪ねた。
合鍵はもらっていたし、場所も聞いていたけど、来るのは初めてだ。
中は思ったよりも広くて快適そうだ。
部屋には暖炉もあり、冬はあったかそうだ。
奥には檻があって、赤帽鬼（レッドキャップ）が入っていた。
父さんはヤカンを杖で叩いてお湯を沸かすと、紅茶をいれた。
私のは無糖ストレートだけど、父さんのは角砂糖5つに牛乳がたっぷりの超激甘ミルクティーだ。
「伶。さっきの授業は、よくやったね。いい戦いぶりだった。でも僕はてっきり、ボガートが人参になるかと思ったんだけど」
「父さん！　人参は怖いんじゃなくて、嫌いなだけ！　あんな変に甘くて薬臭い野菜、食べ物じゃない！」
すると、父さんは「冗談だよ」と笑う。
「ところで父さん、最初からウケ狙いだよね？あのまね妖怪……」
今思い出しても笑えるよ。
緑色のロングドレスを着て、ハゲタカ帽子をかぶり、狐の毛皮の襟巻きをして、真っ赤な巨大ハンドバッグを持ったセブルス・スネイプの姿。
「やっぱり、伶には気づかれていたようだね。僕としては、ちょっとした意趣返しだった。ほら、君は今日、ネビルを助けて魔法薬学で減点されただろう？」

父さんはいたずらっぽく笑う。
おいおい、それって、公私混同・職権乱用じゃないの？
ま、面白かったからいいけどさ。

「そういえば、何故ボガートのスネイプ先生に、ネビルのお祖母さんの格好をさせようと思ったの？　父さんは、ネビルのお祖母さんを知ってるの？」
「うん、まあね。あの方のファッションは、とても個性的だから、一度に会ったら忘れられない」

父さんは、ふと真面目な顔になり、ミルクティーをすすった。

「ネビルの両親、フランクとアリスは、かつて有能な闇祓いで、不死鳥の騎士団では、主力メンバーとして活躍していた。僕らも、彼らにいろいろ助けられたものだった。ところが、2人はベラトリックス・レストレンジに磔の呪文をかけられ、正気を失ってしまったんだ。今は聖マンゴ病院にいるそうだ」
「待って。ベラトリックス・レストレンジって!?」

その名前には、あまりにも聞き覚えが有り過ぎた。
聞き覚えがあるどころではない。
絶対に忘れられない名前だ。

「そう。梓を殺した魔女だ」
父さんが重たく呟いた。

母さんは私が1歳の時に死んだ。
当時、母さんの弟の悟叔父さんは、まだホグワーツの学生だった。
母さんは、夏休みでロンドンの家に帰ってくる叔父さんを駅へ迎えに行った帰り、叔父さんと一緒にあの女に襲われた。
叔父さんを守る為、母さんは必死で戦った。

結果、叔父さんは助かったけど、母さんは命を落とした。

一方、レストレンジは、ヴォルデモートが失脚した後に夫とともに逮捕され、今はアズカバンにいるという。

スタタタタっ！
コンコンコン!!
その時、ドアを勢い良くノックする音が聞こえた。
やってきたのは晶だ。

入ってくるなり、英語で勢いよく叫ぶ。
「グッジョブ　、リーマスさん！　もう持ちきりっすよ！　あのボガートの話題で！　ロングボトムもスゲーよ!!　まさかあのスネイプが女装って!!」

「騒々しいなぁ、晶。目と鼻の先にいるんだから、大声出さなくても聞こえるって」

「《何だ伶。いたのか》」
晶は私を見て日本語で言った。
「《『いたのか』じゃないし！で、父さんに何の用？》」

すると晶は鞄から3冊の本を出し、テーブルに置く。
「リーマスさん、頼まれていた本。親父から借りられました」

タイトルは3冊とも日本語だ。

［大日本妖怪名鑑　河童編］
［河童と伝説］
［カッパ百科］

あれれ、河童の本ばかりだな。

「晶、ありがとう。しばらく借りるよ。お父さんによろしくと伝えておいて」

父さんはお礼を言って受け取る。

「せっかくだから、ゆっくりしていくといい」

父さんは晶にもお茶を出した。

「父さん、授業で河童をやるの？」

「うん。実は剛（つよし）に、青龍学院にいる河童を2頭貸してもらえるように頼んでいるんだ」

ああ、青龍には河童が住む池があるもんね。

「《伶、ツヨシって誰だ？》」

晶が尋ねる。

「《私の青龍時代の担任の先生。ちなみに苗字は高砂（たかさご）》」

「《タカサゴ・・ツヨシ……ええっ！　高砂剛!?　日本代表ビーターの？》」

私と父さんが揃ってうなずくと、晶は叫んだ。

「《あの高砂剛が担任だったなんてマジうらやましい！　俺も青龍に行っときゃ良かった》」

「剛は、授業も大変評判が良くてね。今回、僕はホグワーツで闇の魔術に対する防衛術を教えるにあたって、いろいろアドバイスをもらったよ」

父さんは微笑み、冷めたミルクティーをすすった。

「《ふっふっふっ。実は高砂先生、青龍のクィディッチ部の顧問もしてるんだ。指導は厳しかったけど、おかげで7月の全日本大会、準優勝

したよ》」

「《そう言えば、今年は優勝は安倍学園で、青龍が準優勝だったよな。伶も出てたのか？》」

全日本学生クィディッチ大会は、日本魔法界の夏の一大イベントだ。

マグルでいうところの、高校野球の夏の甲子園大会みたいなものだろうな。

「《うん。一応、私、決勝でゴールしたんだけどね……その直後に、安倍のシーカーにスニッチを取られたんだ》」

「《ありゃありゃ。そりゃ残念だったな》」

晶が苦笑いした。

＊

ネビルのボガートスネイプのおかげで、父さんはますます人気者になった。

一方スネイプの機嫌は、しばらく最悪だった。

でも、ダンブルドア校長には逆らえないのか、脱狼薬はちゃんと煎じてくれているようだったけどね。

そして、ハグリッドはヒッポグリフの事件で、すっかり自信をなくしたらしい。

魔法生物飼育学は、レタス食い虫の面倒をみるだけの退屈なものになっていた。

ホグワーツ編入から1ヶ月たった頃、私はようやく羽ペンと羊皮紙を使いこなせるようになった。

そして、人並みのスピードでレポートが書けるようになってきた。

授業を取りに取りまくっているハーマイオニーは、毎晩遅くまで予習復習に追われていた。

でも、勉強大好きな彼女は張り切っていた。

１５・猫と鼠

「レイって、日本の学校でクィディッチやってたんだよね？　今度練習を見に来ないかい？」
ハリーに誘われ、１０月のある土曜日、私はグリフィンドールチームの練習を見学することにした。

さすが、クィディッチの本場イギリスの魔法学校だ。
選手のレベルがみんな高い。

キーパーのオリバー・ウッドは、ゴールをしっかり固めている。
チェイサーの3人はクルクルよく動くし、ビーターの双子の棍棒さばきと連携プレーがすごい。
そして、シーカーのハリーは、ウッドがあちこちに放り投げるゴルフボールを、ひょいひょいと全部空中でキャッチしていく。
前の学校のシーカーなんて、１０回に1回はキャッチ出来ずに落としていたのに。

「ミス・キサラギ。どうだ、うちのチームは？」
休憩時間にウッドが私の所へやってきた。

「私、青龍学院でチェイサーをしていたんですけど、みんなすごく上手いですね！」
私がそう返すと、ウッドの目がキラリと光った。
「お、君もクィディッチをやっていたのか！　じゃ、ちょっと飛んでみてくれ」
そう言って、ウッドは箒を貸してくれた。

私はさっそくハリーに箒を借りてまたがり、地面を力強く蹴る。
箒は素晴らしいスピードで、空へ飛び上がる。

空は澄みきっていて、少し冷たい風が気持ちいい。
ちょっとターンをやってみると、以前より少しだけスピードが遅い。
前はもっとキュッと曲がれたんだけどなあ。
しばらく箒に乗ってないから、体がなまっているみたいだ。
宙返りは上手くいったけどね。

地上に降りると、メンバーが拍手で迎えてくれた。
ハリーは私を笑顔で見ていたし、双子はピィーっと口笛を吹いた。
「うん、なかなかやるわね。将来が楽しみだ」
チェイサーのアンジェリーナ・ジョンソンが、楽しそうに私の肩を叩いた。
「落ち着いた飛びっぷりね」
同じくチェイサーのアリシア・スピネットも、ニコニコしている。
「私達もウカウカしてられないわ。頑張らなきゃ！」
もう1人のチェイサーのケイティ・ベルが闘志を燃やしていた。

するとウッドが私を手招きして言った。
「ミス・キサラギ。チェイサーに空きがないから補欠になるが、それで良ければ、チームに入らないか？」
「いいんですか！　やった！」
嬉しくて、私はピョンピョン飛び跳ねた。

クィディッチの練習は週3回。
青龍では、試験期間中と日曜、お盆と年末年始を除いて毎日練習があった。
だから少しは楽かと思えば、とんでもない！

キャプテンの7年生オリバー・ウッドは、今年が優勝の「最後のチャンス」ということで、みんなをしごきまくった。
大雨の日でも、平気で外で練習させたよ。
もちろん、補欠の私も例外じゃなかった。

＊

この日の薬草学は「花咲か豆」の収穫だった。
薬草学はハッフルパフとの合同授業だ。

私は晶とアーニー・マクミランと作業をしていた。
マクミランは、ぽっちゃりしたハッフルパフの男の子で、晶の親友だ。

木になっているピンクの鞘を採り、中の豆を取り出し、桶に入れていく。
この豆、そっと桶に入れないと衝撃で花がポンポン咲いちゃうんだ。

横でハリー、ハーマイオニー、ロンが作業していた。
けど、ハーマイオニーとロンは全然話もしない。
板ばさみのハリーが時々、助けを求めるみたいに、ちらちら私達の方を見ている。

そりゃ昨日、あんなことがあったからね……。

「なあ、ポッター？　ロン・ウィーズリーは、ミス・グレンジャーと何かあったのか？　随分カリカリしているように見えるぜ？」
横から流れてくる険悪な空気に耐えられず、晶がハリーに尋ねる。

ハリーはため息混じりに答えた。
「ああ、タチバナにもそう見えるんだね。実は、ハーマイオニーの猫

が、ロンの鼠をやたら追いかけ回すんだ」
私はハリーに付け加える。
「おかげで、ロンの鼠はストレスで、すっかり痩せ細っちゃって。昨夜は、猫が鼠を襲おうとして、止めるのが大変だったんだよ」
「あーなるほど。でも、そもそも猫って鼠を追っかけるもんじゃねえの？」
橘晶くん。
君は今、地雷を踏んだね。
「タチバナっ!!『猫は鼠を追いかけるもの』だと!?　君は他人事だから、そんなことが言えるんだ！　スキャバーズは、あの猫のせいで、どんどん痩せていってる!!」
ロンが晶にとんでもない勢いで、怒鳴った。
晶は「わ、悪ぃ、悪ぃ!!」と、後ずさりした。
一緒にいたマクミランも目を丸くしている。
「ロン！　ミスター・タチバナに怒鳴ることないでしょ！　当たり前のことを言っただけじゃない」
ハーマイオニーがロンをなだめるも、逆効果だった。
「誰の猫のせいでこうなったと思ってる！　スキャバーズは隠れてるよ。僕のベッドの奥で、震えながら」
そう言って、ロンは収穫した豆を桶に入れようとしたけど、上手く入らずに床に落としてしまう。
「気をつけて、ウィーズリー。気をつけなさい！」
薬草学担当のスプラウト先生の注意は一歩遅かった。
散らばった豆は、パパッと花を咲かせ始めた。

昨晩は、ロンの鞄に隠れているスキャバーズを、クルックシャンクスが嗅ぎつけ、襲おうとしたのだ。
スキャバーズは、間一髪逃げ出して無事だったけど、前に見た時よりもっと酷く痩せていた。
クルックシャンクスはかなり興奮してて、押さえつけるのに苦労したんだ。
だから、ロンはクルックシャンクスに猛烈に腹を立てているというわけだった。

16・許可証

薬草学の次は変身術だった。
授業の終わりに、マクゴナガル先生がホグズミードの許可証を提出するように言ってきた。
ハロウィンの日が、第1回目のホグズミード休暇らしい。

そういえばハリーは、結局、保護者に許可証のサインをもらえないままだった。
ハリーは、寮監のマクゴナガル先生に許可を下さいってお願いしていたようだけど、ダメだった。
まあ、サインできるのは「親か保護者」ってルールだもんね……。

って、私もまだサインをもらってなかったじゃん！
放課後、父さんの部屋に直行だ。

「ゴメン、伶。僕もバタバタしていたから、すっかり忘れていた。そうそう、ホグズミードに行けるのは3年生からだったね」
「あ～、私もマクゴナガル先生に言われるまで忘れてたから気にしないで」
私は無事に許可証にサインをもらうことができた。

それから、ハリーが許可証にサインをもらえなかった話をした。

「父さんお願い。ハロウィンの日、もしもハリーが暇を持て余してそうなら、ここに呼んであげて。私はハーマイオニーやロンと一緒に、ホグズミードに行く約束をしちゃったから」
父さんは、わかったとうなずき、ため息をついて下を向く。

「ハリーは何とかしてあげたいけど、娘の伶と違い、僕はサインをする

権限を持ち合わせてない。他に頼める人は……」

そして、父さんはしばらく黙り込んでから呟く。

「いや、奴は絶対ダメだ。いくら名付け親、後見人だからといって……」

「え、ハリーに名付け親なんていたの？」

私が尋ねると、父さんがビクッと顔を上げた。

表情はとても厳しい。

「シリウス・ブラック、それがハリーの名付け親だ」

深いため息とともに、父さんは言った。

「ええっ、そんな!!」

マズイ、私こと如月伶、全力で地雷を踏んづけたようであります。

現実は残酷過ぎる。

まさか、自分の名付け親に命を狙われるなんて。

これは口が裂けても言えないな。

特にハリーには。

もし彼がこれを知ってしまったら、ショックでどうにかなるに違いない。

ブラックは、ハリーのご両親を裏切ったんだから。

コンコンコンコン。

その時、絶妙なタイミングでドアがノックされた。

「おや、ミス・キサラギ。来ていたのですね」

マクゴナガル先生だった。

「あの、先生。私、席を外しましょうか？」

私は立ち上がりかける。

「いいえ。貴女なら、居ても構いませんよ」

そう言って、マクゴナガルは本題に入った。

話は父さんが「持病」で授業を休んだ時の代講についてだった。

そういえば、満月が近い。

「今度のグリフィンドールとレイブンクローの5年生の授業は、私が代わりに行うつもりです。リーマス、授業の進度はいかがですか？」

「おおむね計画どおりです」

そう言って、父さんはマクゴナガル先生にシラバス（授業計画）を見せる。

「では、5年生は今、失神術を教えているところでしょうか？」

先生がシラバスに目を通しながら尋ねる。

「ええ。ただ、どちらのクラスも前回、呪文を教えたばかりですから、充分修得出来ていない子が多いと思います。ある程度、失神術を練習をさせて、気付けの呪文を教えようと考えています」

「わかりました。そのように致しましましょう。では、私はこれで失礼します」

マクゴナガル先生はドアへ歩いていく。

「あ、マクゴナガル先生！　待ってください！」

私は慌てて引き留めたら、先生はどうしたのかと振り返った。

「すみません。ホグズミードの許可証です」

私が書類を渡すと、彼女は文面を確認した。

「私、リーマス・ジョン・ルーピンは、伶・アルメリア・如月・ルーピンの父親として、ここに週末のホグズミード行の許可を与えるものである。」

「ええ、確かに受け取りました」
マクゴナガル先生は微笑んで、出て行った。

＊

ハロウィン前夜、私とハーマイオニーは寮の部屋で、明日の計画を立てていた。

「もちろん『ハニーデュークス』で、ハリーへお土産よね。それから『三本の箒』で、バタービールを飲んでみたいわ。それから『叫びの屋敷』も外せないわ」
「え、叫びの屋敷……」

正直あまり気が進まないな。
黙り込んだ私をハーマイオニーが心配した。

「もしかして怖い？　だったら、やめてもいいわよ？」
「いや、大丈夫。君とロンが一緒なら平気だと……思う」
怖くはないけど、何というか、ちょっと辛いだけだ。

その時、外からコツコツと音がした。
うちの伝書梟ヒキャクが、部屋の窓をつついている。
【レイ、レイ。ちょっと開けちゃらんやか？】
「あれ、ヒキャクどうしたの、こんな夜遅くに？」
しかもよく見ると、ヒキャクは手ぶらだ。

【親父さんから伝言。『お茶の葉を買ってきて欲しい』っち言いよった】
私は「了解」と言って、ヒキャクの頭を撫でた。
私は鳥語聞きだから、簡単な内容なら梟に伝言するだけで済む。
我ながら便利な能力だよね。

「良いわよね。レイは自分の使い魔と話が出来て。私なんて、クルックシャンクスがどうしてスキャバーズを襲うのか、聞きたくても聞けないもの」

ハーマイオニーは、ため息をついた。

主（あるじ）の心、使い魔知らず。

クルックシャンクスは、のんきにベッドの上で眠っていた。

１７・ホグズミード休暇

今日はハロウィン。
そして初めてのホグズミード休暇。
ハーマイオニーもロンも、ホグズミードに行けないハリーを気の毒そうに見ていた。
「僕のことは気にしないで」って、ハリーは強がっていたけど、私達を見送る目は寂しそうだった。

ホグズミードは、本当にいろんな店があった。
ダービッシュ・アンド・バングズ魔法用具店には、東郷飛行具社の「空飛ぶ座布団」があった。
東郷飛行具社といえば、青龍学院時代の友達、東郷史子の実家だ。
フミ、元気にしてるかな。

文具店ではインクと羊皮紙を購入した。
羊皮紙にもいろんな種類があった。
中には「外国語学習に最適！翻訳魔法防止加工の羊皮紙」なんていうのもあった。
何かの役に立つかもと思って買ってみたよ。

郵便局は、鳥語聞きの私にとって、うるさくてかなり疲れる場所だった。
何しろ、２００羽以上の梟が、ワイワイガヤガヤしゃべりまくってたからね。
ハーマイオニーとロンは楽しそうだったけど。

郵便局を出ると、痩せこけた黒い巨大な犬がいた。
そして、犬は何故か私の顔をじっと見つめてきた。

「死神犬グリムだ！　大変！　見たら死んじゃう！」
ロンが騒ぎ出すと犬は「ワン！」とひと吠えして、走り去った。

「ロン、あれはタダの野良犬よ」
ハーマイオニーがロンをたしなめる。
「そうだよね。私もそう思う」
私は占いや迷信なんて信じてないので、そう言った。

「じゃあ『叫びの屋敷』に行くわよ」
ハーマイオニーが張り切って地図を広げた。
私とロンは彼女についていく。

しばらく歩き、村外れの丘にやってきた。
そこには荒れ果てた建物がポツンと立っていた。
周りは雑草だらけ、壁はヒビだらけで、窓という窓には板が打ち付けられている。

ここが「叫びの屋敷」なのか。
噂によると「イギリスで最も呪われた場所」と言われている。
それは夜中に怪物の叫び声が聞こえるからだと言われている。
けど、この場所は、本当は心霊スポットなんかじゃない。

何故なら叫び声の正体は、うちの父さんだからだ。
叫びの屋敷は、父さんが学生時代に満月を過ごした場所だ。
父さんが入学する時に、ダンブルドアが用意してくれたそうだ。
狼になった時、他の生徒を襲わずに済むように。
この屋敷で、狼になった父さんは、人を襲いたいという衝動を抑える為、自分で自分を噛んだり引っ掻いたりしてやり過ごしたらしい。
その傷は、今でも父さんの体じゅうに残っている。
それを隠す為、真夏でも父さんは長袖のシャツを着るのだ。

そんなことを考えていると、胸が締め付けられる気がした。

「大丈夫、レイ？震えてるわよ？」

ハーマイオニーの声で我に返る。

「レイ、『叫びの屋敷』が怖かったのかい？　それともやっぱりさっきの犬、グリムなんじゃ……」

ロン、犬は関係ないよ。

「レイ、ごめんなさい。付き合わせて。まさか、あなたがこんなに怖がるなんて」

「ハーマイオニー、ロン、怖くないってば！　心配いらない。大丈夫」

きっと事情を知らない君達には、ただ私が強がっているようにしか見えないんだろう。

でも、私は怖いんじゃなくて、いたたまれないんだ。

気をとりなおし、三本の箒へ行く。

名物バタービールを飲むと、少し元気が出てきた。

「あれ、『人食い鬼』じゃないかしら？」

ハーマイオニーが、私の肩越しに店内を見て言った。

「え、どこどこ？」

私とロンの声が重なる。

２人でキョロキョロ探すけど、見つからない。

するとハーマイオニーが「もう行ってしまったわ」と笑った。

「いらっしゃい！　新製品の試食はいかがですか～！」

ハニーデュークスの店先では、新作ヌガーの試作品を配っていた。

店内はお菓子であふれていた。

大きな樽に百味ビーンズが詰まっていたり、食べると火が吹ける黒胡椒キャンディがあったり。

ドルーブル風船ガムや爆発ボンボン、ゴキブリ・ゴソゴソ豆板など、日本では見たことがないようなお菓子もあった。

さあ、ハリーへのお土産を選ぶぞ！

「これなんかどう？ナメクジ・ゼリー」

私が言うと、ロンは「なんかイヤだ」と却下した。

そしてロンは、オエっと吐きそうな顔になって、店の奥に行ってしまった。

「え、何で？」

「レイ、きっとロンは『ナメクジの呪い』がトラウマになってるんだわ」

ハーマイオニーによると、ロンは去年マルフォイと喧嘩した時、彼にナメクジを吐く呪いを掛けたそうだ。

けど、その時ロンが使っていた杖が壊れていたため、呪いが逆噴射した。

そして、逆にロンがナメクジを吐きまくるハメになったらしい。

ハニーデュークスの後は、私のリクエストで紅茶専門店に寄った。

茶葉を品定めする私を見て、ふとロンが尋ねる。

「レイ。君、お茶の葉なんか買って、占いでもする気かい？」

「ロン、馬鹿なこと言わないで！　レイはトレローニーの占い学なんか取ってないでしょ!!」

お茶の葉占いと聞いて、ハーマイオニーがロンに食ってかかる。

それにしてもハーマイオニーがあれだけ毛嫌いするトレローニーって、一体どんな先生なんだ？

「ハーマイオニー、お茶の葉は父さんに買って来て欲しいって頼まれただけだよ」

私がなだめると、ハーマイオニーは少し落ち着いた。

とりあえず、私はたくさんあるお茶の中から「新製品人気Ｎｏ．１」のセイロンティーを買った。
これで父さんからのミッションはクリアだ。

私達は、夕方までホグズミードを楽しんで、寮に戻った。
さっそくハリーにどっさりのお土産を渡した。

一方、ハリーは父さんのところに行っていたそうだ。
父さんにハリーを呼ぶように、お願いしといて正解だったなあ。

ハリーが父さんと話しているところに、ちょうどスネイプが脱狼薬を持ってきたらしい。
それを見たハリーには、彼が父さんに毒を持ってきたように見えたようだ。

「ルーピンがそれ、飲んだ？マジで？」
ロンも大口を開けて驚いていた。

いやいやいやいや、その薬は飲んでもらわないと、困るんだ!!
万が一、飲み忘れたりしたら、父さんはホグワーツに居られなくなるんだから。

「ロン、心配しないで。大丈夫だからさ」
私は事情をよーく知っているので、軽く言った。

そんな話をしていると、宴会の時間が近づいてきて、私達４人も大広間へ行く。

もっともハリーとロンは、まだスネイプを疑っているようだったけどね。

ていうか、スネイプは日頃の行いが悪過ぎる。
ハリーやロン……いや、グリフィンドール全体に対して、印象が悪い。
だから、２人に疑われるんだよ。
それに脱狼薬って、見た目が結構毒々しいもんなぁ。

18・侵入者

大広間はハロウィンモード全開だった。
カボチャをくり抜いて作った提灯が何百個もあったり、生きたコウモリが飛びまわっていたり。
料理も普段より豪華で、とてもおいしかった。
特にパンプキンパイは絶品で、3個もおかわりしちゃったよ。

宴会の最後には、ゴースト達の余興があった。
グリフィンドールの寮つきゴースト、ほとんど首なしニックが、しくじった打ち首（つまり自分が死んだ場面）を再現していた。
なんでも、処刑に使われた斧の切れ味が最悪で、何度やっても首が切れなかったらしい。
うわあ、逆にそれって残酷だよね。

夕食を終えた私達が寮に戻ってくると、入口は妙に人がいっぱいで混み合っていた。
寮のドアを守っている太ったレディの肖像画が開かないらしい。

「何をもたもたしてるんだ？」
後ろからパーシーが人混みを掻き分け、ドアへ歩いていく。
ドアの前に来ると、パーシーが叫んだ。
「誰か、ダンブルドア先生を呼んで。急いで！」

遅れて来たジニーが「どうしたの？」と尋ねた。

ふと見ると、いつの間にかダンブルドア校長は来ていた。
校長が肖像画へ歩いていくと、生徒達は道を開けて通れるようにする。
私達も何が起きているのか確認しようと、入口に近づいてみた。

次の瞬間、私は一瞬にして凍りついた。
ハーマイオニーは悲鳴をあげて、ハリーの腕をつかんでいる。
腕をつかまれたハリーは固まっている。
ロンも、ヒッと息を呑んでいる。

そこには、肖像画のキャンバスが、ズタズタに切り裂かれて散らばっていた。
切り裂かれた絵の中に太ったレディはいない。

気づけば、寮監のマクゴナガル先生、スネイプ、そして父さんが駆けつけてきたようだ。
校長は、すぐにレディを探すように命じた。

今度はそこにピーブズが現れた。
ピーブズは絵をズタズタにした犯人を知っていた。

なんと、シリウス・ブラックだった。

ブラックは寮に侵入しようとして、太ったレディに拒否された。
その腹いせに絵をズタズタにしたらしい。

13人の人間を一瞬にして木っ端微塵にした奴だ。
きっと、肖像画をズタズタに引き裂くぐらい、何とも思ってないんだろう。

青龍学院もそうだったけど、ホグワーツの敷地内でも「姿現し」や「姿くらまし」は使えないそうだ。
だから、校舎に侵入するには、周りを固める吸魂鬼を突破しなきゃいけない。
それをやってのけたブラックは、一体どんな恐ろしい闇の魔法を

使ったんだ？

ハリーは命を狙っているのは、そういう男なんだよね。

その晩はグリフィンドールだけでなく、全校生徒が大広間に集まって寝ることになった。

けど、みんな怖いせいで興奮して寝付けずに、ブラックのことをヒソヒソ話していた。

あれから先生達は、夜通し校内を捜索していたようだった。

けど、結局ブラックを見つけることはできなかったという。

父さんもきっと捜索で大変だったに違いない。

とりあえず、ホグズミードで買ったお茶の葉とお菓子は、ヒキャクに届けてもらった。

＊

翌日。

昼休みに教科書を取りに寮に戻った私は、談話室でフレッドとジョージがいるのをみつけた。

２人は額をくっつけ、何かを熱心に覗き込んでいた。

「フレッド、いたか？」

「いや、もう遠くへ逃げてるんじゃないか？」

「だよな。もうホグワーツには隠れてないよな」

双子はヒソヒソ声で話している。

何を見ているのかと思って、そっと私は後ろから覗いてみた。

それは羊皮紙だった。

描かれているのは、ホグワーツ全体の地図。

地図上にはたくさんの点があり、動き回っている。
それぞれの点には名前がついていた。
例えば、グリフィンドール談話室には「フレッド・ウィーズリー」「ジョージ・ウィーズリー」。
そのすぐ後ろに「レイ・キサラギ」の点がある。

なるほど、これが「忍びの地図」か。
小さい頃、父さんによく話を聞かされたっけ。
まさか、この2人が持っているとは思わなかったよ！

ここで、ちょっとしたイタズラを思いついた。
私はこっそり双子の背後にまわると、羊皮紙をツンツン杖で突ついて言った。
「イタズラ完了！」

地図は見事に消えた。

「うわっ！　レイ!?　何すんだ!?」
双子は同時に振り返った。

「ゴメンゴメン。『我、此処に誓う。我、良からぬ事を企む者なり』」
杖を羊皮紙に当てながら言うと、地図が再び現れた。

2人は口をポカンと開けて私を見た。

「君、何で『地図』の使い方を知ってるんだ？」
見事なユニゾンで双子が尋ねる。

「それは私が『ムーニー』の娘だからだよ」
ニヤリと笑って答えたら、双子が「マジで!?」と叫んだ。

この地図は、父さん達が学生時代に作ったものだ。
地図の製作者は、あと3人。
プロングズこと、ハリーのお父さんのジェームズ・ポッター。
ワームテールこと、ピーター・ペティグュー。
そしてパッドフッド……。

「ジョージくん聞いたかね!?　レイが、かのムーニー大先輩のご息女ですと!!」
「聞いたとも、フレッドくん！　何と喜ばしいことだろう!!」
「「お嬢様、我らと握手を！」」
感極まった2人は私に握手をねだった。

私が手を出すと、2人はガッチリと握ってきて、ブンブン上下に降りまくった。
慌てて「うわっ、ちょっ！　ギブ！　ギブ！」と私が叫ぶ。
すると「ごめんレイ。つい感動してしまって」とジョージが謝って、2人は手を離した。

フレッドとジョージが地図を見つけたのは1年生の頃。
フィルチの事務所の書類棚に入っていたらしい。

「何せ、その棚には『没収品・特に危険』と書いてあった」
「そこに入っていた代物だ。最高にクールなブツに決まってる。迷わず持ち出したさ！」
2人とも、目をキラキラさせて語った。

それにしても、よく使い方に気づいたなあ。
もっとも、イタズラの天才フレッドとジョージでも、解明には約9ヶ月かかったらしい。

ちなみに、双子は地図でブラックの居場所を探していたらしい。

けど、2人には言えなかった。
ブラックも地図の製作者の1人なんだって。
パッドフッドがそうなんだって。

それに、昨晩あれだけ先生方が探して見つからなかったのだ。
やっぱり、もうブラックは遠くに行ってしまったんだろう。

19・代打

シリウス・ブラック侵入事件以来、うちの寮の入口には、太ったレディの代わりに、カドガン卿の肖像画がかけられることになった。
だけど、彼は最悪の門番だった。
パスワードに難しい言葉を選んだり、やってくる生徒を見るたび決闘を挑んできたりしたんだ。
おかげで、グリフィンドール生全員からブーイングの嵐だよ。
しかし、他に立候補する絵がなかったらしい。
そりゃ誰だって、ズタズタにされたくはないよね。

そして、ハリーには先生方やパーシーのガードがつくようになった。
クィディッチの練習の時も、ハリーを守る為に、飛行術のフーチ先生が監督するようになった。

クィディッチといえば、最初の試合が近づいてきた。
元々うちは、スリザリンと試合する予定だった。
けど、シーカーのマルフォイが「まだ腕の調子が悪い」とか言っているせいで、相手がハッフルパフに変更になった。

有り得ないよね！
ヒッポグリフ事件から、もう2ヶ月は経つんだよ？
治ってないとか、絶対嘘に決まってる。

これにはキャプテンのオリバーが一番腹を立てていた。
「こんな天気じゃプレーしたくないってわけだ。これじゃ自分たちの勝ち目が薄いと読んだんだ」
確かに近頃は天気が悪く、試合当日も悪天候が予想されている。
セコいな、スリザリン。

オリバーは作戦練り直しを迫られた。
彼が言うには「ハッフルパフ戦の鍵は、シーカーのセドリック・ディゴリー」らしい。
授業の合間にやってきては、ハリー相手に攻略法を長々とぶち上げていたよ。

一方、ハッフルパフも大変らしく、マグル学で会った時に晶から愚痴を聞かされた。
「俺達だって、いきなり『グリフィンドールと試合しろ』って言われて、いい迷惑だ。おかげで今、セドリックが、作戦の立て直しに必死だぜ。まったくマルフォイの奴め！」
横で聞いていたハーマイオニーとアーニー・マクミランも、そうだそうだとうなずいていた。
ちなみに、晶は2年生から選手をしていて、ポジションはビーターらしい。

＊

試合前日になっても、オリバーはハリーを捕まえ、ディゴリー攻略法をぶち上げていた。
私、ハーマイオニー、ロンは話が長引きそうなので、先に闇の魔術に対する防衛術の授業に行く。

席に着くと、ハーマイオニーが教科書を広げながら言った。
「昨日ルーピン先生に質問しに行ったら、顔色があまり良く無かったわ。大丈夫かしら？」

そっか、満月は今日だっけ。

私は軽い調子で答える。
「きっと大丈夫だよ。すぐ良くなるよ」

それに、もし授業ができないようなら、他の先生に代わりを頼んでいるハズだ。

「それにしても、ハリーは遅いわね」

「まだオリバーの演説が続いてたりして……」

「もう授業が始まっちまうぜ」

ハーマイオニー、私、ロンがそれぞれ心配する。

そうこうするうちに時間が来た。

ドアを開けて入ってきたのは、整髪料付けすぎの重たい黒髪・黒目・黒ローブ。

げげっ、よりによって、代理はスネイプかいっ!?

授業開始から10分後、やっとハリーが駆け込んできた。

そしてハリーはスネイプを見て、この世の終わりみたいな顔をした。

さっそくスネイプは、遅刻したハリーを減点した。

全員そろったところで、スネイプはこう言った。

「我々が今日学ぶのは『人狼』である」

ヒッと息を呑んだ私を見て、スネイプが嫌味な笑い方をする。

「でも、先生。まだ狼人間までやる予定ではありません。予定はヒンキーパンクです」

ハーマイオニーが抗議し、私もそれに続く。

「そうです。先生は『代理』で授業をされるのですから、ヒンキーパンクをやってください」

「ミス・グレンジャー、そしてキサラギ」

スネイプの声が氷点下まで冷え込む。

「この授業は我輩が教えているのであり、君達ではないはずだが。そ

の我輩が諸君に３９４ページを開くように言っているのだ。全員！
今すぐだ！」
みんな渋々言われた通りにした。

そしてスネイプは「人狼と真の狼の見分け方を知っている者は？」と尋ねた。
ハーマイオニーが手を上げる。

しかしスネイプはそれを無視し、あろうことか私を見て、嬉しそうに猫撫で声を出した。
「ミス・・キサラギ、答えたまえ」

げ、そう来たか、このサディストめ！
ていうか、いつも呼び捨てするくせに、何で敬称の「ミス」とか付けちゃってんの？
すんごいムカつく!!

私はため息混じりにやる気なく淡々と答えた。
『人狼』は狼人間に咬まれた人が、満月の夜に月光を浴びて変身する『病気』です。人狼は鼻面に白い筋状の毛が生えますが、普通の狼にそんな毛はありません。しかし、鼻面の毛は目立ちにくいので、側で観察しないとわかりません。あと人狼の方が普通の狼よりも後脚が少し長いです」

みんながあっけにとられて私を見ていた。
というか、自分の父親の「持病」だから、答えられて当然なんだけど。

スネイプは、フンと鼻を鳴らして言った。
「諸君、何故今のを全部ノートに書きとらんのだ？」
みんながいっせいにペンを動かし始めた。

スネイプは生徒の間をまわり、今までの授業で、何を学んだかを確認していった。
そしてディーン・トーマスのノートを見てつぶやく。
「実に下手な説明だ。これは間違いだ。河童はむしろ『蒙古』によく見られる」

いやいや、間違ってるのはあなたですよ！
たまらず私はツッコむ。
「お言葉ですが先生。河童の主な生息地は『日本』で間違いありません。河童は日本と中国の一部に生息する妖怪です」

スネイプが固まり、ディーンはこっそり私にガッツポーズをして見せた。

「河童は日本で最もメジャーな妖怪で、日本人で河童を知らない人はいません。また私がいた青龍学院魔法学校には、河童が生息する池があり、日本の魔法呪術省が特別保護区に指定していました」

さっきのお返しとばかりに、私はネチネチと嫌味ったらしく説明してやる。

「むしろ蒙古、つまりモンゴルのような乾燥した場所では、河童は生きていけません。何故なら河童は頭の上の皿から水がなくなると、動けなくなるからです」

スネイプのこめかみがピクピク震えていた。
あ、ちょっと調子に乗り過ぎたかな？

授業が終わって、スネイプは羊皮紙2巻のレポート課題を出した。
大ブーイングが起きたのは言うまでもない。

おまけにレポートの課題は「人狼の見分け方と殺し方」だったんだよ！

ひょっとしたら、賢い人は父さんの「持病」に気づいてしまうかもしれない。

ハーマイオニーなんて気づきそうな気がする。

スネイプは、父さんの病気をバラして、ホグワーツから追い出す気なのか？

＊

父さんの具合はあまり良くないらしく、5年生の授業も休んだらしい。

アンジェリーナから聞いた話だと、代講のマクゴナガル先生は、ちゃんと計画どおり失神術と気付け呪文を教えたのだという。

スネイプはマクゴナガル先生の爪の垢を煎じて飲むべきだ！

こうなったら、ギャフンと言わせてやる！

なんてことを考えながら、私は談話室の窓から満月をぼんやり眺めていた。

「レイ、どうしたんだい。月なんか眺めて？」

振り返るとフレッドがいた。

「スネイプにイタズラを仕掛けたいなって思ってたんだ。何か良いイタズラないかなって」

「何ですと！」

そこへジョージも割り込んできた。

「スネイプにイタズラ？　面白そうじゃないか！」

そして双子は見事なユニゾンで言った。

「「我らにお任せあれ。実はとっておきの仕掛けがございます」」

２０・嵐のハッフルパフ戦

ハッフルパフ戦の朝が来た。
私は雷の音で目が覚めた。
ベッドから出て外を見ると、台風並みの大嵐だ。

朝ご飯を食べに行くと、ハリーはすでに席でトーストをかじっているところだった。
「この天気だ。君も出番があるかもしれない。準備しておけ」
キャプテンのオリバーは、私の肩を叩いて言った。

補欠の私を含め、選手は真紅のユニフォームに着替え、クイディッチ場へ向かう。
外は滝のような雨で、傘をさしてもびしょ濡れだ。
油断すれば吹っ飛ばされそうなぐらい風が強い。

やがてハッフルパフの選手も集まってきた。
ビーターの棍棒を持った晶が私に手を振っている。
噂のハッフルパフのシーカー、セドリック・ディゴリーは背が高く、なかなかハンサムだった。

そして試合が始まった。
土砂降りの雨で、視界は最悪だ。
ベンチで毛布をかぶって待機している私には、戦いの様子がかなり見づらい。

実況は、グリフィンドール寮生でフレッドとジョージの友達、リー・ジョーダンだ。
「タチバナ、ブラッジャー・・・った!!　おっ・・フレ・ド、・ズリー」
けど、声は嵐で途切れ途切れにしか聞こえない。

目を凝らして空を見上げれば、ハリーは風にあおられ、バランスを取るのに精一杯らしい。
晶がハリーの後ろに回り込むのがボンヤリ見えた。
晶は近くに飛んできたブラッジャーを、ハリー目掛けてかっ飛ばす。
「ハリー！　後ろっ!!!」
慌てて私は叫んだけど、風の音が酷すぎてかき消される。

晶の攻撃に気付けず、ブラッジャーがハリーの箒に命中した。
一瞬、ハリーはバランスを崩しかけた。
けど、どうにか体勢を立て直し、落ちずに済んだようだ。

嵐の中でも、アンジェリーナ、ケイティ、アリシアの3人は、何とか点を重ねていたようだ。
スコアボードを見れば、グリフィンドールが４０点差で優勢だ。

しばらくして、ホイッスルが鳴った。
「タイムアウトを要求した！」
オリバーが大声で集合をかける。

「レイ、ケイティと交代だ」
ケイティを見るとガタガタ震えていた。
「れ、レイ。後は頼んだわ」
彼女の唇は寒さで青紫色になっていた。
私はかぶっていた毛布を、彼女に渡した。

ハリーはメガネを外し、ユニフォームで拭いていた。
「こいつをかけていたら、僕、全然だめだよ」
そう言って、ハリーはメガネをブラブラさせる。
レンズがびしょ濡れで、全然前が見えないらしい。

するとハーマイオニーがやってきて、ハリーにメガネをよこすように言った。
彼女はメガネを受け取り、レンズを杖で軽く叩いて呪文を唱える。
「Ｉｍｐｅｒｖｉｕｓ！」
さっすが、ハーマイオニー！
防水呪文をかけるなんて頭良い！
さあ、試合再開だ。
私は愛用の箒、空龍Ｈ４に乗って地面を強く蹴った。
アリシアからパスをもらう。
雨で滑りそうになりながら、私はクアッフルをキャッチし、ゴールへ飛ぶ。
そこへ敵のチェイサーが、クアッフルを奪いにきた。
一旦、一気に地面スレスレに降下してかわし、箒の柄を上に向けて急上昇させる。
そして、私はクアッフルをゴールに投げ込んだ。
敵のキーパーが動いたが間に合わず、クアッフルはしっかりゴールを通過した。
「よっしゃー!!!」
私はガッツポーズをして叫んだ。
ホグワーツでの初ゴールだ。
満月直後で、部屋で休んでいる父さんにも見せたかったなあ。
それから、雨はますます強さを増し、雷が何度も鳴り響いた。
このまま、ハリーかディゴリーがスニッチを取らなければ、試合は夜までもつれ込むだろう。

スタンド近くを飛んでいると、てっぺんの席に黒い毛むくじゃらの犬が座っているのが見えた。
前にホグズミードで見かけた犬のようだ。

気づくと、ブラッジャーが後ろから飛んできたので、私は慌てて宙返りして避けた。
また雷が鳴り稲光が観客席を照らすと、犬はやっぱりそこに座っていた。

ふと上を見ると、ディゴリーがキラッと光るものを猛スピードで追っていた。
スニッチを見つけたんだ！
オリバーに急かされ、ハリーもスニッチを追う。

その時、急激に周りの空気が凍りつくように冷たくなった。
クィディッチ場に吸魂鬼が大量に侵入してきたのだ。

ハリーがバランスを崩した。
箒が手から離れ、ハリーは２０ｍぐらいの高さから地面へ真っ逆さまに墜落していく。
ハリーの箒は強烈な風で遠くへ吹っ飛ばされてしまった。

もうダメだと、思った瞬間！

弾丸のような勢いで、観客席からダンブルドア校長が飛び出し、厳しい顔つきで杖を振った。
ハリーの落下スピードが遅くなった。
続いて、校長は杖を吸魂鬼に向け、杖先から白銀の巨大な鳥のようなものを出す。
吸魂鬼はあっという間に競技場から消え去った。

私も含め、グリフィンドールの選手が墜落したハリーに駆け寄った。
ハリーは、両手足をだらんと地面に投げ出し、気を失っていた。
「ハリー、ハリー？」
私が頬をペタペタ叩いて名前を呼んでも、反応がない。
でも、見たところ、大きなケガはしていないようだ。
気絶しているのはホグワーツ急行の時と同じで、吸魂鬼のせいに違いない。
だけど、残念ながら、今はチョコレートの持ち合わせがない。
その時ハリーの後ろに、セドリック・ディゴリーが着地した。
左手に金色の小さな羽がついた物体を握っている。
スニッチを取ったのだ。
振り返ったディゴリーは、地面に横たわるハリーを見て凍りついた。
ハリーが墜落したのに気づいてなかったようだ。
「吸魂鬼達には、ホグワーツの敷地内に入ってはならぬと申しつけたはずじゃ。約束を破るとは言語道断。話をつけねばならぬ」
駆けつけたダンブルドア校長が静かに言うと、その場の空気がピリピリと張り詰めた。
校長が激怒しているのはみんなわかっていた。
それから校長は魔法で担架を出し、ハリーは医務室へ運ばれていった。
その後、クィディッチ場は大騒ぎになった。
ディゴリーは、審判のフーチ先生に試合のやり直しを求めた。

だけど、彼女はハッフルパフの勝利を宣言した。
オリバーも潔く、グリフィンドールの負けを認めた。

しばらくして、医務室に運ばれたハリーは意識を取り戻した。
ハリーは、またしても吸魂鬼を見て気絶したことに、ショックを受けているように見えた。

それに吹き飛ばされたハリーの箒ニンバス２０００は、暴れ柳に衝突したらしい。
箒は木っ端微塵にされ、完全に使い物にならなくなってしまった。

その晩、大広間で夕食をとるグリフィンドールチームは、お通夜のように暗かった。
私もあまり食欲がなく、かぼちゃジュースとトーストしか口にできなかった。

ちなみに、ハーマイオニーとロンは、ハリーに付き添って、夕食を医務室でとることにしたようだ。

1人で寮に戻ろうとすると、セドリック・ディゴリーと晶に呼び止められた。

「ミス・キサラギ。ハリー・ポッターの具合は？」
ディゴリーはハリーを心配していた。
「大丈夫です。けど、吸魂鬼で気絶したことと、箒が壊れたことにショックを受けていました」
「そうか。それは大変だね」
晶が尋ねた。
「伶、箒は直らないのか？」
「それがさ、暴れ柳にぶつかっちゃって……」
ああ、とディゴリーも晶も気の毒そうな顔をした。

「それにしても、僕らは本当に『勝ち』で良かったんだろうか？」
ディゴリーに続けて、晶も重たく呟く。
「ああ。そもそも吸魂鬼に襲われちゃ、俺だって落ちるに決まってる。あんな勝ち方、俺も後味悪ぃよ」
「でも、負けは負け。勝ちは勝ち。２人がそう言ってくれるだけで、充分嬉しいです」
私がそう言うと、２人はやっと少し笑った。

21・交渉

月曜日の放課後、私は父さんの部屋を訪ねた。

私は一昨日のハッフルパフ戦について話す。

父さんは、私が試合に出場して、点を入れたことは喜んでくれた。

でも、試合中に大きな黒犬を見たことを話すと、父さんの表情が険しくなった。

さらに、ハリーが吸魂鬼に襲われること、ハリーの箒が壊れてしまったことを話すと、父さんはとても気の毒そうな顔をした。

「ハリーは、ホグワーツ急行に吸魂鬼が出た時も倒れた。そして一昨日の試合……ハリーは相当気にしてるようだよ。周りにいた私達は、吸魂鬼の影響をあまり受けてないのに、自分は気絶しちゃったから」

「伶。それは、きっとハリーが、目の前で両親を殺されたからだと思う。1歳の時だから、はっきりとした記憶は残っていないだろう。だが恐らく、彼の心の奥底に恐怖がこびりついている。ハリーが吸魂鬼の影響を受けやすいのは、そのせいだろう」

じゃあ、ハリーはこのままブラックが捕まるまで、吸魂鬼に怯え続けなきゃいけないの？

ここで私はふと思いつく。

「父さん、ハリーに吸魂鬼を追い払う呪文を教えたらどう？　ほら、ホグワーツ急行でやった！」

あの時の父さんは、最高にカッコよかったな。

「『守護霊の呪文』のことだね。だが、大変難しい呪文だ。大人の魔法使いでも、使える人は非常に少ない」

「けど、父さんは使えるでしょ？　なら、教えることはできるんじゃな

いの？」
私がそう言うと、父さんは腕組みをして考え込んだ。
ドンドンドンドン!!
その時、けたたましく部屋のドアがノックされた。
「キサラギ！　やはりここにいたのかっ！」
怒鳴り込んできたのは、スネイプだ。
しめしめ、そろそろ来ると思ってたんだ。
父さんが「セブルス、どうしたんだい？」と尋ねる。
「ルーピン！　貴様、娘に一体どういう教育をしている!?」
スネイプはそう言うと、丸めた羊皮紙を突き出した。
それを受け取った父さんは、広げて読み始める。
「ん？　これは伶のレポートだね。テーマは『人狼の見分け方と殺し方』か。ああ、君が僕の代わりに授業をした時の……」
［狼人間にとって、もっとも弱いポイントは眉間だ。だから狼人間に襲われたら、眉間をねらって失神術をかけるとよい。どうしても殺さなければいけない場合は、純銀製のナイフを、眉間又は心臓に突き刺す。純銀製のナイフを使う理由は、銀の持つ魔力が人狼にとって有害なためで……］
レポートを読み終えた父さんは、ニヤリと笑った。
「うん。よく書けている。何か問題でも？」
「問題大有りだ！」
スネイプの鋭いツッコミが入る。
「これは日本語で書かれているではないか！　しかも翻訳魔法防止加工の羊皮紙に書くとは、一体何のつもりだ!?　読める訳ないだろうが！」

スネイプの眉間に深いシワができていた。

私はヘラっとこう返しす。

「すみませ～ん。父は日本語が読めるので、先生もてっきり日本語が解るかと思ったんですが。それに『日本語でレポートを書いてはならない』なんて規則はありませんよね？」

「ここはイギリスだ!!」

スネイプはカンカンだけど、そこはスルーする。

「あ。一応、英語で書いたのもありますよ？」

私が鞄から羊皮紙2巻を取り出して渡すと、スネイプはひったくるように受け取って広げた。

レポートは日本語版も英語版も内容は一緒だ。

スネイプはしばらく文章を読んでいたけど、やがて羊皮紙から目を離し「ふん！」と鼻を鳴らす。

そしてちらっと父さんを見て言った。

「まあ、ルーピンの娘なら、これぐらい書けて当然だ」

これって褒めてるの？

こりゃ、明日は雨じゃなくて飴でも降るかな？

そして、スネイプは読み終えたレポートを丸めた。

ポンっ！

その瞬間、スネイプの髪が鮮やかなエメラルドグリーンに変化した。

それと同時に、おなじみの黒ローブもエネラルドグリーンのエナメル革のジャケットに変わる。

「きっ、キサラギ、お、お前は、今、何をした……」

「くっ、セブルス。その髪っ、よく似合っているよっ、鏡を見るといい

よっ!!」
父さんは笑いをこらえるのに必死だ。
スネイプは部屋に立てかけてあった姿見で、自分に何が起きたかを確認した。
先に日本語のレポートを提出しておいたのは、もちろんワザとだ。羊皮紙に仕掛けがしてある英語版のレポートをスネイプに手渡して、確実に読ませるためにね。
この仕掛けはフレッドとジョージがしてくれたんだ。
「レイ・アルメリア・キサラギ・ルーピン!!」
スネイプは地をはうような声で、何故かフルネームで私を怒鳴りつけた。
「元に戻せ！　今、すぐにだ!!」
「わかりました。でも、条件があります」
ふっふっふ、そう簡単には戻らないんだよ。
「人狼のレポートを撤回して下さい」
「断る」
即答かいっ！
まあ、予想通りの台詞だけどね。
「じゃあ、その頭とローブは、ずーっとそのままですね」
「何だと!?」
スネイプが呪い殺しそうな目で私を睨む。
ありゃありゃ、怖い怖い。
「実はそれ、先生が『レポートを撤回する』って言って下さったら、元

に戻る仕掛けなんです」
「断る。何が悲しくて、お前なんぞの言うことを聞かなければならないのだ！」
父さんがクスクス笑いながら口を挟む。
「伶、他にセブルスを元に戻す方法はないのかい？」
「残念ながらありません」
私は即答する。
「だ、そうだよ」
父さんはおどけて肩をすくめて見せた。
「きっ、キサラギ、お前という奴はっ!!」
スネイプは私を睨みつけ、輝くエメラルドグリーンの頭を抱えた。
しかも、ギリギリと歯ぎしりの音が聞こえてきた。
カシャ！
「今の表情イイよ。セブルス」
ふと見ると、父さんがカメラを構えていた。
ていうか父さん、いつの間にカメラなんて用意してたの!?
間もなく、ジジーっと音がしてカメラから写真が吐き出された。
父さんが出てきた写真を取り上げてパタパタと振ると、だんだんエメラルドグリーンのローブを着て、緑の髪を抱えたスネイプの姿が浮かんできた。
「セブルス、よく撮れているよ。せっかくだから、他の先生方に見てもらおうかな」
父さんはへらりと言ってのける。
「Ａｃｃｉｏ！」

するとスネイプは素早く杖を振り上げて、父さんから写真を奪った。
「Ｌａｃａｒｎｕｍ　Ｉｎｆｌａｍａｒａｅ！」
そして、あっという間に燃やしてしまった。
父さんは「あ～もったいない」と残念そうだ。
スネイプは大きくため息をつき、再び頭を抱えながら言った。
「ええい！　良いだろう。キサラギの望み通り、レポートは撤回してやる。だがその代わり、グリフィンドール２０点減点！」
スネイプが渋々宣言すると、頭がいつもの整髪料付け過ぎの重苦しい黒髪に戻る。
ローブも真っ黒に戻った。
そして、スネイプはバタン！　とドアを開けて出ていった。
スネイプが部屋を出た途端、私と父さんが爆笑したのは言うまでもない。
ちなみに、あのカメラは、マグルのインスタントカメラだったらしい。
父さんが授業で使うために、マグル学のバーベッジ先生に借りたんだって。

22・気づかれた秘密

グリフィンドール寮に戻った私は、談話室で宣言した。
「3年生のみんなにお知らせがあります。さっき、スネイプ先生に交渉して、『人狼』のレポートを撤回してもらいました！」

すると、そこにいた生徒達がざわつき始めた。
「やったー!!」
ディーンがバンザイする。
近くにいたネビルは、ホッと胸を撫で下ろしている。

「レイ、あなたスゴいわね」
「ありがとう！」
ラベンダーとパーバティが笑顔で私の肩を叩いた。

「根性あるなあ。あのスネイプに交渉するとか」
シェーマスが言った。

その時、ちょうど入院していたハリーが、医務室から戻ってきた。
もちろん彼もレポートの撤回を聞いて大喜びした。

「レイ、一体どうやったんだ？」
ロンが尋ねた。
「そりゃあ企業秘密だよ。でも、フレッドとジョージに後でお礼を言わなきゃいけないなぁ」
私はニヤリと笑った。

でも1人だけ、レポート撤回を残念がった人がいる。
ハーマイオニーだ。
どうやら、さっきレポートを書き上げたところだったらしい。

「レイ、話があるの。ちょっといいかしら」
ハーマイオニーは私を女子寮の部屋に連行した。
頭の中で「ドナドナ」の歌が流れ始める。
ヤバイ、こりゃハーマイオニー、怒ってるよね？

「ごめん。君はせっかく書いていたのに、レポートを撤回させたりして」
部屋に着くなり速攻で頭を下げて謝る。
するとハーマイオニーは、ふぅとため息をついた。
「レイ、どうしてそんなことを？」

「スネイプは代理でしょ？　なのに、本来の授業の進み方を無視して、勝手に教科書の最後の方に載っている『人狼』をやるのは納得いかなかったからだよ」
私は口をとがらせた。

「だからといって、レポートの撤回は、やりすぎだと思うわよ？」
ハーマイオニーは少し考えてから口を開く。
「……でも、これではっきりしたわ」

何がはっきりしたというんだ？

ハーマイオニーは、じっと私の目を見つめて言った。
「あなた、ルーピン先生の娘でしょ？」

あちゃ、バレたか。
でも、あっさり認めるのは悔しいから、どうしてそう思うのかと尋ねてみた。
すると、ハーマイオニーは理路整然と説明し始めた。

まず、私と父さんが同時にホグワーツに来たこと。
私と父さんの髪の色が同じ鳶色であること。
木曜日にハーマイオニーが父さんに質問をしに行ったら、父さんの部屋に、先日私がホグズミードで買った紅茶の葉とお菓子が置いてあったこと。
そして、私が今日、スネイプのレポートを撤回させたこと。

「参ったなぁ。上手く隠してたと思ってたのに。ま、バレたなら仕方ないか」
私はダンブルドア達が、夏に青龍学院へ父さんを引き抜きに来たところから話を始めた。
それは、私がホグワーツに編入することになった経緯を話すことでもあった。

また、私が父さんと親子であることを隠していた理由も説明した。
周りの生徒に父親が先生だって知られていると、テストに出る問題を教えろとか、自分の成績を上げるように頼んでくれとか言われて面倒だったからってね。

「なるほど。わかったわ。でもね、レイ。私、もうひとつ聞きたいことがあるの」
ハーマイオニーは神妙な顔で、本棚から天文学の授業で使う「月齢表」を取り出す。
そして私の目の前に広げた。

月齢表!!?
全身の血の気がスーッと引いた。
ハーマイオニーは、そっちにも気づいたのか！

「先生が体調を崩されるのは、決まって満月の頃。ねぇ、レイ。ルーピン先生のご病気って……」

ハーマイオニーは言葉をつまらせた。

「ああ、君なら気づくかもしれないって思ったんだ……。そう、父さんは『人狼』だよ。スネイプは、うちの両親と同級生でね、父さんの『持病』を知っているんだ」

人狼はヨーロッパでは非常に偏見が強い。

「人狼」というだけで「危険な怪物」と思われる。

満月の夜以外は、全く普通の人間と一緒なのに。

「気づいたのは、やっぱりスネイプのレポートで？」

「ええ、それとボガートよ。先生の前で、ボガートは輝く白銀の玉になったわね。あれは何だろうとずーっと考えていたわ。最初はラベンダーの言うように水晶玉かと思ったけど……あれは『満月』よね」

私は思い切って尋ねた。

「ねえ、ハーマイオニー。『人狼』は怖い？」

「そ、それは……」

ハーマイオニーは肩を震わせる。

「私は怖い。怖いよ、私だって……。ただ、それは満月で変身して『理性を失った状態』に限るけど。言っとくけど、ダンブルドア先生は、ちゃんと対策をしている。スネイプに脱狼薬を作らせてる。父さんは、薬さえ正しく飲めば、満月で変身しても全然危険じゃない。それに人狼は、満月に変身した人狼に咬まれなきゃ感染しない病気で、遺伝はしないから、私は人狼じゃないよ」

とにかく私は必死だった。

下手をすれば、ハーマイオニーは父さんの「持病」をみんなに話してしまうかもしれない。

そうすれば、父さんはここに居られなくなる。

私は立ち上がって頭を下げる。
「ハーマイオニー、お願い。父さんの『持病』を黙っててくれないかな？　父さんはここで教えるのが、長年の夢だった。私は、君に嫌われてもいいけど、父さんがホグワーツを追い出されるのだけは耐えられないんだ！」

しばらく沈黙が流れた。
「わかった。秘密は守るわ。ルーピン先生は素晴らしい先生よ。だから、私も辞めて欲しくないわ」

それからハーマイオニーは、私の背中にそっと手を置いた。
「ほら、レイ。顔を上げて。私があなたを嫌う訳ないじゃない！」
私は気が抜け、ベッドに座り込んでしまった。

＊

後日、父さんにハーマイオニーが「持病」に気づいたと伝えると「ああ、やっぱり」と苦笑いしていた。
でも、ハーマイオニーが秘密を守ると約束したと聞き、父さんはホッと胸を撫で下ろしていた。

次の授業には、ちゃんと父さんは復活した。
ロンなんて「『闇の魔術に対する防衛術』を教えてるのがスネイプなら、僕、病欠するからね」って言ってたけど、取り越し苦労だったね。
そして父さんは、元々の予定通りにヒンキーパンク（おいでおいで妖精）の授業をした。

授業が終わった後、父さんはハリーを呼び止めていた。
きっと、吸魂鬼対策について話すつもりなんだろうね。

23・箒

ハッフルパフ戦でニンバスを暴れ柳に壊されたハリーには、箒がない。

そこで、彼が新しい箒を手に入れるまでの間、私は自分の箒（空龍H4）を貸すことにした。

私は補欠だから、クィディッチの練習は学校の箒を使えばいいからね。

「レイの箒、乗りやすいね。どこのメーカーだい？」

ハリーは空龍が結構気に入ったらしい。

「日本の東郷飛行具社っていうところだよ。しかもこの箒、『縮小スイッチ』がついてて、小さくできるんだ。ほら！」

私は空龍の縮小スイッチを操作する。

箒は一瞬で縮んで、手のひらサイズになった。

わーっと、チームのみんなから歓声が上がった。

「でもこれ、飛んでる途中に縮んだりしない？」

アンジェリーナが尋ねた。

「大丈夫。飛んでる時は安全装置が働いて、勝手に縮まないようになってるからね」

「へぇ、すごいなあ」

フレッドとジョージが見事なユニゾンで感心した。

箒の自慢をしていて、ふと気づいた。

東郷飛行具社と言えば……あ、フミの実家じゃん！

何ですぐ思い出さなかったんだ、私!?

「そういえば、青龍学院にいた時、東郷飛行具社の社長令嬢と友達だったんだ。良かったら、箒のカタログを送ってくれるように頼んでみようか？」

　すると、オリバーがやってきて言った。

「そうだな。先日の試合を見たが、レイが使っていたトーゴーの箒は、あの悪天候下で抜群の安定性を発揮していた。それに『縮小機能』はかなり便利なようだな。ハリー、検討する価値はある。レイ、ぜひカタログを送ってもらってくれ」

　というわけで、私はフミこと東郷史子に手紙を書いた。

　ヒキャクに手紙を渡すと【任しとき！　実は俺、一度、日本に行ってみたかったんよ！】と、かなり張り切っていた。

　そして1週間後。

　朝ごはんの席で、ヒキャクは巨大な包みを持って戻って来た。

「ありがとう、ヒキャク。ご苦労様」

【レイ。アンタの友達、ええ娘さんやね！　俺に高級ベーコンをたくさんくれたばい！　あげなウマいベーコン、食べたことなかよ!!】

　長旅にもかかわらず、ヒキャクは羽をパタパタとさせ、ご機嫌だった。

「ヒキャクにとっては、ベーコンやハムさえくれりゃ、誰でもいい人なんじゃないの？」

　ヒキャクはベーコンとハムが大好物なんだよね。

【お友達が、レイにヨロシクっち言いよったぞ。そんじゃ！】

　ヒキャクはそう言って、皿の上のハムエッグをかっさらって行った。

「《あ、こらっ！　ヒキャク、ハムエッグ返せ!!》」

私は思わず日本語で叫んだけど、ヒキャクは無視して飛んで逃げた。
グリフィンドールのテーブルで、爆笑が起きる。
気を取り直し、フミからの包みを開けてみた。
中には、箒の１９９３年版カタログ（英語版）と、箒手入れセットの試供品、そして手紙が入っていた。
とりあえず、カタログと箒手入れセットはハリーに渡し、私はフミからの手紙を開いた。
それにしても、日本語の文章なんて久しぶりに読むなあ。
伶、元気にしてる？
青龍のみんなは元気でやってるよ。
私、９月からポジションがチェイサーから、シーカーに変わったんだ。
キャプテンの河口先輩が私に「宮田先輩は頼りないから、お前がやれ」って言ったんだけど、　シーカーはけっこう難しくて苦労してる。
けど、この前、玄武呪術学園との練習試合で、私がスニッチ取って勝ったんだよ。
ところで伶、イギリスでの生活はどう？
ホグワーツの授業はけっこう難しいって聞いたよ。
でも、青龍で1年の時からずっと学年トップだった伶なら、きっと大丈夫だよね。
それにしても、あのハリー・ポッターと友達になるなんて、伶はスゴイなあ。
あ、そうそう。
頼まれてた英語の箒のカタログ最新版を送るね。
うちの箒はとっても丈夫だから、ぜひハリー・ポッターにも使ってほしいな。

というわけで、箒の宣伝よろしく！
寒さがきびしくなるから、カゼ引かないようにね。
ルーピン先生にも、よろしくと伝えておいてね。

東郷史子より

フミの手紙は相変わらずの丸っこい字で、なんだかとても懐かしかった。

それにしても、入学した時からチェイサー一筋だったフミが、シーカーになったのには、驚きだ。

けど、確かに前のシーカーだった高等部1年の宮田先輩は、あまり上手くなかったもんなぁ。

２４・知りたくなかった現実

２４・知りたくなかった現実

気づけば、クリスマスが近づいていた。
私は父さんもいるから、クリスマスはホグワーツで過ごすことに決めていた。
親戚と仲が悪いハリーは、毎年クリスマスは学校に残るのだという。
ハーマイオニーとロンも、残ることにしたようだ。

クリスマス前最後の週末、ホグズミード行きの許可が出た。
外が寒そうだったので、私は耳当てを着け、コートを着込み、マフラーもきっちりと巻く。
そして、ハーマイオニーとロンと一緒にホグズミードに向かった。
ハリーと一緒に行けないのは、心苦しかったけど、仕方ない。

ホグズミードは、すっかり真っ白な雪景色だった。
店先にはリースやツリーが飾られ、街にはクリスマスキャロルが流れていた。

私は手芸店で、毛糸と図案集を買った。
「レイ、君、編物するのかい？」
ロンが尋ねた。
「うん。今年のクリスマスプレゼントは、父さんにセーターを編むつもりだよ」
「いいわね。きっとお父様もお喜びになるわ」
ハーマイオニーは目を輝かせた。

それから私達はいつものように、ハニーデュークスで、ハリーへの

お土産を選ぶことにした。

私達は「異常な味」のコーナーで、立ち止まる。

「ねえ、これなんか面白いんじゃない？」

私は血の味キャンディーのお盆を指したけど、「ハリーはこんなもの欲しがらないわ」と、ハーマイオニーに却下された。

「じゃ、これは？」

今度はロンが、ゴキブリ・ゴソゴソ豆板の瓶を持ち出し、私とハーマイオニーに突き付ける。

「絶対嫌だよ」

その時、いないはずのハリーの声が聞こえた。

空耳かと思ったら、なんと本当にハリーがいた！

ていうか、君は何でここにいるんだ!?

ロンは豆板の瓶を落としそうになったし、ハーマイオニーなんて金切り声を上げている。

するとハリーが、フレッドとジョージに「忍びの地図」をもらったことを説明した。

あの双子、余計なことを!!

ブラックが捕まってないのに、ハリーがホグズミードに行くのを止めるどころか、煽（あお）るなんて！

私はハリーに学校に戻るように言ったんだけど、ハリーは嫌がる。

すると、ロンが不満そうな顔でこう言う。

「フレッドもジョージも、何でこれまで地図を僕にくれなかったんだ！　弟じゃないか！」

「ロン、君は怒るポイントがズレてる。問題はハリーが学校を抜け出

したことだってば！」
私はすかさずツッコむ。

一方、ハーマイオニーは「忍びの地図を、マクゴナガルに渡すべきだ」と主張した。

いや、だけど、マクゴナガルは、ちょっとＮＧだな。
地図の製作者の１人はうちの父さんだから、それがバレると父さんの立場がないもんなぁ。

ハーマイオニーのお説教は続く。
「地図にある抜け道のどれかを使ってブラックが城に入り込んでいるかもしれないのよ！　先生方はそのことを知らなければならないわ！」

これにハリーが反論した。
「ブラックが抜け道から入り込むはずはないよ」

私はたまらずハリーに釘を刺す。
「おいおい、その自信はどこから来るの？　私はその考えは甘いと思う。ブラックは抜け道を知っている……と考えなきゃダメだ」

ここで私はハリーに「ブラックも地図の作者の１人だ」とハッキリ言うべきだったのかもしれない。
けど、さすがに言えなかった。

でも結局「クリスマスだぜ。ハリーだって楽しまなきゃ」というロンの一言で、４人でホグズミード休暇を楽しむことにした。

店をを出ると外は吹雪だ。
しっかり着込んだ私達に対し、防寒具なしのハリーは寒そうにして

いた。
かわいそうなので、私は耳当てとマフラーを貸す。
「とりあえず、どっか暖かいところに行こう。このままだと、ハリーが氷漬けになる」
私がそう言うと、ロンが「三本の箒」に行こうと言い出した。
三本の箒はお客さんでごった返していた。
みんなでバタービールを飲んでいると、店のドアが開いて、新しいお客さんが入ってきた。
マクゴナガルとフリットウィック、ハグリッドと、もう1人の別の男……イギリス魔法大臣のコーネリウス・ファッジだ。
実はファッジとは昔、日本のお祖父ちゃんの家で会ったことがある。

するとそれを見たハーマイオニーとロンは、見事な連携プレーで、ハリーをテーブルの下に押し込んだ。
ハリーがここにいるのを知られちゃマズイもんね。
さらに念の為、ハーマイオニーが近くのツリーを魔法で移動させ、先生方から私達のテーブルを隠す。

先生方とファッジ大臣は席に着き、店主のマダム・ロスメルタと話を始めた。
先生方とファッジは、シリウス・ブラックがアズカバン行きになった理由や、脱獄するまでの流れについての話をしていた。
それはハリーにとって、非常に残酷な話だった。
私はほとんど知っている内容だったけど、何度聞いてもいたたまれない話だ。
けど、ブラックが脱獄直前、アズカバンを視察に来たファッジに「ク

ロスワードパズルが懐かしいから、読み終わった新聞をくれ」と言ったことには驚いた。
１０年以上吸魂鬼だらけのアズカバンにいるのに、ブラックはファッジと普通の会話をしたらしい。

有り得ない!!
アズカバンは、並の魔法使いなら1日もたたずに正気を失う場所だっていう噂なのに。

やがて、先生方とファッジの長い話は終わり、彼らは店を出て行った。
それを見計らって、私、ハーマイオニー、ロンは、テーブルの下のハリーに声を掛ける。

するとハリーはサッと立ち上がり、唇を真一文字にして私達を見た。
そして、勢いよく店を飛び出して行ってしまった。

私達は慌ててマダムに代金を払い、ハリーを追ったけど、猛吹雪がハリーの姿をかき消していた。

クリスマス休暇前の浮かれた気分は、完全に吹っ飛ばされた。

ハリーを追いかけるのをあきらめた私、ハーマイオニー、ロンはとぼとぼと、ホグワーツへ歩きだした。

「私、知ってた。ブラックがハリーの名付け親だって。あいつがハリーのご両親を裏切ったって。父さんから聞いたから」
私は重たくつぶやいた。

「そういえば、レイのご両親は、ハリーのご両親と同級生だったわね」

たぶん、ハーマイオニーの頭には、父さんの顔が浮かんでいるに違いない。

「うん……。特にうちの父さんは、ハリーのお父さんやピーター・ペティグリューさんと仲が良かったし」

そこへロンが噛み付いてきた。

「レイ、どうして黙ってたんだよ！　ブラックがハリーの名付け親だって⁉」

「言えるわけないじゃん！」

私は思わず怒鳴ってしまった。

「『君の名付け親はシリウス・ブラックで、君のご両親の居場所をヴォルデモートに密告した』なんて‼　そんなことハリーが知ったら、どれだけ傷つくか考えたら、言えるわけなかったんだ‼」

「レイ、『例のあの人』の名前を言わないでくれ！」

ロンが「ヴォルデモート」と聞いて縮み上がる。

そうだった、普通のイギリスの魔法使いは、ヴォルデモート卿の名前を聞いただけで、恐怖で震え上がるんだっけ。

私は少し冷静になった。

「ごめん。うちの家族は、みんな普通にそう呼ぶもんだから、つい。怖がらせて悪かったよ」

それから私達は一言もしゃべらず、寮へ帰った。

談話室に着くと、ハリーは既にそこにいて少し安心した。

けど、さっきの話のダメージが大きく残っているようだった。

私はとりあえず、さっき買った毛糸を編み棒に絡ませ魔法をかけて、編み物を始めた。

一応、魔法なしでも編むことはできるんだけど、魔法を使った方が早いし、仕上がりがキレイだ。

ハーマイオニーは、時々ハリーの様子を気にしながらも、動く毛糸と編み棒を興味深そうに眺めていた。

25・こみ上げる苦さ

一夜明けてクリスマス休暇初日。
朝食にハリーは来なかった。
ロンが言うには、まだ寝ているらしい。

家に帰る生徒達が出発してしまうと、寮はすっかり静かになる。
談話室は、私、ハーマイオニー、ロンの貸切状態になった。
選択教科を取りに取りまくっているハーマイオニーは3つもテーブルを使って宿題をやっていた。
横には、クルックシャンクスが寝そべっている。

私も薬草学のレポートをやることにした。

それにしても、ハーマイオニーって、いつも同じ時間に行われる3つ授業にどうやって出てるんだろう？
マグル学、占い学、数占い学。
3つともしっかりこなしているみたいだ。
最初は「式神」でも使ってるのかと思ってた。
けど、本人に聞いたら「『シキガミ』？　何それ？」と逆に尋ね返されたんだよね。

気づくと昼食の時間が近づいていた。
「いい加減、ハリーを起こすべきかな？」
ロンが蛙ペパーミントをかじりながら言った。

噂をすれば影。
ハリーが男子寮から降りてきた。
顔色は昨日よりさらに悪かった。

ハリーが言う。
「吸魂鬼が僕に近づくたび、僕が何を見たり、何を聞いたりするか知ってるかい？　母さんが泣き叫んで、ヴォルデモートに命乞いをする声が聞こえるんだ」
ヴォルデモートと聞いて、ロンが震え上がる。
私は父さんの話を思い出していた。
……1歳の時だから、はっきりとした記憶は残っていないだろう。だが恐らく、心の奥底に恐怖がこびりついている……
まさに、ハリーはその通りだったんだ。
そう考えつつ話を聞いていると、ハリーはブラックを追跡して、復讐することを考えているようだった。
そんなの無理だ！
逆に殺されるよ！
「ハリーお願い。冷静になって。自分を危険にさらさないで。ご両親はあなたがブラックを追跡することを決してお望みにはならなかったわ！」
ハーマイオニーが涙を浮かべて訴えたけど、ハリーはぶっきらぼうに返す。
「父さん、母さんが何を望んだかなんて、僕は一生知ることはないんだ。ブラックのせいで、僕は一度も父さんや母さんと話したことがないんだから」
ハリーは興奮していた。
落ち着かせようと、私は口を開く。
「だからって、復讐を考えるのは間違いだ。私の母さんも、私が1歳の時に殺された。けど、私は犯人に復讐を考えたことはない。そんなことしても、母さんは生き返らないからね」

「僕はブラックに復讐する！　もし、それで死んだとしても、あの世で父さんや母さんに会えるからね！」
マズイ、逆にあおったか？
「ダメだ。君がブラックに敵うはずないんだから！」
私は必死にハリーを説得する。
「レイなんかに、両親を一度に亡くした僕の気持ちは分からない！」
そして、ハリーは私を睨みつけ、言い放つ。
「レイはいいよ。君はお父さんが生きてるんだし！」
君はお父さんが生きてるんだし。
その言葉にカチンときた。
バシっ!!
気づけば私は、ハリーの頬に平手打ちしていた。
「ハリー。そんなに死にたいなら、ブラックにでも、吸魂鬼にでも、やられればいい！」
私は冷たく吐き捨て、荷物をまとめて寮を飛び出した。
「レイっ!!」
後ろで、ハーマイオニーが涙声で私を呼ぶ。
けど、振り返る気にはなれなかった。
寮を飛び出した私は、図書館で薬草学のレポートの続きをやることにした。
レポートを書いている間は良かったけど、書き終えると一気に後悔がやってきた。

右手を見ると、今更のようにハリーを引っ叩いた痛みをジンジンと思い出す。

帰りづらい。

とりあえず適当な本で時間をつぶそう。

「《よお、お前も居残りだったのか？》」

しばらく本棚の間をふらふらしていると、日本語で声をかけられた。

晶だった。

「《晶こそ。日本に帰らなかったんだ》」

「《ああ。姉貴は仕事で、兄貴は恋人と旅行、親父とお袋も旅行だとさ。俺、仲間外れ。しかも今年、ハッフルパフの居残りは俺だけ》」

晶は頬を膨らませた。

「《ところで伶、顔が暗いぜ？　喧嘩でもしたのか？》」

さすが幼馴染、勘が鋭い。

私は晶に、ハリーと喧嘩になったいきさつを話した。

晶は話を聞いてから、口を開く。

「《伶は間違ってない。引っ叩いたのはやり過ぎだけど、そうでもしなきゃ、ポッターの目は覚めないだろうな。けど、あいつの気持ちもわかる。もし俺の家族が殺されたら、俺だって、自分の家族を死に追いやった奴に復讐したい》」

そこまで言って、晶はふっと苦笑いする。

「《って言っても、年末年始に俺を仲間外れにする家族なんだけどな》」

そうは言うものの、晶の家族は実はみんな仲が良いんだけど。

「《ところで伶。昼飯食ってねぇだろ？》」

私は一瞬ポカンとしたけど、お腹がぐぅと鳴る。

「《ほら。お前、昼飯の時間にいなかったし！　俺、今からリーマスさんのところにお茶しに行くんだけど、一緒に来ないか？》」
時間は午後のティータイムになろうとしていた。

私達が部屋に行くと、父さんは笑顔で迎えてくれた。
「おや、晶。伶と一緒だったのかい？」
「図書館で会ったんです。それより、伶に何か食べさせたほうがいいっすよ。昼飯食いそびれたらしくって」
それを聞いた父さんは「しょうがないな」などと言いながら、紅茶とサンドイッチを出してくれた。

晶はハリーとの喧嘩ついて一切触れなかった。
その気遣いが少し嬉しかった。

ふと見ると、父さんの机には、吸魂鬼や守護霊呪文などの専門書が山積みだ。
きっとハリーの吸魂鬼対策で集めたんだろう。

ツナサンドを頬張っていると、ドアがノックされた。
現れたのは、代わり映えしない黒髪、鉤鼻、黒ローブ。
煙が立ち昇るゴブレットを持っている。

「薬だ」
「セブルス、いつもありがとう」
父さんがスネイプを部屋に入れる。

スネイプは父さんに薬を渡してから、私達をジロリと見た。
「キサラギにミスター・タチバナか。先客万来で結構なことだ」

父さんは顔をしかめながら、薬を飲み干した。
「相変わらずひどい味だ。何度飲んでも、慣れないね」

「父さん、良薬は口に苦し、だよ」
薬がマズくても、満月で暴れて人を襲ったり、自分を噛んで傷だらけになるよりは、絶対マシだ。
「へぇ。スネイプ教授が脱狼薬を作ってるんですか？」
晶が感心したように尋ねると、スネイプの右眉がピクリと動く。
「……ミスター・タチバナ。何故『脱狼薬』だとわかる？」
すると晶はさらっと答えた。
「俺の実家、病院なんです。日本にいた頃、ルーピン教授はうちの患者でした。だから、教授の持病は昔からよく知っています」
それを聞いたスネイプは、何も言わず空になったゴブレットを持って出て行った。
その後ろ姿を見て、私はつぶやく。
「そういえば、前にハリーが、脱狼薬を飲んでる父さんを見て『スネイプ先生が毒を飲ませてる』って勘違いしていたんだ」
グフッ、ゴホンゲホン！
晶が飲みかけの紅茶にむせながら笑った。
「《ポッターが誤解！　ま、脱狼薬は見た目がアレだし、スネイプ教授はあいつの天敵だし》」
「ははははは」
父さんも、お腹を抱えて大笑いしていた。
「ああ、晶も最初は勘違いしてたね」
ふと、父さんが思い出したように口を開く。
「《り、リーマスさん！その話は時効っしょ!?》」
晶が慌てている。

「ああ、小さい頃、晶が父さんの薬を『毒』だと思って、勝手に捨てちゃったことがあったっけ」
赤くなって、青くなった晶が叫ぶ。
「《伶、言うなっ！　あの時、親父に死ぬほど叱られたのを思い出したじゃねぇか！》」

そこに父さんが一言追加した。
「なるほど。だからボガートが晶の前で、涼（りょう）に変わったのか」
晶が「リーマスさん!!　余計なこと言わないで！」と焦っている。
「涼」は、晶のお父さんの名前だ。
普段は優しいけど、怒るととても怖い。
ま、普段温厚な人に限って本気で怒ると恐ろしいのは、うちの父さんも一緒だ。

ていうか、あの時、涼さんが怒ったのも仕方ない。
せっかく調合した薬を捨てられちゃ、怒って当然だ。
しかも、脱狼薬の主原料トリカブトは高価だし。

私はニヤリと笑って日本語で言う。
「《へえ、晶は涼さんが怖いんだ。覚えとこう》」
「《覚えなくていい！》」
晶はタジタジになった。

しばらく父さんの部屋で過ごした後、私は寮に戻ることにした。

さっさと謝って、ハリーと仲直りしよう。

26・ファイアボルト

寮に帰る途中、外を見ると雪がしんしんと降っていた。
その雪の中、クルックシャンクスが歩いていた。

あれ、猫って寒さに弱いんじゃないの？
日本のマグルの童謡だと「コタツで丸くなる」のに。

すると、禁じられた森の方から、痩せた大きな黒犬が走ってきた。
犬はクルックシャンクスの前で止まる。
そして2匹は並んで歩き始めた。
そういえばあの黒犬、前にホグズミードにいたし、この前のクィディッチの試合でも見た。
近くに住み着いている野良犬なんだろうか？

寮に戻った私は、さっそくハリーを見つけて謝った。
「ハリー、ごめん。叩いたりして」
「僕も酷いこと言った。ごめん」

ハリーと仲直りしていると、ハーマイオニーが女子寮から駆け下りてきた。
「ああ、レイ！　一体どこに行ってたの!?」
「ルーピン先生のところだけど……どうしたの？」
「大変！　ハグリッドが、バックビークが！」

話をまとめると、9月にヒッポグリフのバックビークがマルフォイを怪我させた事件で、マルフォイの父親が魔法省に訴え、ハグリッドに出頭命令が出たらしい。

翌日から私達は、ハグリッドとバックビークの弁護をするため、資

料集めをすることになった。
けど、なかなか使えそうな資料に当たらなかった。
父さんへのクリスマスプレゼントのセーターは無事に編み上がった。
そして、ハーマイオニー、ハリー、ロン、晶にはそれぞれ手袋を作った。

＊

クリスマスの朝。
目が覚めると、枕元にプレゼントが並んでいた。
父さんからはクィディッチ用の手袋、日本のお祖父ちゃんからは日本のチョコレートの詰め合わせ、悟叔父さんからは魔法薬の参考書が来ていた。
そして叔父さんからは、もうひとつ包みが来ていた。
風呂敷に包まれた高そうな紳士用ローブだ。

伶へ。
プレゼントは、リーマス義兄さんに必ず渡すように。
貧乏性の義兄さんのことだから、古いローブが捨てられず、継ぎ接ぎして着ているに違いない。
名門ホグワーツの教授なんだから、ボロいローブを着るのはやめろと言っておけ。
それにしても、せっかくのクリスマスなのに義兄さんは発作が出て残念だな。
お大事にと伝えておいてくれ。

如月悟

達筆な日本語のカードに思わずクスリとする。

「レイ、何か面白いことでも書いてあった？」

ハーマイオニーに尋ねられ、文章を英語に訳して伝える。

すると、ハーマイオニーもクスクス笑っていた。

「レイ、プレゼントよ。気に入ってもらえるかしら？」

ハーマイオニーが差し出したのは、レターセットだった。

「ありがとう。大事に使うね」

私は笑顔で受け取った。

「じゃあ、ハーマイオニーにも、メリークリスマス！」

ハーマイオニーに手袋を渡すと、目をキラキラさせて喜んでくれた。

「レイ、ありがとう。あなた本当に編物が上手なのね！　とっても嬉しいわ！」

そして勢い良く抱きつかれた。

うっ、やっぱり欧米人スキンシップ過剰だ！

しかも、ハーマイオニーって、意外と胸があるから、圧迫感が半端ない！

それに比べて、私の胸はぺちゃんこで……少しはその胸を分けて欲しい。

「く、苦しい！　ギブ！　ギブっ!!　ギブアップだってば!!!」

「ごめんなさい！　私ったら！」

ハーマイオニーはパッと私を解放し、床に寝そべっていたクルックシャンクスを抱き上げる。

オレンジ色の猫はゴロニャーと鳴いた。

「レイ、ハリーとロンの部屋へ行きましょう」

ハーマイオニーが、サラッととんでもないことを言う。
「え、男子寮って入っていいの？」
「大丈夫よ。女子は男子寮に入れるわ。でも男子は女子寮に入れないんだけど」

そして私達は、ハリーとロンの部屋に行った。
中に入ると、ハリーとロンは妙に浮かれていた。
「2人して、何笑ってるの？」
ハーマイオニーが尋ねると、ロンが彼女の腕に抱かれたクルックシャンクスを見つけ、慌ててスキャバーズをポケットに押し込む。
ロンは本当にクルックシャンクスが嫌いなんだな。

とりあえず私は、2人にプレゼントの手編みの手袋を渡した。
だけど、ハリーもロンも、ちょっと反応が薄い。
ええ～、頑張って作ったのに。

その時、ハリーの後ろにあるものに目が留まる。
「ファイアボルトじゃん！」
ダイアゴン横丁で見た国際試合級の超高級箒。
たった10秒で時速240kmまで加速できて、確か「価格はお問い合わせ下さい」ってなってた。

仕方ない。
ファイアボルトが相手じゃ、私の手編みの手袋なんて見劣りしまくりだ。

「ハリー！　一体誰がこれを？」
ハーマイオニーも大口を開けて箒を見ている。
「誰から？　カードは？」
私が尋ねると、ハリーは首を横に振った。
しかも贈り主には、全く心当たりがないという。

怪しい。
どうして贈り主は正体を隠してるんだ？
けど、こんな箒をポンと買えるってことは、間違いなく大金持ちだとは思うんだけど……。

ロンが推理する。
「僕はルーピンかと思ったんだ。ほら、あの人はハリーを気に入ってるみたいだし」
「でもそんな金があるなら、僕の箒より、自分のローブを買うんじゃないかと思うんだけど」
おいおい、ハリー失礼だなぁ。

確かに、正直、父さんにファイアボルトを買うお金はない。
せいぜい私の箒、空龍Ｈ４がギリギリラインだ。
けど、新しいローブを買うお金ぐらいはある！
それに娘の私には、ちゃんとクィディッチ用の手袋をくれたんだ！

ハーマイオニーは少し考えて口を開く。
「おかしくない？　これ相当いい箒なんでしょ？」

ロンはファイアボルトに乗りたいと言い出した。
けど、ハーマイオニーがピシャリと止める。
「まだよ。まだ絶対誰もその箒に乗っちゃいけないわ！」
「この箒でハリーが何すればいいって言うんだい。床でも掃くかい？」

その時、クルックシャンクスがロンに飛びかかる。
ポケットからスキャバーズが猛烈な勢いで逃げ出そうとした。
ロンはカンカンになり、クルックシャンクスを蹴とばそうとした。
ハーマイオニーはロンを睨みつけ、クルックシャンクスを連れて部

屋を出た。
「待って、待って!!」
私はあたふた後を追いかける。
これじゃ、この前の私と逆パターンだ。

「ロンってば！　クルックシャンクスを蹴とばそうとするなんて酷いわ!!」
女子寮に戻ると、ハーマイオニーに早速愚痴られた。

「それにしても、ファイアボルト贈ったのは、一体誰だろう？　うちの父さんさんじゃないってことだけは、確かだけど……」
すると、ハーマイオニーが厳しい顔になる。
「呪いがかけられてるかもしれないわ。ハリーに恨みを持つ誰かが贈った可能性もあるかも」
「まさか！　ファイアボルトはすごく高いよ？　呪いをかけるんなら、もう少し安い箒にすると思うけど。それにクィディッチ用箒は、試合中の妨害や不正を防ぐ為、超強力な呪い防止加工がしてある。簡単に呪いをかけたり、細工ができるとは思えない」

「レイ、強力な闇の魔法使いなら競技用箒に呪いをかけることはできる。私、見たことあるの」
ハーマイオニーによれば1年の時、ハリーがクィディッチの試合中に箒に呪いを掛けられ、振り落とされかかったことがあったらしい。
しかも犯人は、当時の闇の魔術に対する防衛術教授。
さらにそいつの頭の後ろには、ヴォルデモートが寄生していたというオプション付き。
それでいいのかホグワーツ!?

「じゃあ、贈り主は『ハリーの命を狙う強力な闇の魔法使い』かつ『正体を知られたくない人物』だな」
条件に当てはまる人物が1人いる。

しかも確か、超名門の純血旧家出身だから、ファイアボルトは余裕で買えるハズだ。

「「シリウス・ブラック！」」

私とハーマイオニーは同時に叫ぶ。

「もし贈り主がブラックで、箒を暴走させてハリーを殺そうとしてるなら、許せないわ！」

ハーマイオニーが怒りに体を震わせる。

「レイ。お昼ご飯の後、マクゴナガル先生に箒の件をお伝えするわよ！」

確かにそれが一番だ。

でも、もし贈り主がブラックだとして、何故箒が壊れたのを知ってるんだ？

それにいくら大金持ちだと言っても奴は逃亡者。

銀行に預金があったにしろ、どうやってお金を引き出したんだ？

もしかしたら、ブラックには協力者がいるのかもしれない。

まさか父さん……いや、そんな訳はないな。

27・クリスマス

あれからハーマイオニーとロンは、口をきかなかった。
最初こそ私とハリーは、2人をとりなそうとしたけど、ハーマイオニーもロンも一歩も譲らない。
ハリーは、2人が出す気まずい空気をファイアボルトを眺めることでごまかしていた。
私はお祖父ちゃんからもらったチョコをつまみながら、叔父さんからもらった本を読んでいた。

やっと昼食の時間になった。
大広間に入ると、晶を発見したので、プレゼントの手袋を渡す。
「《お前、編物上手いもんなぁ。サンキュー！大事に使わせてもらうぜ》」
晶は日本語で、笑顔でお礼を言った。

食事に来たのは職員と生徒を合わせて12人。
満月のせいか、父さんの姿はなかった。

ダンブルドア校長の「メリー・クリスマス！」の挨拶で、宴会が始まる。
七面鳥やローストポテト、チポラータソーセージなど、料理もクリスマスムード満点だ。

しばらく料理を楽しんでいると、急に大広間の扉が開いた。
そして、スーツとスパンコールだらけの緑のドレスを着た痩せた知らない女性が入ってきた。
腕や首には、ジャラジャラとアクセサリーをつけまくっている。
しかも、牛乳瓶の底のような分厚いレンズのメガネをかけていて、まるで巨大なトンボだ。

なんだか、胡散臭さが服を着て歩いてるって感じだな。
横で、ハーマイオニーが顔を思い切りしかめた。
ダンブルドア校長が立ち上がる。
「シビル、これはお珍しい！」
この女性こそ、ハーマイオニーの天敵、占い学教授シビル・トレローニーらしい。
ダンブルドア校長が杖を振り、スネイプとマクゴナガル先生の間に椅子を出し、トレローニー先生の席を準備した。
ところが彼女はテーブルを見渡した途端、アッと声をあげた。
「校長先生、あたくし、とても座れませんわ！　あたくしがテーブルに着けば、１３人になってしまいます！　１３人が食事を共にする時、最初に席を立つ者が最初に死ぬのですわ！」
するとマクゴナガル先生が、ピシャリと言った。
「シビル、その危険を冒しましょう。構わずお座りなさい」
トレローニー先生は、目と口をぎゅーっとつぶって椅子に座る。
席についた彼女は、再び目を開けてテーブルを見渡してから尋ねた。
「あら、ルーピン先生はどうなさいましたの？」
するとダンブルドア校長が、父さんは病気だと教えた。
ああ、彼女は父さんの「持病」を知らないのか。
ま、知ってたら、父さんがいない理由を聞いたりしないよね。
「でも、シビル、貴女はとうにそれをご存知だったはずね？」
マクゴナガル先生が皮肉たっぷりに、トレローニー先生に言う。
どうやらマクゴナガル先生にとっても、彼女は天敵らしい。

「もちろん、存じてましたわ。でも『全てを悟れる者』であることを、ひけらかしたりはしないものですわ。あたくしの見るところ、ルーピン先生はお気の毒に、もう長くありません。あの方自身も先が短いとお気づきのようです。あたくしが水晶玉で占って差し上げると申しましたら、まるで逃げるようになさいましたの」

おいおい、この人、ハリーだけじゃなく、父さんにも死の予言をしようとしたのか。

そりゃ父さんも逃げたくなるよ。

自分の死の予言をわざわざ聞きたがる人なんていないし。

さて、宴会が終わって最初に立ち上がったのは、ハリーとロンだった。

途端にトレローニー先生が、ヒステリックに「どっちが先だったか」を尋ねた。

すると、マクゴナガル先生の毒舌が炸裂した。

「どちらも大して変わりないでしょう。扉の外に斧を持った極悪人が待ち構えていて、玄関ホールに最初に足を踏み入れた者を殺すとでも言うなら別ですが」

これにはみんな大爆笑だった。

仏頂面がデフォルトのスネイプでさえ、口の端が少し上がっているように見える。

もっとも、当のトレローニー先生だけは、すごく不機嫌だった。

ハリーとロンは先に寮に戻っていった。

私とハーマイオニーは、マクゴナガル先生に箒の件を報告する。

話を聞いた先生はさっそく、ハリーの箒を検査の為に没収した。

それからというもの、私とハーマイオニーは、ハリーとロンに口をきいてもらえなくなった。
２人に恨まれるのも無理はない。
けど、ハリーが墜落死するよりは１０００倍マシだ。

それに、マクゴナガル先生だって鬼じゃない。
安全が確認ができれば、ちゃんと返すと約束してくれたんだけどさ。

夕食の前、私は父さんの部屋に向う。
一応、私と父さんが親子だって知っているハーマイオニーには、行くことを話してある。

部屋には編んだセーターと、叔父さんからのプレゼントが入った風呂敷を持って行く。
ノックしてから、前にもらっていた合鍵で部屋の扉を開ける。

奥の寝室に入ると、床の上で鼻面にうっすら白い筋状の毛が生えた大きな狼が１匹寝そべっていた。
狼の前には、難しそうな本が広げられている。
狼は私に気がつくと顔を上げた。
そして、尻尾を振ってから体を起こし、器用に前脚で広げてあった本を閉じる。
表紙には［守護霊呪文のメカニズム］と書かれていた。

この狼こそ、父さんのもうひとつの姿だ。
スネイプの薬は、バッチリ効いている。
読書できるぐらいなので、具合は悪くないらしい。

「父さん、メリークリスマス。プレゼントだよ」

狼は風呂敷をじっと見つめた。
私がベッドに腰掛けると、狼はひらりとベッドの上に飛び乗り、隣に座った。

風呂敷きの中身をベッドの上に広げる。
「私からはセーター。叔父さんからはローブだよ。セーターはね、雪の結晶模様にしてみたんだ。模様の仕上げにちょっと苦労したけど、上手くできてると思うんだ」
狼は嬉しそうに、鼻をふんふんと鳴らした。
気に入ってもらえたようで、何よりだ。

「あと叔父さんから伝言。『ボロいローブを着るのはやめろ。それから、お大事に』だってさ」
すると狼は、くぅーんと鳴いて、くるりと丸くなってしまった。
あ、スネた！

機嫌を取ろうと、私は狼に手を延ばして背中を撫でてみた。
フサフサの毛並みが気持ちいい。
すると、狼も気持ち良さそうに目を細める。

私は狼を撫でながら、昼食の席にトレローニー先生が出てきたことを話す。
「あの人、父さんにも死の予言をしたって本当？　先生の見たところ、父さんは重い病気で、残りあとわずかの命なんだってさ」
すると、狼はクックッ喉を鳴らして笑う。
「ところで、聞いて欲しいことがあるんだ」
すると狼は顔を上げ、耳をピンと立てた。

私はハリーに贈り主不明のファイアボルトがプレゼントされたことを話した。

「まさか、ファイアボルトを贈ったのは、父さんだったりする？」
すると狼は速攻でブンブン首を横に振った。
やっぱり違うんだな。

「箒には、カードもメモも付いてなかった。あまりに怪しいから、マクゴナガル先生に頼んで検査してもらうことにした。ハリーやロンには怒られちゃったけど、万が一の事があったら取り返しがつかないからね」
そうだ、そうだとでも言うように狼はうなずく。

「ちなみにファイアボルトの贈り主だけど、私とハーマイオニー、あとマクゴナガル先生は『シリウス・ブラック』じゃないかと推理してる」
ブラックと聞いて、狼はギュッと目をつぶった。
父さんにもいろいろ思うところがあるのだろう。

「とにかく、明日から箒は分解されて、マクゴナガル先生やフーチ先生達が検査をするらしい。たぶん、父さんも検査を手伝うように言われると思うから、ヨロシク」
そう言ってから、私は時計を見た。
そろそろ大広間に行かないと、夕食を食べ損ねる。

「じゃあ、また」
私は狼に別れを告げ、部屋を出た。

28・年越し

クリスマスの翌日から、私は年賀状書きに取り掛かった。
来年の干支は戌（犬）だ。

犬といえば、散歩をしていたら、例の黒い大きな野良犬を見つけたよ。
せっかくだから、年賀状に書く絵のモデルになってもらった。
実は私、ディーン程じゃないけど、絵はそこそこ得意だ。
クッキーをあげたら、スケッチしている間、黒犬はずっと大人しくしていてくれた。
この犬、ひょっとしたら、元々は育ちがいいのかもしれない。

書き上げた年賀状は、ヒキャクに頼んで、日本にいるお祖父ちゃんや、青龍学院時代の友達、先生などに配達してもらった。

ファイヤボルトの件で、私、ハーマイオニー　ＶＳ　ハリー、ロンの冷戦はまだ続いていた。
特にハーマイオニーとロンは、スキャバーズとクルックシャンクスのこともあって、すれ違うたびに火花を散らせていた。

そして迎えた大晦日。
夕食の後、ハーマイオニーと一緒に寮に戻ろうとしたら、晶に呼び止められた。
「《お～い、伶！》」

晶は私に大きな紙袋を渡して言う。
「《これ、持っていけ》」
中身を見てみると、日本のマグルの有名メーカーの即席カップ蕎麦が４つ。

箸（はし）もちゃんと４つ入っている。
竹でできた割り箸だ。

そっか、大晦日といえば年越し蕎麦だよね。
日本にいた時には、必ずお祖父ちゃんの家で、父さんや悟叔父さんと一緒に食べていたな。

「《サンキュー！　まさか、ホグワーツで年越し蕎麦が食べられるなんて思わなかったよ》」
「《どういたしまして。あ、リーマスさんには、さっき渡しといたからな》」

「《おお、さすがは橘晶くん。気が利くではないか！》」
私がおどけて言う。
「《当たり前だ。リーマスさんには世話になってんだから》」

ハーマイオニーは、不思議そうに私と晶のやりとりを見ている。

「ミスター・タチバナ。あなたが今、レイに渡したのは何？」
ハーマイオニーが晶に尋ねる。

晶は笑って英語で言った。
「インスタントのカップ蕎麦だ。あ、ミス・グレンジャー。ちゃんと、君やポッター、それにウィーズリーの分もあるぜ」

ハーマイオニーは、ハリーとロンの名前を聞いて、やや気まずそうな顔をした。
２人とは、まだ仲直りできてないからなぁ。

晶と別れ、私とハーマイオニーは寮に戻る。
すると、ハリーとロンは談話室でチェスをしているところだった。

私は紙袋を掲げ、２人に声を掛けた。
「これ、晶にもらったんだけど、一緒に食べない？　蕎麦だよ。『年越し蕎麦』」
ハリーとロンがチェス盤から顔を上げて、私を見た。
「『トシコシソバ』？　何だい、それ？」
ハリーが尋ねる。
「日本では大晦日に蕎麦を食べるんだ。大晦日に細くて長い蕎麦を食べると、健康で長生きできるって言われてる」
私がそう言うと、ハリーとロンは顔を見合わせてから、近くまでやってきた。
私は袋からカップを取り出してテーブルに並べる。
４つのカップのフタを剥がし、中の小袋を破って粉末スープを麺にかける。
そして、お湯を注ぐため、懐から杖を取り出そうとしたんだけど……あれ？
「杖、部屋に置いてきたみたいだ……」
「レイ、私がお湯を入れるわよ？」
ハーマイオニーが言った。
「大丈夫。杖がなくても、お湯は出せるし」
「レイ、本当なの？　そんなことできるの？」
「え、マジかよ？」
「どうやってやるの？」
ハリー、ロン、ハーマイオニーが驚いている。

ていうか、みんな、杖なしにお湯を出すなんて、信じられないって思ってるな？

「まあ見ててよ」

私は深呼吸して目を閉じ、祝詞（のりと）を唱え始めた。

「《掛まくも畏き　伊邪那岐大神　筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に　禊祓へ給ひし時に成り座せる祓戸の大神等　諸々の禍事　罪穢有らむをば　祓へ給ひ　清め給へと白す事を　聞食せと　恐み恐みも白す》（かけまくもかしこき　いざなぎのおおかみ　つくしのひむかのたちばなのをとのあわぎはらに　みそぎはらへたまひしときになりませる　はらへどのおおかみたち　もろもろのまがごと　つみ　けがれをあらんをば　はらへたまひ　きよめたまへともうすことを　きこしめせと　かしこみかしこみももうす）」

目を開け、右手を上に上げて手に気を集める。

ここからが勝負だ。

息を吐きながらゆっくり手を下ろし、４つのカップに同時に熱湯を満たしていく。

そして、カップの内側の線でピタリとお湯を止めた。

パチパチと3人から拍手が起きた。

「レイ、カッコいい！」

「東洋の魔術って、こんな感じなのね。興味深いわ」

ハリーとハーマイオニーが口々に感想を述べる。

「レイ。あんな長い呪文、よく覚えられるな。唱えるの面倒くさくないかい？」

ロンが尋ねる。

「あはは、確かに面倒だよ。あの長い呪文『祝詞』っていうんだけど、実は上級者なら省略できるんだ。私には無理だけどね」

さて、お湯を注いで3分経てばできあがりだ。

フタを取ると、湯気と一緒にふんわりと醤油ベースのダシ、ネギの香りが広がる。

「《いただきまーす！》」

私はパチンと割り箸を割って、ズズッと蕎麦をすすった。

うん、おいしい!!

日本人で良かった……って、私はハーフだけどね。

「温かいスープに入ったソバは初めて食べたわ。だけど、とってもおいしいわ」

ハーマイオニーは、箸で器用に麺をつかみ、静かに口に運ぶ。

まあ、イギリスじゃ音をたてるのはNGだからなぁ。

そういえば父さんも、蕎麦やラーメン、うどんを食べる時、音をたてないんだよね。

日本のお祖父ちゃんに「《リーマス君、ズズッとすすらんかい！　年越し蕎麦がマズそうに見えるやろ》」なんて毎年ツッコまれてたよ。

そんなことを思い出しながら蕎麦をすすってたら、ハリーとロンが、私とハーマイオニーをじっと見ていた。

彼らの蕎麦は減っていない。

「あれ、食べないの？　蕎麦がのびちゃうよ？」

すると、ハリーとロンが口をそろえて言った。

「何で2人とも上手く食べられるんだよ!?」

ハリーが続ける。
「……いや、レイは日本出身だからわかるんだけど、何でハーマイオニーも『チョップスティック』が上手く使えるの？」
ん、チョップスティック？
ああ、ｃｈｏｐｓｔｉｃｋか。
英語で「箸」のことをこう呼ぶんだっけ。
ハーマイオニーはにっこり笑って答える。
「両親が中華料理が好きで、私、小さい頃から中華料理店によく連れて行ってもらってたの。だから『ハシ』が使えるのよ」
確かに、中華料理でも箸を使うよね。
「この『チョップスティック』だっけ？　使うのめちゃくちゃ難しいよ！　タチバナの奴、フォークも入れといて欲しかったぜ！」
ロンが箸に悪戦苦闘しながら愚痴る。
「ロン。晶は日本人なんだから、蕎麦を食べる時にフォークを使うなんて思いつかないよ」
私は笑って蕎麦をすする。
それを聞いたハーマイオニーは「仕方ないわね」と笑いつつ、魔法でロンとハリーの割り箸をフォークに変えてあげた。
そしてロンとハリーは、やっと蕎麦を食べることができた。
４人ともお腹いっぱいになったところで、ちょうど日付が変わり、新しい年がやってきた。

２９・箒とチョコレート

年が明け、冬休みも終わりに近づくと、帰省していた生徒達が戻ってきた。

キャプテンのオリバーは、ハリーにファイアボルトが贈られたと知って大興奮だった。

でも、マクゴナガル先生が検査の為に箒を預かっていると知ると、「返してもらうよう説得する！」と言い出した。

だけど、オリバーの説得はあっさり失敗し、箒は戻らなかった。

新学期が始まった。

父さんは、木曜日からいよいよハリーの吸魂鬼対策訓練を始めるそうだ。

訓練では、大量のチョコレートが必要になるらしい。

父さんから「ホグズミード休暇の時は、チョコレート」を大量に買ってきて欲しいと頼まれた。

そして、最初の訓練が行われた夜。

ハリーはぐったり疲れきって、寮に戻ってきた。

「守護霊を作り出すには、何か幸せなことを考えなきゃいけないんだ。けど、強力な思い出じゃないと、守護霊は上手くできないんだ」

ハリーはそう語った。

訓練は本物の吸魂鬼ではなく、まね妖怪を使って行われたようだ。

どうやら、まね妖怪はハリーの前で吸魂鬼になるようで、それを父さんを上手く利用したらしい。

さすがに本物の吸魂鬼は危な過ぎるもんね。

でも、いくら正体がまね妖怪とはいえ、ハリーは吸魂鬼を目の前にして、平気でいられなかったようだ。
彼は吸魂鬼の前で、ご両親の最期の声を聞いた……いや、正確には思い出したんだ。
「父さんの声が聞こえた。父さんは母さんを逃がそうと、1人でヴォルデモートに立ち向かっていった……そう話したら、ルーピン先生はひどく心を痛めていたように見えたんだ」
父さんが、心を痛めたのは間違いないと思う。
きっと父さんなら、そんな話を聞いて、平気でいられないもんな。

＊

1月も半ばを過ぎると、優勝を絶対に逃したくないオリバーは、練習を週5回に増やした。
もちろん、補欠の私だって例外じゃない。
授業とほぼ毎日の練習で、私はクタクタだった。

だけど、正選手で、しかも吸魂鬼対策があるハリーは、もっとキツそうに見えた。
守護霊の呪文は本当に難しいらしく、なかなか上手くいかないことにハリーは焦っているようだった。

だけど、父さんは「ハリーはなかなか筋が良いらしい。このままの調子でいけば、きっと守護霊を出せるようになる」と言っていたので、大丈夫だと思うけどね。

けど、ハリーの更に上を行く忙しさだったのが、選択教科を取りに取りまくっているハーマイオニーだ。
いつも大量の教科書でパンパンの鞄を持ち歩いていたし、毎晩日付

けが変わる時間を過ぎても、ずっと起きて机に向かっていた。
食事中でさえ本にかじり付いて、何かの公式をブツブツ唱えて暗記していたり、あるいは羊皮紙に書き込みをしていたり。

それに、ヒッポグリフの裁判の準備も平行してやっていて、しょっちゅうハグリッドの小屋にアドバイスに行っていたらしい。

ハーマイオニーに「少しは休んだら？」と言ったら、「心配しなくていいのよ」って返ってきた。

冗談抜きに過労死が心配だ。

2月に入り、レイブンクロー戦が近づいてきた。
ファイアボルトの検査はまだ終わっていないようだ。

ハリーは何度も何度も、マクゴナガル先生にいつ箒が帰ってくるのかを尋ねて彼女をうんざりさせていた。

私も何度か父さんに検査の状況を聞いたけど「ごめん。まだかかるみたいだよ」と、いつも苦笑いで返された。

そんな中、ホグズミード休暇のたびに、私はハニーデュークスで、片っ端からチョコを買い漁っていた。
一応、ハリーの訓練の為に、父さんから頼まれて買ってるんだけど、何せチョコが数百種類もあるので、チョコレート大好きな私は選ぶのがとても楽しかった。

「レイ、いつもそんなにチョコレートをたくさん買って、全部ひとりで食べるのか？」
なんてロンにツッコまれたけどね。

チョコレートと言えば、バレンタイン。
父さんにはハニーデュークスの高級トリュフチョコ詰め合わせをあげた。
ハリー、ロン、晶には蛙チョコにしといたけどね。

ただし、ここイギリスだと、日本のようにバレンタインにチョコレートを贈り合う習慣はなくて、カードを贈ったりするんだよね。

ハリー達に去年のバレンタインがどうだったか聞いてみたら「大変だったよ。ロックハートがいろいろやらかして……」と遠い目をされた。
ロックハートというのは、父さんの前任の「闇の魔術に対する防衛術」の先生らしい。
なんでも、大広間にハートを降らせ、小人にカードを配達させて大騒動だったんだとか。

青龍学院の去年のバレンタインは楽しかったよ。
学院長の思いつきで、全校生徒・全職員が総出で、チョコレートやお菓子を使って「姫路城」を作ったんだ。
学院で事務や雑用をやっている式神や妖（あやかし）にも手伝ってもらって、高さ５ｍもある立派なものができた。

ちなみに、去年、青龍学院で一番たくさんチョコレートをもらったのは、うちの父さんだった。
その数、なんと１４５個！
独身（一応、子持ちだけど）の英国紳士な父さんは、モテモテだった。

＊

バレンタインが終わって数日後のことだった。

私は談話室で宿題の山と格闘していた。
今やっているのは、マグル学の「マグルはなぜ電気を必要とするか説明せよ」という作文だ。
マグル学のバーベッジ先生はいい先生だけど、困ったことに長いレポートを書かせるのが大好きなんだ。
「……マグルは冷暖房や明かり、料理、掃除、洗濯など、さまざまなことに電気で動く機械を使っている。また「電話」などの通信手段にも電気を使った機械が使われている。だから、電気がなくなると、現代のマグルの生活はできなくなり……」
隣では、ハーマイオニーが古代ルーン語の文章とにらめっこしている。
テーブルには、既にハーマイオニーが書き上げたマグル学の作文、数占いのレポート、参考書やらが広がっていた。
しばらく宿題をやっていると、寮の入口が急に騒がしくなってきた。
ハリーがファイアボルトを持って帰ってきたのだ。
長い長い検査が終わり、安全が確認できたらしい。
よーし、レイブンクロー戦に間に合ったぞ！
「言っただろう？　ハーマイオニー、レイ。なーんにも変なとこはなかったんだ！」
何故かロンが大威張りしていた。
「あら、あった『かも』しれないじゃない」
「私もそう思うよ。それに結局、贈り主が誰だかは謎のままなんでしょ？　まあ、少なくとも、箒が安全だってことだけは、わかったようだけど」

ハーマイオニーと私は言い返す。

「僕、箒を寝室に持っていくよ」

ハリーがそう言うと、ロンが「僕が持っていく！」と言い、ファイアボルトを大事そうに持って、男子寮に上がっていった。

うっ、アぁーーーーっ!!!

その直後、叫び声が聞こえた。

私、ハーマイオニー、ハリーはいっせいに男子寮に続く階段を見た。

するとベッドのシーツを引きずったロンが、すさまじい勢いドタドタと、談話室に駆け下りてきた。

「スキャバーズが！　見ろ！　スキャバーズが！」

ロンがハーマイオニーの目の前でシーツを振り回して叫んだ。

白いシーツには、点々と赤黒いシミがついていた。

「血だ！　スキャバーズがいなくなった！　それで、床に何があったかわかるか？」

ロンが何かをハーマイオニーの宿題の上にバラまいた。

長いオレンジ色の毛だった。

オレンジ色の毛、シーツに血、スキャバーズがいない。

まさか！

とうとう、クルックシャンクスが、スキャバーズを食べてしまったんだろうか!?

状況が悪過ぎた。

ロンは、スキャバーズがクルックシャンクスに食べられたと確信して、ハーマイオニーを責めていた。

今度こそ、2人の仲は修復不可能に思えた。

＊

スキャバーズを失って、ロンはしょげていた。

私やハリー、そしてフレッドやジョージ、ジニーがロンを慰めていたけど、効果なしだ。

そこでハリーは、とっておきの手段に出た。

クィディッチの練習にロンを呼んだのだ。

練習後に、ロンにファイアボルトを乗せてあげるつもりらしい。

「ハリー、私もファイアボルトに乗っていいかな？」

私も調子に乗って尋ねてみた。

「もちろんだよ。レイはずっと僕に箒を貸してくれたんだから。今までありがとう」

ハリーは快くＯＫを出してくれた。

ファイヤボルトに乗ったハリーは、最高に調子が良かった。

これなら、レイブンクロー戦も勝利間違いなしだな。

練習後、ロンと私は交代でファイアボルトに乗せてもらった。

ファイアボルトの加速力は抜群だった！

それに、ターンでもスピードが全然落ちない。

けど、あまりに思い通りに飛ぶので、ちょっとした操作ミスが命取りになりそうだ。

私には、やっぱり慣れ親しんだ空龍が一番だなって思った。

３０・レイブンクロー戦

レイブンクロー戦の日、空は青く晴れ渡っていた。

今回、補欠の私に出番はないようなので、観客として応援にまわることになった。

前回のように吸魂鬼が入り込んできた時の為に備え、ハリーにはチョコレートを渡しておいたけどね。

グリフィンドールの応援席に着くと、父さんが手を振っていた。

「やあ、伶に、ロン。ハリーがどんな活躍をするのか楽しみだね。ところで、ハーマイオニーは？」

「ジニーと一緒です」

私はスタンドの上の方を指差す。

ハーマイオニーはジニーと話していた。

ロンとハーマイオニーは、相変わらずギクシャクしていて、一緒に試合を観に行きたがらなかったんだ。

「ルーピン先生。あの、体は大丈夫ですか？」

ロンが父さんに尋ねる。

「心配いらないよ。絶好調だ」

父さんが笑顔で答え、私とロンは父さんと並んで座った。

試合の解説は、名物リー・ジョーダンだ。

「今回の試合の目玉は、何と言ってもグリフィンドールのハリー・ポッター乗るところのファイアボルトでしょう。『賢い箒の選び方』によれば……」

「ジョーダン、試合の方がどうなっているか解説してくれませんか？」
リーが箒の話ばかりしていたので、マクゴナガル先生に怒られている。

現在、クアッフルを手にしているのはケイティだ。
それとすれ違うように、ハリーとレイブンクローのシーカー、チョウ・チャンが飛んでいた。
チャンは小柄な４年生で、黒髪の美少女だ。
名前の感じからすると、中国系か韓国系の人らしい。

そうこうしていると、ケイティが先制点を決め、グリフィンドール席がワーッと歓声をあげた。

すると、レイブンクローのゴール付近を飛んでいたハリーが、一気に地面に向けて急降下を始めた。
スニッチを見つけたらしい。
ほとんど落下に近い勢いで、ハリーは地面を目指す。

さすが速いな、ファイアボルト!!

けど、そのハリーをピッタリとマークしてくるチョウ・チャンの腕も大したものだ。

でも、あと少しでスニッチに手が届きそうなところで、ハリーは敵のブラッジャーに邪魔された。
ハリーはスレスレで、ブラッジャーの直撃を避ける。

「うわ、危なっ！」
私は思わず声を上げた。
「惜しい。あと少しだったな」
「なんだよ、あのレイブンクローのビーター！」

父さんとロンも、仲良く悔しがっていた。

「それにしても、ハリーの飛行センスは天才的だね。さすがジェームズの息子だ」

父さんが空を見て言った。

「先生は、ハリーのパパを知ってるんですか？」

ロンが尋ねると、父さんは懐かしそうに答える。

「私とジェームズは同級生だった。寮の部屋も一緒で、親しくしていたんだ。ジェームズもクィディッチが上手かったよ。あの頃のグリフィンドールチームは無敵だった。伶の母親の梓も選手でね、ビーターをしていたんだ。素晴らしい選手だった」

「じゃあ先生は、レイのパパも知ってるんですね？」

え、ロン、何を尋ねちゃってるの？

「レイが言ってました。自分のパパとハリーのパパは仲良しだったって。先生はハリーのパパの友達でしょ？　だったら、レイのパパも知ってますよね？　どんな人なんですか？」

父さんが気まずそうに私を見た。

下手に口を開くと墓穴を掘りそうなので、私は黙っておこうっと。

さて、父さんはどう返すのかな？

「確かに。私は伶の父親をよく知っている……」

よく知っているどころか、本人です。

「伶の父親は監督生だった。ハリーのお父さん達は、大変なイタズ

ラっ子でね、それを止めるために監督生に選ばれたんだけど、全然止められなくてね……」

父さんが監督生だったのは本当だ。

ちなみに、女子の監督生はハリーのお母さんだったらしい。

そんな話をしているうちに、レイブンクローのチェイサーが3回得点を決めてきた。

その間、ハリーはもう1度スニッチを見つけたようだったけど取り損ねた。

「ハリー、紳士面してる場合じゃないぞ！　相手を箒から叩き落とせ！やるときゃやるんだ！」

キャプテンのオリバーの雄叫びが観客席まで響いてきた。

それを聞いたハリーは、ついに本気になった。

ハリーは、レイブンクローの陣地の上空でスニッチを見つけると、一気に高度を上げた。

少し遅れ、チョウ・チャンもハリーを追いかけ上昇する。

するとチョウ・チャンが急に上昇をやめて、下を指差した。

チョウ・チャンが指差した方向には、黒いローブの吸魂鬼が3体いた。

うわ、前の試合で、ダンブルドア校長があれだけ激怒したにも関わらず、またしても校内に入り込んで来たのか？

だけど、不思議なことに、吸魂鬼が現れたというのに、寒気もしないし、鳥肌も立たなかった。

一方、ハリーは懐から杖を取り出し、迷わず叫ぶ。

「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ！」

３体の吸魂鬼は、ハリーの杖先から出た白銀の物体に吹っ飛ばされ、地面に崩れ落ちる。

黒いローブの裾から、靴を履いた足が見えた。

え、足？

ピーッとホイッスルが鳴る。

ハリーがスニッチを捕まえたようだ。

観客席からは、大きな大きな歓声が上がった。

私、ロン、父さんは再びハイタッチをする。

ロンは一目散にハリーのもとへ駆けていった。

残された私は、ゆっくりグラウンドへ降りて行きながら、日本語で父さんに尋ねた。

「《父さん、あの吸魂鬼、ちょっと変じゃない？　吸魂鬼に足なんて無いよね？》」

日本語で父さんも返す。

「《うん、吸魂鬼に足は無いね。おや、あれは？》」

父さんは倒れた吸魂鬼を指差した。

あっ、そういうことだったんだ！

あの吸魂鬼は真っ赤な偽物。

道理で、寒気もしないし、鳥肌も立たなかったわけだね。

グラウンドに着くと、既にハリーはたくさんの人に囲まれていた。

ロンが「いえーい！」とハリーの手を持ってバンザイしている。
パーシーやシェーマス、ハグリッドもいた。

「ハリー、おめでとう。素晴らしい試合だったよ」
私もハリーの肩をポンポン叩いた。

「立派な守護霊だったよ」
父さんがハリーにそう言うと、ハリーは得意げに答えた。
「吸魂鬼の影響は全くありませんでした！　僕、平気でした！」

やや決まり悪そうに、父さんが言った。
「それはたぶん、実はあいつらは……吸魂鬼じゃなかった」

「ハリー、こっちに来て」
私はクスクスと笑いながら、ハリーの手を引き、偽・吸魂鬼がよく見えるところへ連れて行った。

「君はマルフォイ君を随分怖がらせたようだよ」
父さんの目線の先には、モゴモゴと動く黒いローブの塊。

ローブの中には、マルフォイ、クラッブ、ゴイル、そしてスリザリンキャプテンのマーカス・フリントが入っていた。
つまり、この４人が吸魂鬼の格好をして、ハリーを驚かそうとしたんだ。
で、みっともなく返り討ちにあったってわけだ。

マルフォイ達の側には、鬼の形相のミネルバ・マクゴナガル女史が立っていた。
彼女の雷が偽・吸魂鬼一味に落ちたのは言うまでもなく、スリザリンは５０点減点された。

レイブンクロー戦の祝勝会は最高に盛り上がり、お開きになった時には、とっくに日付が変わっていた。

31・ブラック再び

ところがその後、事件が起きた。
真夜中にハリー達の部屋に、シリウス・ブラックが侵入したのだ。
グリフィンドール寮は、大騒ぎになった。
ブラックは、ハリーと間違えてロンのベッドを襲ったのだという。
しかも、ロンのベッドのカーテンをナイフで切り裂いたらしい。
ロンが叫び声を上げたので、ブラックは手が出せず、慌てて逃げたそうだ。
部屋のみんなが無事で、本当に良かったよ。
それにしても、ブラックはどうやって入ったのだろう？
そう思っていたら、なんと門番のカドガン卿が通してしまったらしい。
彼は、シリウス・ブラックが1週間分の合言葉が書かれているメモを読み上げて、寮に入ったと証言した。
カドガン卿の役立たず！
いくら合言葉を知っていたからって、イギリス全土で指名手配中の脱獄犯を通すなんて！
門番の意味が無い！
もちろん、カドガン卿は速攻でクビになった。
そして、太った婦人がグリフィンドール寮の門番に復帰した。

で、1週間分の合言葉を紙にメモしてたのは、ネビルだった。
ネビルには、マクゴナガル先生から特大のカミナリが落ちた。
彼には、ホグズミード行き禁止という罰が与えられた。

そして、ブラック侵入の2日後。
朝食の席で、ネビルの前に梟が真っ赤な封筒を落としていった。
梟は【大奥様がお怒りだ〜っ!!】と叫びながら、もの凄い勢いで飛び去った。

ネビルは赤い封筒をつかみ、猛ダッシュで大広間を出て行く。
間もなく、玄関ホールから、どえらい剣幕で怒鳴る老婆の声が聞こえてきた。
「……なんたる恥さらし!!　一族の恥!!!!!」

【あらら、『吼えメール』を受け取ったのね】
ちょうどハリーへ手紙を持ってきていたヘドウィグが、ネビルに同情した。

「うわあ、吼えメールだ。それにしても、あれが噂のネビルのお祖母さんか。なんというか……強烈だね」
【『吼えメール』はできれば、私達梟もあまり運びたくないのよね】
ヘドウィグは遠い目をした。

「ところで、手紙を持って来たんじゃないの?」
私に言われて、ヘドウィグはハッとしたように、ハリーの手首を甘噛みした。

手紙はハグリッドからで、いよいよヒッポグリフの裁判の日程が決まったという話だった。

そしてまたホグズミード休暇がやって来た。

今回、ハーマイオニーは大量の宿題を片付ける為、学校に残ることにした。
私はハリーの訓練に使うチョコの買い出しがあるので、1人で出掛けることになった。

出発前、ハーマイオニーが私に耳打ちしてきた。
「気をつけて。ロンがハリーを連れ出そうとしているみたいなの。きっと『透明マント』と、あの『忍びの地図』を使うつもりよ」

彼女によれば、ハリーはジェームズさんの形見の「透明マント」を持っているらしい。
マントについては、うちの父さんの昔話に度々出てくるので、私も知っていた。

学校を出た私はハニーデュークスに直行した。
途中、大通りでマルフォイ、クラッブ、ゴイルの3人組を見かけた。

ハニーデュークスに着き、いつものように大きな紙袋2つ分のチョコを買って出ると、店先にロンが1人で立っていた。

「あれ、ロンどうしたの？」

ロンは、まるで待ちぼうけを食らっているみたいに退屈そうに見えた。
私は半信半疑で尋ねた。
「ロン、君1人？」

「僕以外に誰か見えるっていうのかい？」
ロンが口を尖らせる。

「レイこそ。ハーマイオニーは一緒じゃないのか？」

「ハーマイオニーは、宿題で忙しいから残るんだって」
私がそう言うと、ロンは「ふーん」と何だかうわの空のような返事をした。

一応、辺りを見回したけど、怪しい感じはしなかったので、そのまま私は学校に戻った。

そして、いつものようにチョコを父さんの部屋に届けに行く。
その途中、禁じられた森のあたりに、クルックシャンクスとあの黒い大きな犬が一緒にいるのが見えた。
あの2匹、何だかいつも一緒な気がするなぁ。

部屋に着いた私は、父さんにチョコレートを渡してから、一緒にお茶を飲むことにした。

「ところで父さん、さっきハーマイオニーの猫と大きな黒い犬が一緒にいたのを見たんだ。あの2匹、前も一緒にいたのを見たんだよね……」

父さんの顔が凍りついた。
「伶、今『黒い大きな犬』って言ったかい？」

私がうなずくと、父さんは一気に顔をしかめた。
「まさか、やはり……。伶、聞いて欲しい。あの犬は、」
しかし、父さんの言葉は、最後まで続かなかった。

「ルーピン！　話がある！」
突然暖炉の火が強くなり、スネイプの怒鳴り声が聞こえてきたのだ。

父さんは疑わしげに、私の顔を見た。

人狼レポートの撤回騒動を思い出したらしい。

「え、今回は私、何もしてないよ？」

本当に身に覚えはないんだってば！

「伶に心当たりが無くても、何となく君も一緒に来た方が良いような気がする。これは僕の『勘』だけどね」

そう言って、父さんは私を暖炉に引っ張り込んだ。

32・ムーニー、プロングズ、パッドフット、ワームテイル

私達が暖炉から出てくると、そこには仁王立ちしたスネイプと、縮こまって椅子に座るハリーがいた。
ハリーは助けを求めるように、私と父さんを見た。

どうやら、ここはスネイプの部屋らしい。

父さんは穏やかに言う。
「セブルス、呼んだかい？」
「いかにも」

スネイプは私を見つけた。
「ルーピン、こやつも一緒なのかね？　なら好都合」

何だよ、好都合って!?
本当に今回、私は何もしてないんだってば！

「キサラギ　。今日はホグズミードに行ったかね？」
スネイプが薄笑いを浮かべて私に尋ねた。

「ええ。ハニーデュークにチョコレートを買いに行きましたが？」
どうして、そんなことを聞くんだ？

「ポッターを見かけなかったかね？」
「いいえ、見てません。ミスター・マルフォイ達は見まかけましたし、ロンにも会いましたが……というか、ハリーには許可証がないから、ホグズミードに行けないはずですよ？」

私がそう言うと、スネイプが猫撫で声を出した。

「さよう。キサラギの言うとおり。ポッターはホグズミードに行くことを許されていない。頭はおろか、体のどの部分もだ！」

スネイプが勝ち誇ったような顔になる。

「なのに今日、ミスター・マルフォイが、ホグズミードで、ポッターの『生首』を目撃したという。何とも奇妙な話ではないと思わぬかね？」

「え、ハリーの生首？」

私は思わず尋ね返した。

まさかハリーは、透明マントを使って、こっそりホグズミードに行ったのか？

そして、何かの拍子に、うっかりマントが脱げかかって、その瞬間をマルフォイに見られたってこと？

「我輩はその話を聞き、すぐさまポッターを尋問した。そして出てきたのがこれだ」

スネイプは机の上の羊皮紙を指差した。

それを見て、私は危うく噴き出しそうになって、必死で笑いをかみ殺す。

［私、ミスター・ムーニーからスネイプ教授にご挨拶申し上げる。他人事に対する異常なお節介はお控え下さるよう、切にお願い致す次第］

［私、ミスター・プロングズもミスター・ムーニーに同意し、更に申し上げる。スネイプ教授はろくでもない、嫌な奴だ］

［私、ミスター・パッドフットは、かくも愚かしき者が教授になれたことに、驚きの意を記すものである］

［私、ミスター・ワームテイルがスネイプ教授にお別れを申し上げ、その薄汚いドロドロ頭を洗うようご忠告申し上げる］

ムーニー、プロングズ、パッドフット、ワームテイル。

この羊皮紙って、ひょっとして「忍びの地図」なの!?

「さて、この羊皮紙には、まさに『闇の魔術』が詰め込まれている。ルーピン、君の専門分野だと拝察するが。ポッターが、どこでこれを入手したと思うかね？」

スネイプが意地悪い目で、父さんを見る。

どうする父さん!?

父さんは、ちらりとハリーを見てから答えた。

「『闇の魔術』が詰まっている？　本当にそう思うのかい？　単に無理に読もうとする者を侮辱する羊皮紙にしか見えないけど。子供騙しだが、決して危険じゃないだろう？　ハリーは悪戯専門店で手に入れたと思うよ」

ははーん。

父さんは、羊皮紙を悪戯専門店の商品ってことにして、この場を切り抜ける作戦だね。

しかし、そうは問屋が卸さないセブルス・スネイプ。

「そうかね？　むしろ、直に製作者から入手した可能性が高いとは思わんのか？」

スネイプは絶対に父さんを疑っている。

彼は父さんと同級生だから、「ムーニー」が父さんの学生時代のあだ名だと知っててても、不思議じゃない。

「ハリー、この中に知っている人はいるかい？」
父さんが羊皮紙の名前を指して尋ねる。
すると、ハリーは「いいえ」と即答した。

「キサラギ。お前はこの羊皮紙について、何か知っているか？」
スネイプが、今度は私に尋ねた。

ハリーの目が「助けて！」と言っている。
この話の流れなら「羊皮紙はホグズミードのお土産だった」としておくのが自然かな。

「それはゾンゴの商品ですね。ハリーは、ロンにお土産でもらったんですよ」

そこへグッドタイミングで、ロンがハァハァいいながら、駆け込んできた。
「それ、僕が、ハリーに、ゲホッ、あげたんです。ゾンゴで、ずいぶん前に、それを買い、ゲホッ、ました！」
ロンが咳きこみながら言った。

おおっ、ロンも上手く話を合わせてくれたぞ!!

ポンと父さんが手を叩いた。
「ほら！　伶とロンの証言が一致した。セブルス、これは私が引き取ろう。いいね？」

父さんは地図をローブのポケットにしまうと、私達3人を連れて、スネイプの部屋を出た。

玄関ホールまで来ると、父さんはハリーに言った。
「次はかばってあげられないよ」
ハリーが固まった。
「君のご両親は、君を生かすために自らの命を捧げた。それに報いるのに、これではあまりにお粗末だ。たかが魔法のおもちゃ一袋の為に、自分の身を危険にさらすなんて」
ハリーは唇をぐっと噛み締めていた。
さすがに、今の忠告はハリーの胸に刺さったらしい。
「ハリー、ロン。私は伶と少し話がある。先に寮に戻っていなさい」
ハリーとロンが行ってしまうと、父さんは声をひそめて日本語で私に尋ねてきた。
「《伶。君は知っていたね？　ハリーが地図を持っていること》」
私は重たくうなずいてから言った。
「《地図は元々、フレッドとジョージが、フィルチさんの没収箱から手に入れたらしくて、それを彼らはハリーにあげたんだ。ハリーが最初に地図を使って学校を抜け出したのは、クリスマスの少し前だった。その時、私はすぐに父さんに報告すべきだった。そして、学校を抜け出そうとするハリーを、もっと本気になって止めるべきだったんだ……》」
ふぅ、と父さんはため息をつく。
「《別に、僕は伶を責めているわけじゃないよ？》」
そうは言われても、私は後悔していた。
マルフォイ達に見つかったり、スネイプに叱られるぐらいなら笑い

話で済む。
けど、もし、ハリーがブラックに見つかっていたらと思うと、ぞっとした。
「《周りがいくら言っても、結局はハリーが自分の身を守ろうと思うかどうかだからね。もっとも、地図の作者の1人である僕に、そんなことを言う資格はないかもしれないけど》」
父さんは苦笑いを浮かべた。
「ああ、レイ！　ハグリッドが！　バックビークが！」
寮に戻ると、ハーマイオニーが泣きながら飛びついてきた。
そういえば、バックビークの裁判は今日だったんだ。
ハリーが私にぐしゃぐしゃの羊皮紙を渡す。
そこには、涙でにじんだハグリッドの字で、裁判の結果が書かれていた。
それを読んだ私は思わず叫んでいた。
「《『処刑』って！　有り得ない！　悪いのはハグリッドの注意を聞かずに、バックビークを怒らせたマルフォイの方だっつーの!!》」
「レイ。君、今、日本語でしゃべってた？」
ロンに言われて我に返った。
「あ、ゴメンゴメン……」
ついさっきまで父さんと日本語で話をしていたから、頭が英語モードに切り替わってなかったらしい。
それはともかく、まだ控訴が残っているとはいえ、バックビークの運命は決まったも同然だった。

＊

こうして2月が過ぎ去り、私は１４歳になった。

けど、今年は私の誕生日は来なかった。

何故なら、私の誕生日が４年に1度しかない2月２９日だからなのだ。

そういえばロンの誕生日は、私と1日違いの3月1日らしい。

33・ハーマイオニーの失敗

次に魔法生物飼育学の授業で会った時、ハグリッドはすっかりしょげていて、授業もボロボロだった。

ハグリッドは「ビーキーに残された時間を思いっきり幸せなもんにしてやるんだ」と言いながら、巨大なハンカチで顔を覆って泣いていた。

授業の後、マルフォイはハグリッドを馬鹿にして、ヘラヘラとこう言った。

「見ろよ、あの泣き虫！　あんな情けないものを見たことがあるか？　しかも、あいつが僕達の先生だって！」

ハリーとロンはマルフォイにつかみかかろうとした。

私は冷たい目でマルフォイを二らんで、ボソッとつぶやく。

「マルフォイ、どの口がそれを言うのかな？　ハグリッドが、ああなったのは、全部君のせいだ」

「黙れ、キサラギ。そもそもあんな野蛮なヒッポグリフを授業で扱うこと自体が、」

パンっ！

マルフォイの台詞をさえぎったのは、ハーマイオニーの鋭い平手打ちだった。

引っ叩かれたマルフォイは、バランスを崩してよろける。

私、ハリー、ロンは固まった。
後ろで、マルフォイの手下のクラッブとゴイルも固まっている。

ハーマイオニーが、再びマルフォイを引っ叩いた。

ロンが慌ててハーマイオニーを止めようとした。
けど、ハーマイオニーはロンの制止を振り払って、今度は杖を取り出し、マルフォイに突きつける。

うわ、さすがにコレはヤバイ！

私は杖を取り出し、呪文を唱える。
「Ｅｘｐｅｌｌｉａｒｍｕｓ！」

ハーマイオニーの杖が宙を舞い、私の手に収まった。

顔を真っ赤にさせてハーマイオニーは叫ぶ。
「レイ！　杖を返して!!」
「ハーマイオニー、もう充分だ」
私はハーマイオニーの肩に手を置いた。

見ると、マルフォイ達はワナワナ震えながら、地下牢の方へ去っていくところだった。

気付けば、次の呪文学まで時間がない。
私達４人は必死で教室へ続く階段を駆け上がった。

教室のドアを開けると、授業はもう始まっていた。
「３人とも、遅刻だよ！」
フリットウィック先生が、教卓に積み上げた本の上から叱る。

あれ……今、先生は「3人」って、言わなかった？

ロンが振り返る。

「ハーマイオニーはどこに行ったんだろう？」

私とハリーも辺りを見回したけど、姿は見えなかった。

この日の授業は「元気の出る呪文」だった。

元気の出る呪文といえば、授業初日にフレッドとジョージが父さんにかけようとして、返り討ちにあっていたのを思い出すな。

それにしても、ハーマイオニーはどうしたんだ？

まあ、いくらなんでも昼食には出てくるかな？

ところが授業が終わり、昼食の時間になってもハーマイオニーは現れなかった。

心配になった私達は、とりあえず寮に戻ってみた。

談話室にハーマイオニーはいた。

数占い学の教科書を枕にして居眠りをしている。

ハリーがそっと突ついて起こすと、ハーマイオニーは目をパチクリさせた。

「今度は何の授業だっけ？」

私はマグル学、ハリーとロンは占い学だと答える。

すると、ハーマイオニーはいきなり「呪文学に行くのを忘れた」と言って慌てだした。

けど、妙だな。

私達は呪文学の教室のすぐ側まで一緒にいたのに、どうして呪文学に行くのを「忘れる」んだ？

ロンもそのことが気になったらしく、ハーマイオニーに尋ねていた。

「ちょっとミスしたの。それだけよ！　私、今からフリットウィック先生のところへ行って、謝ってこなくちゃ……じゃあ、ハリーとロンは占い学、レイはマグル学で会いましょう！」

そう言ってハーマイオニーは、バタバタと談話室を出て行った。

その後、ちゃんとハーマイオニーは、マグル学に出てきた。

ただし、相変わらず落ち込んだ様子だった。

いつもならガンガン手を上げて点を稼ぐのに、今日の授業では一言も発言しなかったんだ。

そんなハーマイオニーを見て、晶やアーニー・マクミラン、そしてバーベッジ先生までもが、首をかしげていた。

「後で欠席した呪文学の内容を教えてあげるから、元気出して」

マグル学の授業が終わって寮に帰りながら私がそう言ったら、やっとハーマイオニーの顔が少し明るくなった。

だけど、角を曲がって寮の入口に着くと、ハーマイオニーは消えていた。

「あれれ？　ハーマイオニー？」

キョロキョロとあたりを見回す。

すると、何故か私が歩いてきたのと反対の方角からハーマイオニーが現れた。

え、今のどうなってんだ？

「レイ、私はここよ！　私、占い学を辞めたわ！」
ハーマイオニーは、妙にスッキリした顔で言う。

「え、占い学、辞めた？　大丈夫なの？」
私が声を上げると、ハーマイオニーはとびっきりの笑顔で「ええ」とだけ答えた。

もしかすると、ハーマイオニーは、占い学のシビル・トレローニー教授と揉めて、辞めたのかもしれない。
ハリーやロンによれば、ハーマイオニーとトレローニー教授は犬猿の仲だっていうし。

放課後、私とハーマイオニーは部屋で「元気の出る呪文」を練習した。
まずは私がお手本を見せる。
ハーマイオニーと向かい合った私は、杖を真上に向け、大きく時計回りに3回、円を描くように動かす。
自分の中にあるエネルギーを、杖先に集めていくイメージだ。

そして呪文を唱え、呪文を掛ける相手の頭へふわりと乗せてあげるように杖を降ろす。
この時、杖を勢いよく振り降ろしちゃうと、呪文が効き過ぎて笑いが止まらなくなるんだよね。

「ハーマイオニー、気分はどう？」

「なんだか、体がじんわり温かくなった気がするわ！レイ、私もやってみていい？」

やっとハーマイオニーに、いつもの調子が戻った。

早く呪文を覚えたくてたまらないという顔だ。

よっしゃ大成功だ！

さすが学年首席。

ハーマイオニーはたった2回の練習で、元気の出る呪文を完璧にマスターしてしまった。

私なんて4回目、ハリーは7回、ロンは8回目で、やっとできるようになったのに！

３４・学年末に向かって

３月が過ぎ、４月のイースター休暇が終わると、グリフィンドール対スリザリンの試合が迫ってきた。

オリバーの気合の入り方は半端じゃなく、全員毎日ヘトヘトになるまで練習した。

当然、補欠の私も例外じゃなくて、レギュラーの３人と全く同じように、パス回しやシュート練習を徹底的にさせられたよ。

おかげで、授業が眠くて眠くて辛かった。

特に魔法史は、いつも授業開始３分で睡魔にやられていたんだ。

もっともクィディッチの練習がない時だって、私はビンズ先生の授業で最初から最後まで起きていられたことがないんだけど。

そして迎えたスリザリン戦当日。

この日も、よく晴れた最高のクィディッチ日和だった。

「レイ、今日はいい天気だ。しかし、相手はスリザリン。チェイサーに負傷者が出た時のために待機しろ」

オリバーに言われ、私はユニフォームを着てベンチ入りすることになった。

結論から言えば、幸いどうにか私は出ずに済んだ。

けど、今まで見たことがないぐらい酷い試合だった。

とにかく、あり得ないぐらいのファウルの嵐だったんだ。

先制点を入れたのは、アンジェリーナだった。

その直後、スリザリンのフリントは、アンジェリーナの箒に体当たりしてきた。

ブチ切れたフレッドが、フリントの頭にビーターの棍棒を振り下ろした。

ハリーも、スニッチを取ろうとしたら、マルフォイが箒にしがみついてきたせいで取れなかった。

その後もスリザリンはファウルだらけだった。

私は、とにかく、ハリーが早くスニッチを取って試合を終わらせて欲しいと祈り続けていた。

試合が長引けば、ケガ人が増えるばかりだし。

長い長い試合の末、ハリーがマルフォイを出し抜いてスニッチを取った。

どうにかグリフィンドールは勝ったんだ。

そして、グリフィンドールの優勝が決まった。

熱血キャプテンのオリバーは嬉し涙でぐしゃぐしゃになった。

いつもは冷静な寮監のマクゴナガル先生までもが、喜びで大泣きして、グリフィンドールの寮旗で涙をぬぐっていた。

グリフィンドールのクィディッチ優勝は、グリフィンドールみんなの悲願だったんだ。

＊

6月になり、学年末試験が迫ってきた。

けど試験の後は、夏休みが待っている。

今年はイギリスでクィディッチのワールドカップが開かれるから、絶対に見に行きたいんだよね。

ちなみに夏休みの間、私と父さんは、ロンドンの悟叔父さんの家で過ごすことになっている。

そんな中、バックビークの控訴裁判が試験最終日に決まった。
しかし、魔法省から死刑執行人がやってくるらしい。
つまり「控訴なんて形だけ」と言っているのも同然だった。

そして、いよいよ試験に突入した。
試験では、カンニング防止魔法のかかった専用の羽ペンが配られた。
編入当初、羽ペンが上手く使えずに苦労していた私。
だけど、この1年、バーベッジ先生を始めとする先生達の長いレポート書きで鍛えられたので、もう完璧に使いこなせるようになった。

変身術の課題は、ティーポットを陸亀に変えることだった。
これはかなり上手くいった。
私のポットは完璧に亀に変わった。
でも、周りをみるとみんな四苦八苦していたみたいだ。

呪文学は「元気の出る呪文」が出た。
これもハーマイオニーと練習したからバッチリだ。
ハリーは杖を勢いよく振り下ろし過ぎて、相方のロンの笑いが止まらなくなったみたいだけどね。

魔法生物飼育学、魔法薬学、天文学、薬草学も問題なくこなせた。

特に得意の魔法薬学は絶好調で、いつも以上に完璧な調合ができて、私はご機嫌だった。
スネイプは、私の薬を見てガッカリしていた。
きっと、文句をつけようがなかったから、悔しかったんだろう。

ふっふっふ、いい気味だ。

唯一の問題は、魔法史。

私は日本にいた時でさえ、魔法史は苦手だった。

しかも、ホグワーツで習うのはイギリス中心の魔法史だから、日本の学校じゃ習わないような出来事や人物もいっぱい出てくる。

おまけに普段、ビンズ先生の催眠術にやられ、寝てばかりで全く授業を聞いてない。

それでも試験前、私はハーマイオニーのノートを見せてもらい、どうにか暗記しようとした。

けど、まさか「中世の魔女狩り」が出るなんて！

どうにか答案は書いたけど、全然自信がない。

どうしよう。

魔法史を落として留年する羽目なんかになったら。

35・不安

試験最終日の午前中は、闇の魔術に対する防衛術だった。
試験は外で行なわれた。

父さんが課題を説明する。
「これから、障害物レースをやってもらう。障害物のかわし方と全体のタイムで採点するからね」

みんなが不安そうにしていたら、父さんは笑った。
「大丈夫。授業をちゃんと受けていれば、できるよ」

それから私達は、順番を決めるクジを引かされた。
運悪く、私はなんと1番目になってしまった。

私は父さんの方をちらっと見た。
すると父さんはニコッと笑って、口パクで「が・ん・ば・れ」と言った。

もしかして、父さん楽しんでる？
まさか私がトップバッターになるように、クジに細工したんじゃないだろうな？
いや、父さんのことだから、それは無い……よね？

まあいいや、もうなるようになれ！

「用意、スタート！」
父さんがストップウォッチ片手に合図した。

私は杖を構えてコースに出た。

まず、水魔グリンデローのいるプールを渡る。
プールの3分の1あたりまで来ると、さっそくグリンデローの長い指にグイッと足をつかまれた。

「Ｒｅｌａｓｈｉｏ！」
私は冷静に杖を向け、足をつかんでいるグリンデローの指を攻撃した。

グリンデローの指があっさり折れ、足が自由になる。
私は一気にスピードを上げ、プールを渡り切った。

次の赤帽鬼が潜む穴だらけのエリアは、姿勢を低くし、鬼が振り回す棍棒を避けて走り抜けた。
おいでおいで妖精も、何とか道に迷わされずに通過。

そして、最後に巨大なトランクの前にたどり着く。
トランクには「中に入って敵を倒すこと」と書かれてあった。

私は恐る恐るフタを開ける。

「ひぃぃ!!」
私は反射的にフタを閉めた。
何でマムシの大群が入ってんだよっ!!?

待て、落ち着こう。
落ち着け、落ち着くんだ、如月伶。
父さんは「授業をちゃんと受けていればできる」って言った。
今までの授業を思い出そう。

授業で蛇がでてきたのは……あ！

これ、まね妖怪か？

私は、思い切って再びフタを開けてトランクの中に入った。
そして、マムシの大群に杖を向けて叫ぶ。
「Ｒｉｄｄｉｋｕｌｕｓ！」

パチン！　と音がして、マムシはロープに変わる。
そして、クネクネと「ｓｎａｋｅ（ヘビ）」という単語をつづった。
よっしゃ、成功だ!!

私がトランクから出たら、父さんがにっこり笑ってくれた。
「伶、満点だ。タイムは１３分２４秒」

早々と試験が終わった私は、みんなが四苦八苦する様子をのんびり眺めることができた。

一番上手くやったのは、ハリーだ。
彼は障害を全部完璧にクリアし、しかも１１分５８秒というダントツの好タイムを叩き出した。
おかげで私は２位になってしまい、ちょっと悔しかったよ。

ロンはおいでおいで妖精に引っかかり、泥沼にハマってしまった。

ハーマイオニーは、ほぼ完璧だった。
しかし、最後のトランクで泣きながら出てきた。
彼女のまね妖怪は、なんと「貴女は全教科落第です！」と宣言するマクゴナガル先生に変わってしまったらしい。

試験後、ロンはそのことでハーマイオニーをからかいまくったのは言うまでもない。

闇の魔術に対する防衛術の試験を終えた私達は、昼食をとるため校舎へ向かう。

その途中、正面玄関でイギリス魔法大臣のコーネリウス・ファッジに出くわした。

「やあ、ハリー！　試験を受けてきたのかね？」

ハリーが「はい」と答える。

すると、今度はファッジは私を見つけた。

「おや、君は日本のキサラギ大臣のお孫さんじゃないか。去年、日本の魔法学校から、ホグワーツに編入したんだったね……名前は『レイ』だったかね？」

「はい。お久しぶりです、大臣」

私はお辞儀した。

ファッジには、日本のお祖父ちゃんの家で会ったことがある。

で、ファッジは何故ここにいるのかというと、バックビークの処刑に立ち会う為だという。

後ろには、巨大な斧を持った死刑執行人がいた。

ああ、本当に控訴裁判なんて、形だけなんだ。

昼ご飯を食べて、私達は最後の試験に向かった。

私とハーマイオニーはマグル学、ハリーとロンは占い学だ。

マグル学の試験問題は「マグルが夏を涼しく過ごす工夫について述べよ」だった。

「……夏を涼しく過ごすため、日本のマグルは昔から「打ち水」をする。夏の暑い日に地面に水をまいて、気化熱を利用し、温度を下げる

のだ。打ち水は、早朝または夕方にすると効果的で……」

早々と答案を書き上げた私は、バックビークの裁判が気になって仕方なかった。

「ハイ、試験終了。Ａｃｃｉｏ！」

バーベッジ先生が、呼び寄せ呪文で解答用紙を集めた。

その瞬間、私とハーマイオニーは荷物をまとめて教室を飛び出し、ハグリッドの小屋へ走った。

ところが、その途中、ハリーの梟のヘドウィグが手紙を持って飛んできた。

【レイ、ハーマイオニー。ハグリッドからよ。本当はハリーに直接渡したかったんだけど、まだ試験中のようだから……】

手紙にはハグリッドの震える字で、裁判に負けたこと、日没にバックビークが処刑されることが書かれてあった。

私の肩に止まったヘドウィグは、羽をパタパタさせて気の毒そうな様子だ。

【手紙を預かった時、ハグリッドは完全に放心状態だったわ。私、見ていられなかったの】

ヘドウィグの言葉を訳して伝えると、ハーマイオニーも気の毒そうな顔になった。

そして、私とハーマイオニーは一言も話さずグリフィンドール寮に戻った。

間もなくロンが戻ってきて、しばらくしてハリーも戻ってきた。

裁判の結果を知ってロンは死んだ目になり、ハリーは「ハグリッドの所へ行こう」と言い出した。

夕食後、私、ハリー、ハーマイオニー、ロンはみんなに見つからないように寮を抜けた。

そして誰もいない小部屋に入り、ハリーの透明マントをかぶって姿を隠した。

話には聞いていたけど、私が実際に透明マントをかぶるのは初めてだった。

透明マントは水みたいな不思議な感触の銀色の布で、とても軽かった。

36・ヒッポグリフ、鼠と猫と犬

森番の小屋に着くと、魂が抜けたようなハグリッドがいた。
ヘドウィグが言ったとおりだった。
バックビークは、かぼちゃ畑につながれているらしい。
「ハグリッド、誰でもいい。何でもいいから、できることはないの？ダンブルドアは……」
ハリーが尋ねた。
だけど、ダンブルドア校長の力でも、判決をひっくり返すことはできなかった。
その代わり、校長はバックビークの処刑に立ち会ってくれるのだという。
「ハグリッド、元気出して。これあげるから」
私はポケットに入っていたチョコレートを取り出し、テーブルの上に広げた。
「みんなで食べましょう。私、お茶をいれるわ」
ハーマイオニーはお茶の支度を始めた。
「ハグリッド、私達もあなたと一緒にいるわ」
お茶をいれながらハーマイオニーがすすり泣き、私も静かにうなずく。
けど、ハグリッドは、私達に寮に戻れと言った。
その時だった。

「ロン！　し、信じられないわ、スキャバーズよ！」
ハーマイオニーが叫ぶ。
そこには確かに、前脚の指が1本欠けたロンの鼠、スキャバーズがいた。
クルックシャンクスに食べられたんじゃなかったんだ!!
ロンがスキャバーズを捕まえた。
スキャバーズは、前よりいっそう痩せこけ、ボロボロになっていた。
しかも、私と目が合うと、ロンの手の中でいきなり激しくジタバタもがきだした。
「大人しくしろ！」
ロンはスキャバーズをポケットにねじ込もうと四苦八苦する。
その時、ハグリッドが急に立ち上がった。
「連中が来おった」
窓の外に、ファッジや魔法省の人、ダンブルドア校長が小屋の方へ来るのが見えた。
ハグリッドに急かされ、チョコレートとティーセットを片付けた私達は、しぶしぶ透明マントをかぶって、小屋を離れた。
その間もスキャバーズは、ずっとロンのポケットで暴れていた。
私達は小屋の方を気にしつつ、校舎を目指した。
しばらくの間、小屋の方からは男達の話す声が聞こえていたけど、ふと急に静かになった。

そして。

シュッ、ドサッ!!

それは、死刑執行人が重い斧を振り下ろす音に違いなかった。

「……あの人達、やってしまったんだわ！」

ハーマイオニーが声をつまらせ、私もハリーもロンもその場に立ちすくんだ。

夕焼けが空を血のような不気味な紅に染めていた。

ハリーはハグリッドが心配になったみたいで、引き返そうとした。

だけど、ロンに止められた。

私達がハグリッドに会いに行ったことが分かれば、彼の立場が悪くなるからだ。

やがて、日はすっかり暮れ、暗くなってきた。

「スキャバーズ、じっとしてろ」

ロンのポケットで、スキャバーズはいまだに暴れ続けていた。

そこへ不気味に光る2つの黄色い目が忍び寄った。

クルックシャンクスだった。

道理で、スキャバーズが逃げたがるわけだった。

ハーマイオニーがクルックシャンクスを追い払おうとした。

けど、クルックシャンクスは近づいてくる。

そしてスキャバーズは、とうとうロンの手をすり抜けて駆け出した。

クルックシャンクスがそれを追いかけ、ロンが更にその後を追う。

格闘の末、ロンはどうにかスキャバーズを捕まえることに成功した。

けど、そこへいきなり巨大な黒い犬がロンを目掛けて飛びかかってきた。

あのホグズミードの野良犬だ。

私、ハーマイオニー、ハリーは、3人がかりでロンに食らいつく犬を引き剥がしにかかる。

けど、無理だった。

犬はロンの腕をくわえて引きずっていく。

するといきなり頭上から、ビュン！　と音がして、何かが飛んで来た。

私は、とっさに地面に伏せた。

って、ここ、暴れ柳の真下じゃないか!!

暴れ柳の枝がバシッと、思いっきり私の左腕にヒットした。

うぅ、痛い、痛すぎる……。

私は痛む腕をかばいつつ、よろよろ立ち上がる。

骨は折れてなさそうだけど、腕に力が入らない。

そうこうしているうちに、黒犬は柳の根元の穴にロンを引きずり込んでいった。

それを追うように、クルックシャンクスがするりと柳の下の穴に入り込む。

「助けを呼ばなくちゃ！」

ハーマイオニーが叫んだ。

「ダメだ。あいつはロンを食ってしまうほど大きいんだ。そんな時間はない」
ハリーが止めた。
待てよ、暴れ柳といえば……私の記憶が確かなら……。
「これでどうだ!!」
私はムチのように飛びかかってくる枝をかいくぐって、根元にあるコブを杖で突いた。
柳はピタリと動きを止めた。
「レイ？　今、あなた何をしたの？」
「どうして、暴れ柳の止め方がわかったんだい？」
ハーマイオニーとハリーは不思議そうに私を見た。
「説明は後。とにかくロンを助けなきゃ！」
私はそう言って、暴れ柳の根元の穴に入り込んだ。
ハリーとハーマイオニーも後に続いた。

37・叫びの屋敷

暴れ柳の下には長い長いトンネルが続いていた。
私、ハリー、ハーマイオニーの3人の杖明かりで照らしても、先は見えない。

ハリーとハーマイオニーはとにかく、このトンネルがどこに続くのか知っている私でさえ先行き不安だ。
ロンは大丈夫なんだろうか？

やがてトンネルは登り坂になり、ついには荒れ果てたホコリっぽいガランとした部屋に出た。
剥がれかけの壁紙、汚れた床……叫びの屋敷だ。

天井の上で何かが動く音がした。
ってことは、ロンと犬は2階だろうか？

足音を立てないように、私達は慎重に階段を登る。

「「Ｎｏｘ！」」
3人同時に杖明かりを消すと、ハリーが先頭に立ち、ドアを開けた。

部屋の奥で、クルックシャンクスとロンが床に座っていた。

「「ロン、大丈夫⁉」」
私達が駆け寄ると、ロンの脚はありえない角度に曲がっている。

「Ｆｅｒｕｌａ！　Ｅｐｉｓｋｅｙ！」
私は、転がっていた棒を添え木にして折れた脚に包帯で巻いて固定

し、治癒呪文をかけた。

それでもロンの顔は苦しそうだったので、ロンの折れた脚に右手をかざして唱える。

「おん　ころころ　せんだり　まとうぎ　そわか」

少しだけロンの表情が和らいだ。

「痛みはどう？」

「ちょっと楽になった。けど、レイ。今のは？」

「薬師如来の真言。病気やケガの痛みを和らげて、回復を早める効果があるんだ」

「ところで、ロン。犬はどこだい？」

ハリーが尋ねる。

「犬じゃない。ハリー、あいつが犬なんだ……あいつは『動物もどき（アニメーガス）』なんだ」

ロンは、私達の後ろを見て言った。

すると、バタンと後ろでドアが閉まる音がした。

振り返ると、痩せこけた長身の男が立っていた。

腰まである黒く長い髪は、毛先がぐちゃぐちゃにもつれ、からまっている。

骸骨のような顔の中で、目だけは不気味にギラギラしていた。

指名手配中の脱獄囚、シリウス・ブラックだ！

「Ｅｘｐｅｌｌｉａｒｍｕｓ！」

ブラックが素早く、私、ハリー、ハーマイオニーの杖を奪った。

ブラックがハリーにジリジリと近づいていく。

このままハリーは殺されてしまうのだろうか？

ブラックが口を開いた。
「ハリー、君なら友を助けに来ると思った」
その言葉を聞き、頭に血が上ったハリーが、ブラックに飛びかかろうとした。
私達は慌ててハリーの肩を右手でつかんで引き戻す。
「無茶だ、ハリー！」
「ハリー、ダメよ！」
私とハーマイオニーの声は震えていた。
ロンが立ち上がろうとしながら、ブラックへ叫んだ。
「ハリーを殺すなら、僕達も殺すことになるぞ！」
けど、ロンは脚が痛むせいでフラついていた。
「座っていろ。せっかく処置してもらったのに、脚の怪我が余計酷くなるぞ」
何故か、ブラックの口からロンを気づかう言葉が出た。
「ロン、君は動かない方がいい」
私はロンを座らせた。
「今夜はただ1人を殺す」
歯を見せ、ブラックが不気味に笑う。
そうか、奴の狙いはハリーの命だけなんだ。
でも、今ここで下手に挑発すれば、ブラックはすぐさま私達４人全員をまとめて殺すだろう。
生き残るには、事を荒立てず、できるだけ時間を稼ぎ、助けを呼ぶ

機会をうかがった方がいい。

私がそう考えていた矢先、ハリーがブラックに食ってかかる。

「何故だ？　前はそんなことを気にしなかったはずだ？　ペティグリューを殺る為、たくさんのマグルを無残に殺したんだろう？　どうしたんだ。アズカバンで骨抜きになったのか？」

おいおいハリー、刺激してどうするんだよ!?
ヤバいって!!!!!

ハーマイオニーがハリーに「黙って」と言ったけど、ハリーは止まらない。

「こいつが僕の父さんと母さんを殺したんだ！」

私はブラックに飛びかかろうとするハリーを押さえようとした。
けど、ハリーは私を振り払う。

ハリーの手が、さっき暴れ柳にやられた左腕にモロに当たり、私は痛みでその場にうずくまった。

私の代わりにハーマイオニーが止めようとしたけど、それも振り切り、ハリーはブラックに飛びかかった。

ハリーは、杖を挙げかけたブラックの手首をつかみ、反対の手でブラックを力一杯殴りつけた。
２人は折り重なるように倒れ、ブラックが片手でハリーの首をつかんできた。

マズイ！
このままじゃ、ハリーが絞め殺される!!

私は気合で立ち上がると、助走をつけてブラックに飛びかかる。
ところが、そこへクルックシャンクスが参戦してきて、鋭い爪で私の頬を思いっきり引っ掻いた。
ハーマイオニーが、私からクルックシャンクスを引き剥がしてブラックに蹴りを入れる。
しかしそれを物ともせず、ブラックは再びハリーに襲いかかる。
ええい、こうなったら最後の手段。
杖がないなら、陰陽術の呪（しゅ）を唱えるしかない。
戦闘系の陰陽術は得意じゃないんだけど、やらなきゃこっちが殺られる。
相手は１３人を一瞬で吹き飛ばした凶悪犯だ。
迷っている場合じゃない!!
私は指を組んで印を結び、ブラックへ呪を放つ。
「急急如律令　縛！（きゅうきゅうじょりつれい　ばく）」
ブラックの動きがピタリと止まった。
私は全力でブラックをハリーから引き剥がし、遠ざけた。
その隙（すき）にロンがみんなの杖を回収し、それぞれの持ち主へ返す。
しかし、私の縛り術は３０秒とたたずに解けてしまった。
ブラックは再び動き出す。
うわ、やっぱり呪は気休めにしかならなかったか。
まあ、青龍学院時代に少し習っただけだから、あまり上手く使えな

いんだけど。

ハリーは杖をブラックの胸に真っ直ぐ向けた。
「ハリー、私を殺すのか？」
「お前は僕の両親を殺した」
「否定はしない。しかし、君が『全て』を知ったら……」

「シリウス・ブラック、今更何を寝ぼけたことを言うんだ？」
私は半分開き直ってヤケクソでつぶやいた。
どうせ殺されるんだったら、言いたいことを言おう。

ブラックが鋭い目線で私を見た。
「君はレイだな？　アズサに生き写しだ」

「気安く母さんの名前を呼ぶな」
私はブラックをにらみつける。

「あなたはハリーのご両親の居場所をヴォルデモートに密告した。ハリーのご両親も、うちの父さんも、あなたを『親友』だと思っていた。その信頼をあなたは踏みにじった。それが『全て』だ!!」
私は早口でまくし立て、ブラックに杖を向けた。

その時、コツコツと下から靴音が聞こえてきた。
「ここよ！」
ハーマイオニーが鋭く叫んだ。
「シリウス・ブラックよ！　早く！」

ドタドタと階段を駆け上がる音が聞こえたかと思うと、部屋のドアが開いた。

入ってきたのは、真っ青な顔で杖を構えた男性。

私が嫌というほど良く知っている人物。

「父さん！　何でここに!?」

「「父さん!?」」

ハリーとロンが、私と父さんの顔を交互に見比べた。

しまった、口が滑った!!!

38　明かされる秘密

「レイはリーマスの娘だ。知らなかったのか？」
ブラックが意外そうな顔をする。

「ハリー、ロン。今まで黙っててゴメン。ハーマイオニーは知ってた……いや正確には気づかれたって言うべきなんだけど」
とりあえずハリーとロンには謝っておく。

そんな私達のやりとりをよそに、父さんは私の傷だらけの顔や、ロンの包帯が巻かれた脚、ハーマイオニーの切れた唇を見ていた。
そしてブラックの胸に杖を向けるハリーを見とめるなり、父さんは呪文を唱える。
「Ｅｘｐｅｌｌｉａｒｍｕｓ！」

ハリー、私、ハーマイオニー、ロンの順に、杖が手から離れ、父さんの手に収まった。
どうして父さんは私達の杖を取り上げたの？

父さんが尋ねる。
「シリウス、あいつはどこだ？」
ブラックはロンを指した。
「『あいつ』がそうだったのか……君はあいつと入れ替わりになったのか……何も言わずに？」
父さんの言葉を聞いたブラックは、重たくうなずく。
ていうか「あいつ」って、誰？

父さんは杖を下ろした。
そして、あろうことかブラックをしっかりときつく抱きしめた。

何やってんだよ、父さん!?

私は自分の目が変になったかと思った。

だけど「何てことなの！」というハーマイオニーの叫びで、目の錯覚じゃないことがわかった。

「先生は、先生は……その人とグルなんだわ！」

「説明させてくれ！」

父さんはそう言って、ハーマイオニーを落ち着かせようとしたけど、無駄だった。

ハーマイオニーはヒステリックに叫ぶ。

「私、誰にも言わなかった！　レイに頼まれたから、先生の為に、私、隠してたのに！」

背中がゾクっとした。

ハーマイオニーは、父さんの「持病」をバラす気だ。

「騙されないで。この人はブラックが城に入る手引きをしてたのよ。この人もハリーの死を願ってるんだわ……この人、狼人間なのよ！」

ついに、ハーマイオニーは言ってしまった。

父さんはどうするんだろう？

しかし、父さんは冷静にハーマイオニーに答えた。

「君らしくないね、ハーマイオニー。残念ながら、3問中1問しか合ってない。私はシリウスが城に入る手引きはしていないし、当然ハリーの死を願ってなんかいない……だが、私が人狼であることは否定しない」

それから父さんは説明すると言って、私達に杖を返した。

「手助けしていなかったなら、ブラックがここにいるって、何故わかったんだ？」

ハリーがブラックを睨みつけながら、父さんに尋ねる。

すると父さんは「忍びの地図」を使ったと答えた。

父さんは、私達がバックビークの処刑の前、寮を抜け出してハグリッドに会いに行くと考え、地図を使って見張っていたという。

ついでに父さんは、自分が製作者の１人であることも告白した。

そして、透明マントの存在を知っていること、透明マントを使っても、忍びの地図には名前が表示されることも告げた。

父さんは室内を行ったり来たりしながら話を続ける。

「君達が校庭を横切り、ハグリッドの小屋に入るのを見ていた。２０分後、君達はハグリッドのもとを離れ、戻り始めた。しかし、今度は君達の他に誰かが一緒だった」

え、他の誰か？……私は口をはさんだ。

「いや、父さん。私達の他には誰もいなかったよ？」

「うん、僕達だけだった！」

ハリーも首を傾げる。

けど、父さんは地図で、ブラックがロンと、もう１人を暴れ柳の根元に引きずり込むのを確かに見たらしい。

ふと父さんは、ロンに鼠を見せるように頼む。

スキャバーズはキーキーと鳴きながら、いまだに逃げようとしているようだった。

「僕の鼠が一体何の関係があるって言うんだ？」

ロンが疑り深く父さんとブラックを見る。

「それは鼠じゃない。動物もどきだ。名はピーター・ペティグリュー」

今まで黙っていたブラックが急に口を開き、とんでもないことを言ってのける。

「有り得ない」

「2人ともどうかしてる」

「馬鹿馬鹿しい！」

私、ロン、ハーマイオニーがそれぞれ口にした。

「ピーター・ペティグリューは死んだ！　こいつが12年前に殺した！」

ハリーがブラックを鋭く指差す。

「殺そうと思った。だが、小賢しいピーターめに出し抜かれた。今度はそうはさせない！」

ブラックが、ロンが捕まえている鼠に飛びかかろうとした。

「シリウス、待ってくれ！　説明しなければいけない」

「後で説明すればいい！」

父さんがブラックをロンから引き剥がしたけど、ブラックは父さんを振り払おうと抵抗した。

父さんは静かにブラックを諭す。

「ロンはあいつをペットにしていた。私にもまだわかっていない部分がある。それにハリーだ。シリウス、君はハリーに真実を話す義務がある」

するとブラックは父さんへ投げやりに返す。

「君がみんなに何とでも話してくれ。ただ、急げリーマス。私は自分

を監獄に送った原因の殺人を、今こそ実行したい」
ブラックの目は、しっかり鼠をとらえていた。

父さんは説明を始めた。
誰もがシリウス・ブラックがピーター・ペティグリューを殺したと思った。
今日、忍びの地図を見るまでは、父さんでさえそう信じていたらしい。

しかし忍びの地図は嘘をつかない。
父さんは「ロンの鼠の正体はピーター・ペティグリューだ」と考えているようだ。

ハーマイオニーが震える声で、そんなはずはないと言う。
何故なら、ペティグリューの名前は、アニメーガス登録簿に載っていないからだ。
「うん、確かに彼の名前はないね。２０世紀の登録アニメーガスは全世界で7人。私は前の学校で、全員の名前を暗記させられた。でも、そこに『ピーター・ペティグリュー』はいなかった……」
7人の中に、マクゴナガル先生は入っているけどね。
「でも、名前がないからって、彼がアニメーガスじゃないって証拠にはならないよ？」

父さんが言った。
「伶の言うとおり。魔法省は未登録アニメーガスが3匹、ホグワーツを徘徊していたことを知らなかった」

3匹？……まずは、シリウス・ブラック。
そして、ピーター・ペティグリュー？
もしかして残りの1人は、ハリーのお父さんのジェームズ・ポッ

ターかな？

ブラックが、さっさと説明を済ませるように父さんを急かす。

その時、背後でギィィと音がして部屋のドアが勝手に開いた。

けど、誰もいないように見えた。

しかし、それを見たロンが震え上がった。

「ここは呪われてるんだ！」

「『叫びの屋敷』は決して呪われてはいなかった」

ドアに目を向けたまま、父さんは言った。

それから、父さんは昔話を始めた。

父さんが人狼に襲われたのは、まだ幼い頃だった。

ちなみに、咬んだ犯人の名はフェンリール・グレイバックというらしい。

小さな子供を好んで襲うことで有名な最悪な人狼だ。

父さんの父親、つまり私の父方のお祖父ちゃんが、グレイバックを怒らせた腹いせに、父さんは咬まれたらしい。

父さんが人狼になってから、父さんとその両親は、ホグワーツに入ることを諦めていた。

しかしダンブルドア校長が、きちんと措置を取れば大丈夫だと言ってくれ、父さんの入学を許可してくれた。

父さんがホグワーツに入学する2年前。

ある魔法薬学者が、妻と娘・息子を連れて一家で日本からイギリスへやってきた。

彼はダモクレス・ベルビィ氏と共同で、トリカブト系脱狼薬の開発を始めた。

その魔法薬学者の名前は如月薫。
つまり私の母方のお祖父ちゃんだ。

父さんの入学前、ダンブルドア校長は、お祖父ちゃんを訪ねたそうだ。
その時、お祖父ちゃんは、ダンブルドア校長にこう言ったという。
「薬の開発は始まったばかりで、まだ成果が出るのは当分先です。しかし、必ず完成させます」

一方、お祖父ちゃんは、人狼を差別せずに受け入れようとするダンブルドア校長に感銘を受けた。
だから、母さんと悟叔父さんをダンブルドア校長がいるホグワーツへ通わせることに決めた。

入学後、父さんは満月の夜になると、地下トンネルを通り、叫びの屋敷に連れていかれた。
あの暴れ柳は、トンネルに無闇に誰かが入り込んで、変身した父さんに襲われるのを防ぐ為、植えられたものだった。
私が暴れ柳の止め方を知っていたのは、父さんから聞いたことがあるからだ。

父さんが入学後、最初に「持病」に気づいた同級生は、母さんだった。
もちろん、お祖父ちゃんが「持病」を母さんに話したわけではなく、母さんが自分で気づいたらしい。
「私が人狼だと知り、梓は私から離れてしまうと思っていた。しかし、彼女は違った。それどころか、毎月私の為に傷薬を作ってくれたし、こんな私を好きになってくれた」

それからしばらくして、父さんと同室のシリウス・ブラック、ピー

ター・ペティグュー、そしてジェームズ・ポッターも「持病」に気づいた。

しかし、彼らは父さんの友達であり続けてくれた。

と、ここまでは私も知っている話だ。

けど、これから先は、私も初めて聞く話だった。

39　招かれざる客

父さんは話を続ける。

「私の正体を知った3人は、私から離れるどころか、3人とも私のために『アニメーガス』になってくれた」

ん、ブラック達がアニメーガスになったのは、父さんの為ってこと？

「でも、それが何故あなたを救うことになったの？」

ハーマイオニーの言うとおりだ。

私もアニメーガスになることが、変身した父さんを救うことと、どうつながるのかがわからない。

すると父さんは、3人が変身した父さんと一緒に過ごせるようになるためだと答えた。

人狼は人間を襲うが、動物の姿なら襲われることはないと考えたらしい。

アニメーガスになった3人と父さんは、満月の夜、叫びの屋敷を抜け出して、遊びまわるようになった。

その冒険の成果こそ「忍びの地図」だった。

今から思えば、それは非常に危険なことだった。

満月の夜に人狼が出歩くなんて、危ないにも程がある。

また、父さんは、友達を違法アニメーガスにしたことに、時々罪の意識を感じていたらしい。

でも、満月の夜の冒険の楽しさに、それを都合良く忘れたそうだ。

「そして、私は今でも当時と変わっていない。この1年、私はシリウスがアニメーガスだと、ダンブルドアに告げるべきか迷い、ためらう自分と戦ってきた。伶になら話せるかと思ったが、やはり言えなかった」

そういえば、前に「伶、聞いて欲しい。あの犬は、」とか言いかけてたな。

父さんがダンブルドア校長にアニメーガスの件を話せなかったのは、自分が校長の信頼を裏切っていたことを認めたくなかったからしい。

「私はシリウスが学校に侵入するのに、ヴォルデモートに学んだ闇の魔術を使用したに違いないと思いたかった。アニメーガスであることは、それと無関係だと自分に言い聞かせた。ある意味スネイプが正しかったわけだ」

ブラックが「スネイプ」と聞き、父さんを見た。

「スネイプに何の関係が？」

「シリウス、スネイプがここにいる。あいつもここで教えているんだ」

父さんの言葉に私が補足を入れる。

「ちなみに担当は魔法薬学。父さんの脱狼薬は毎回、スネイプが煎じていた」

ブラックは「スネイプ」と聞いて、心底嫌そうな顔をした。

きっとブラックはスネイプが大嫌いなんだろう。

スネイプは父さんとホグワーツの同期だから、ブラックもスネイプと同期になるんだな。

「ところで、リーマス。噂によると君は確か、日本で暮らしていたはずではなかったのか？」

ブラックの問いに父さんが答える。
「そうだ。私はここに来る前、日本の青龍学院魔法学校で英語を教えていた。去年の夏、そこへダンブルドア先生が来られてホグワーツに誘ってくださった。そして、伶と一緒にホグワーツに行くことになった」

父さんは話を続ける。
「この1年、彼はダンブルドアに、私は信用できないと言い続けていた。それは……」
原因は、学生時代にブラックがスネイプに仕掛けた悪戯だった。

スネイプは月に1度、夜に姿を消す父さんを不審に思い、いろいろ嗅ぎ回ったらしい。
そんな彼を良く思わなかったブラックは、暴れ柳の止め方をスネイプに教えた。
そして満月の夜、スネイプにそこへ行くように、そそのかした。
それを知ったハリーのお父さんと、うちの母さんが、スネイプを引き戻したそうだ。

だけど、スネイプは、変身した父さんの姿を見てしまったのだという。
スネイプは父さんの「持病」を知ってしまった。
もちろん、ダンブルドア校長は口止めしたけどね。

余談だけど、事件後、激怒した母さんは、ブラックを本気で殴り飛ばしたそうだ。
ブラックの顎の骨にヒビが入ったんだとか。
そういえば母さん、空手初段だったんだっけ。

ハリーが少し考えてから、父さんに言った。

「スネイプは、あなたもその悪ふざけに関わっていたと思ったわけですね？」

「その通り」

氷点下の重低音ボイスが聞こえた。

なんと、そのスネイプ本人が現れたんだ!!

思わぬ人物の登場に、みんな驚きを隠せなかった。

スネイプは、透明マントを持っていた。

そして彼は反対の手で、杖を父さんにピタリと向けていた。

スネイプは透明マントを投げ捨て、ハリーに言う。

「ポッター、なかなか役に立ったよ。感謝する」

彼は暴れ柳の下でマントを見つけたようだ。

そして今度は私を見て言う。

「ところで、キサラギ。お前は何故こんなところにいる？　先程、玄関ホールで我輩に会った時、寮に戻ろうとしていたのではなかったのか？」

え、私には、スネイプと会った覚えはないんだけど？

スネイプは、困惑顔の私をスルーして話を続ける。

彼は父さんの部屋に今日の分の脱狼薬を届けに行ったけど、父さんはいなかった。

スネイプは机の上に残された「忍びの地図」を見て、ここに来たのだ。

「我輩は校長に繰り返し進言した。君が旧友のブラックを手引きして城に入れていると。ルーピン、これが良い証拠だ。図々しくもこの古巣を隠れ家に使うとは、さすがの我輩も夢にも思いつかなかったが」

嫌味ったらしくスネイプは言った。

「誤解だ。説明させて欲しい」

父さんは頼んだけど、スネイプは無視して続ける。

「今夜また2人、アズカバン行きが出る。ダンブルドアがどう思うか、見物ですな。ダンブルドアは君が無害だと信じきっていた。わかるだろうね、ルーピン。『飼い馴らされた人狼さん』」

「『飼いならされた人狼』って!! 何ですか、その言い方はっ!?」

私はカチンときて、思わず懐の杖へ手を伸ばす。

「伶、落ち着きなさい」

父さんは私の腕をそっと押さえて止め、スネイプに言う。

「愚かな。学生時代の恨みで、無実の者をまたアズカバンに送り返すというのか?」

しかし、スネイプは父さんの言葉に聞く耳を持たず、杖を振るった。

バーン!と音がして、スネイプの杖から細いロープが飛び出す。

ロープに縛り上げられ、父さんは床に倒れた。

「《何てことを!!?》」

私は思わず日本語で叫び、父さんに駆け寄った。

一方、ブラックはスネイプにつかみかかろうとした。

けど、スネイプはブラックの眉間に杖を突きつける。

「やれるものならやるがいい。我輩にきっかけさえくれれば、確実に仕留めてやる」

ハーマイオニーがおずおずと言う。

「スネイプ先生、あの、彼らの言い分を聞いてあげても、害はないので

は、あ、ありませんか？」

「ミス・グレンジャー。君は停学処分を待つ身だ。君も、ポッターも、キサラギも、ウィーズリーも、許容ラインを超えた。しかも指名手配中の殺人鬼や人狼と一緒とは」

ハーマイオニーは食い下がる。

「でも、もし『誤解』だったら……」

「黙れ、この馬鹿娘！　わかりもしないことに口を出すな！」

スネイプの怒鳴り声が響いた。

「先生こそ、わかりもしないことに口を出さないで下さい！」

私はスネイプに負けじと声を上げ、一気に早口でまくしたてた。

「あなたが、一体どこまで話を聞いていたかは知りませんが、こちらの言い分も聞かず、思い込みで判断するのはやめてください！」

「キサラギ、自分の父親は常に正しいと思っているのかね？　それこそ『思い込み』ではないのかね？」

そしてスネイプは、相変わらずブラックに杖を突きつけたまま言った。

「復讐は蜜より甘い。貴様を捕まえるのが我輩であったらと、どんなに願ったことか」

ブラックはスネイプをにらみながら、ロンの鼠を連れて行くなら、一緒に城までついて行くと言った。

しかし、スネイプは、暴れ柳の下で戻ったらすぐに吸魂鬼を呼んでやると、あざ笑う。

ブラックは「鼠を見ろ」と言ったが、スネイプは耳を貸さなかった。
「来い、全員だ」
スネイプは、父さんをしばっているロープの端を手にした。
しかし、ハリーがドアの前に飛び出し、スネイプの行く手をさえぎった。
スネイプは「どけ」と言ったが、もちろんハリーはどかない。
「ルーピン先生が僕を殺すチャンスは、この1年に何百回もあった。僕は先生と2人きりで何度も吸魂鬼防衛術の訓練を受けた……」
「人狼がどんな考え方をするか、我輩に推し量れとでもいうのか。どけ、ポッター」

ハリーとスネイプの押し問答が続く。
そしてスネイプが、ついにハリーへ杖を上げた。
私はとっさにスネイプに杖を向け、叫んだ。
「「「Ｅｘｐｅｌｌｉａｒｍｕｓ」」」

実は、武装解除呪文を唱えたのは、私だけじゃなかったんだ。
ハリー、ロン、ハーマイオニーもだった。
４人がかりの武装解除術をくらったスネイプは、ドスンと壁にぶつかって頭を強打し、完全にノックアウトされていた。
「ああ、やっちゃった」
私はピシリと平手で額を打つ。
ブラックはハリーに、こんなことを君がすべきじゃなかったと言った。
そして、ハーマイオニーはオロオロと「先生を攻撃してしまった」と

うろたえた。

とりあえず、私はスネイプに近づき様子をみる。

息はちゃんとしてる。

首に手を当てて脈をみたけど、乱れてはいない。

ただし、頭にコブができて血が出ているので「Ｅｐｉｓｋｅｙ！」と唱えて処置し、杖を振って氷嚢（ひょうのう）を出して頭にのせた。

続いて意識レベルの確認だ。

「もしも〜し？　大丈夫ですか？」

声をかけたら反応はなかったけど、スネイプの手の甲を軽くつねると、少し顔をしかめた。

それから杖明かりをつけ、目をこじ開けて光を当て、左右の瞳孔の形と大きさを確認する。

ＯＫ、正常だ。

「うん、ただの脳震盪（のうしんとう）だね。大丈夫、放っておこう」

私の言葉を聞いて、ハーマイオニーはホッとした。

ハリーとロンは、私がスネイプに処置する様子をあっけに取られて見ていた。

「レイ、何でそんなに手当に慣れてるんだい？」

ロンが尋ねる。

「応急処置は日本にいた時に習ったんだ。特にクィディッチには頭の怪我がつきものだからさ」

私はにっこり笑った。

そうこうしているうちに、ブラックが父さんのロープを解いてくれ

たようだ。
「では、証拠を見せる時が来たようだ」
そう言うと、ブラックはロンに鼠を渡すように迫る。
鼠がキーキーわめいた。

４０・真相

「では、証拠を見せる時が来たようだ」
ブラックはロンに鼠を渡すように迫る。
鼠がキーキーとわめいた。

「ええっと、ブラック、さん？　どうして、ずっとアズカバンにいたあなたが、スキャバーズの正体が『ピーター・ペティグリュー』だと言い切れるんですか？」
「レイ、いい質問だ。これを見て欲しい」
私が尋ねると、ブラックは新聞の切り抜きを取り出した。

日付は去年の7月。
まだ私と父さんが日本にいた頃のものだった。
ブラックは、この新聞をアズカバンに視察に来たファッジ大臣からもらったそうだ。

◆魔法省官僚大当たり◆
魔法省・マグル製品不正使用取締局長、アーサー・ウィーズリーが、今年の「日刊予言者新聞・ガリオンくじグランプリ」を当てた……

そこには、ロンの一家の写真が載っていた。
写真のロンの肩には、前足の指が1本欠けた鼠、スキャバーズが写っている。

そしてブラックが、スキャバーズの正体がピーター・ペティグリューであると断定した根拠こそ、鼠の前足の指が1本欠けていることだった。

「何と単純明快なことだ。何と小賢しい……あいつは自分で指を切っ

たのか？」
「変身する直前にな」
あきれ返る父さんに、ブラックが付け足す。
ピーター・ペティグリューの遺体の中で唯一まともに残っていたのは「指」だったそうだ。
ブラックの話では、ペティグリューは自分が「死んだ」と見せかける為、指を切り落として置いて行ったということらしい。
「奴を追い詰めた時、奴は通行人全員に聞こえるよう叫んだ。私がジェームズとリリーを裏切ったんだと。それから、私が奴に呪いを掛けるよりも先に、奴は隠し持っていた杖で道路を吹き飛ばし、自分の周囲半径５、６ｍ以内の人間を皆殺しにした。そして素早く、鼠だらけの下水道に逃げ込んだ」
ということは、もしシリウス・ブラックの証言が本当なら、ブラックは誰も殺してないっていうわけ？
爆発を引き起こして、周囲のマグル達を殺したのは、ピーター・ペティグリューだったってこと？
父さんがスキャバーズを見てから口を開いた。
「私の想像だが、シリウスが脱獄したと聞いてから、その鼠は痩せ衰えてきたのだろう」
ロンはクルックシャンクスを指差す。
「こいつは、その狂った猫が怖いんだ！」
「ロン、ちょっと待って！　君の鼠は、ハーマイオニーがクルックシャンクスを飼う前から、具合が悪かったはずだよ？」
「伶、それは本当かい？」

父さんの目が光る。

私は、父さんに軽くうなずいてから説明する。

「去年の夏、ロンはスキャバーズの具合が悪いって、ダイアゴン横丁のペットショップで診てもらったんだ。ハーマイオニーは、その時、店にいたクルックシャンクスを気に入って、飼うことにしたんだよ」

ロンが恨みがましく私を見た。

でも、これは、私がハーマイオニーとロンに初めて出会った日の出来事だから、ハッキリと覚えている。

「この猫は狂ってはいない。むしろ非常に賢い」

ブラックが骸骨のような手で、クルックシャンクスを撫でながら言った。

クルックシャンクスは鼠の正体に気づき、ブラックの元へ連れて行こうとしたらしい。

しかし、それができず、クルックシャンクスは、寮の合言葉のメモを盗んできたという。

あれ、合言葉のメモって、まさかネビルの？

クルックシャンクスが盗んだってことは、メモがなくなったのは、彼の不注意じゃなかったんだ！

あーあ、ネビルはお祖母さんに吼えメールまでもらったのに。

さて、ペティグリューは自分の身が危険だと知ると、シーツに血痕を残した。

自分がクルックシャンクスに襲われたと見せかけ、姿を隠すためにね。

私には、シリウス・ブラックの話は筋が通っているように思えた。
しかし、ハリーはまだ納得できていないようだった。

「こいつは自分が僕の両親を殺したと言ったんだ！」
ブラックの話を聞いても、ハリーはまだ彼が両親を裏切ったと疑っていた。

「私が殺したも同然だ」
ハリーに懺悔（ざんげ）するように半ば涙声で、ブラックは説明を続けた。

ブラックは最後の最後で、秘密の守人をペティグリューに変えた。
そして、事件は起きてしまったのだ。

「話はもう充分だ」
ピシャリと言い放ったのは、父さんだった。

「ロン、その鼠を寄越しなさい」
父さんの声には、有無を言わせない響きがあった。
ついにロンは観念し、鼠を父さんに渡す。

「伶、シリウスに杖を」
父さんに言われ、私は杖をブラックに渡す。

ブラックが父さんを見て言った。
「一緒にするか？」
「そうしよう」
そして2人は杖をスキャバーズに向けた。

「3つ数えたらだ。1、2、3！」

２人の杖先から青白い光線が発射された。
光線が鼠に当たると、辺りが真っ白になるような閃光が走る。
次の瞬間、鼠の姿はなかった。
その代わりに立っていたのは、私よりもかなり背が低い小柄な男。

ピーター・ペティグリュー。

私は父さんの昔のアルバムで、彼の写真を見たことがあった。
アルバムの写真ではふっくらしていたけど、今ここにいる男はやつれてしなびている。
しかし、小さい目と尖った鼻に昔の面影があった。

彼は死んだはずだった。
シリウス・ブラックに、殺されたはずだった。

その男が今、私の目の前にいる。
幽霊じゃなくて、生身の人間として。

つまり、父さんとシリウス・ブラックの話は正しかったということなんだ。
ペティグリューは死んではいなかった。
鼠の姿になって、コソコソ隠れて生きてきたんだ。

41・悪あがき

「やあ、ピーター、しばらくだったね」
背筋が凍るような笑顔で、父さんが声を掛けた。

「シ、シリウス、リ、リーマス、懐かしの友よ」
キーキーと耳障りな声でペティグリューは答えた。

「ジェームズとリリーが死んだ夜、何が起きたのか、お喋りしていたんだがね、ピーター。君はキーキーわめいていたから、細部を聞き逃したかもしれない」

父さんの穏やかな口調が、逆に恐ろし過ぎる。
今、父さんは、完全に本気でキレている。
娘の私にはわかる!!!

ペティグリューはおびえきっていて、くどくど言い訳と命乞いをした。
しかし、今の父さん達にそんなものは通用しない。

ペティグリューの目は逃げ道を探して、キョロキョロとせわしなく動いていた。

「はっきり言ってピーター、何故無実の者が12年も鼠に身をやつして過ごしていたのか、理解に苦しむ」

父さんの言う通りだ。
無実だったなら、正々堂々としていればいいのに。

するとペティグリューは必死で言い訳した。

闇の陣営の有力者であるシリウス・ブラックを自分がアズカバン送りにしたことで、ヴォルデモートの支持者から報復されるのが怖かったのだと。

そこへ、ハーマイオニーがおずおずと尋ねた。

スキャバーズ、じゃなかったペティグリューは、3年間ハリーの側で過ごしていたのに、どうしてハリーに手を出さなかったのかと。

ペティグリューはそれを聞き、助かったと喜ぶ。

しかしシリウスが、ハーマイオニーの疑問に答えを出した。

「ヴォルデモートは12年も隠れたまま、半死半生だと言われている。アルバス・ダンブルドアの目と鼻の先で、しかも全く力を失った残骸のような魔法使いなんぞの為に、人殺しなどするお前か？　そもそも魔法使いの家族に潜り込んで飼ってもらったのは、情報を聞く為だろう？　かつてのご主人様が復活し、またその下に戻っても安全だという事態にお前は備えた」

それを聞き、ペティグリューは、金魚のように口をパクパクさせた。

シリウス・ブラックの言ったことは、全部当たっているんだ。

ぐうの音も出ないとは、まさにこのことだな。

「あの、ブラックさん……シリウス？　お聞きしてもいいでしょうか？」

ハーマイオニーが丁寧に声をかけるものだから、シリウスがびっくりして彼女を見たよ。

「ど、どうやってアズカバンから脱獄したのでしょう？　もし闇の魔術を使ってないのなら」

ペティグリューがキーキーと声をあげた。
「ありがとう、その通り！　それこそ私が言いたい、」
「黙れ。ハーマイオニーは、シリウスさんに質問したんだ。あなたの出る幕はない」
私はペティグリューの言葉を冷たくさえぎった。

シリウスは少し考えてから答えた。
「私が正気を失わなかったのは、自分が無実だと知っていたからだ」

吸魂鬼は幸福な気持ちを吸い取る。
だけど、自分が無実だと思う気持ちは、吸魂鬼の餌にはならなかったらしい。
確かに、自分が無実だと知っていることは、別に幸せな感情ってわけじゃないからね。

それでも、どうしても吸魂鬼に耐えられなくなった時は、シリウスは犬に変身してやり過ごしたそうだ。
犬の感情は人間ほど複雑ではなく、また吸魂鬼は目が見えないので、この方法は上手く行ったらしい。

「信じてくれ。信じてくれ、ハリー。私は決してジェームズやリリーを裏切ったことはない」
シリウスとハリーは互いをじっと見つめあい、ハリーは深くうなずいた。
ついにハリーは、彼を信じることに決めたようだ。

額に脂汗をいっぱいに浮かべたペティグリューは、床に膝をついた。

シリウスは言った。
「一緒にこいつを殺るか？」

「ああ、そうしよう」
父さんは答えた。

父さんとシリウスは、袖まくりをして杖を構えた。

「やめてくれ、やめて……」
今度はペティグリューは、ロンに助けを求めた。
「頼む、殺させないでくれ、私は君の鼠だった、良いペットだった」
「自分のベッドにお前を寝かせてたなんて！」
しかし、ロンは力一杯ペティグリューに叫ぶ。

「人間の時より鼠の方が様になるのは、ピーター、あまり自慢にならない」
元ご主人に拒絶されてヒイヒイあえぐペティグリューに、シリウスの厳しい言葉が放たれた。

すると今度は、ペティグリューは、ハーマイオニーのローブの裾をつかんで助けを求める。
けど、彼女はペティグリューの手からローブを引き抜き、壁際に逃げる。

「レイ！」
次にペティグリューがすがりついたのは私だった。
父さんは、冷たく凍りつくような目でペティグリューを見た。

「頼むレイ！　リーマスとシリウスを止めてくれ!!　娘の君の頼みなら、リーマスだって聞くはずだ」
ペティグリューは震えながら上目遣いで私を見る。

「レイ、お願いだ。アズサだって……君のお母さんだって、リーマスが人殺しになることは望んでない！」

有り得ない。
何で、ここで死んだ母さんの名前を出すんだよ？
「気安く父さんと母さんの名前を呼ぶな。汚らわしい裏切り者のくせに」
私は冷たく淡々と言葉を突き刺す。
「私の母さんは、何よりも家族や仲間の命を大事にする人だったと聞いている」
実際、母さんは自分の弟をかばって死んでいった。
「父さんはもちろん、母さんだって、もしあなたの裏切りを知れば、間違いなくあなたを殺すに決まっている。父さん同様、死んだ母さんも、あなたをきっと絶対に許さない。当然、私もあなたを絶対に許さない」
ペティグリューは、身を小さく縮めた。
「私には、父さんとシリウスさんを止める権利も理由も無い。2人があなたを殺すのなら、私はただそれを見届けるまでだ」
私は本当に心からそう思った。
裏切り者のコイツに情けなどいらない。
「おやおや。伶には、我々を止める気は無いようだ」
父さんが朗らかに言い放つ。
ただし、目は一切笑っていない。
「ハリー、君はお父さんに生き写しだ……」
ペティグリューは、今度はハリーに命乞いを始めた。

「ハリーに話しかけるとはどういう神経だ！」
シリウスの怒鳴り声が飛ぶ。
「ハリーに顔向けできるのか？　この子の前で、ジェームズのことを話すなんて、どの面下げてできる？」
シリウスの言葉が耳に入っているのかいないのか、まだペティグリューはハリーにすがりつこうとした。
彼はみじめに震えながら、自分は裏切りたくて裏切ったんじゃない、ヴォルデモートに逆らえなかったと、逆らえば自分が殺されたんだと、言い訳を繰り返す。
往生際の悪いペティグリューに、シリウスは怒りを込めて言った。
「友を裏切るくらいなら死ぬべきだった。我々も君の為にそうしただろう」
「お前は気づくべきだった。ヴォルデモートがお前を殺さなければ、我々が殺すと。ピーター、さらばだ」
シリウスの隣で父さんが杖を上げ、冷たく告げた。
それは死刑宣告だった。
ハーマイオニーが両手で目を覆い、壁を向く。
逆に、私は目をカッと見開いて、父さんとシリウスの杖先をじっと見つめた。
全て見届けなければならない、そう思った。

42・禍福はあざなえる縄の如し

「やめて！」
突然、ハリーがペティグリューをかばうように飛び出した。
父さんもシリウスも、固まった。

「ハリー、何で止めるんだ!?　こいつは、自分の命惜しさに友達を裏切った最低最悪な奴なのに、君はこいつを許すって言うの？」

「レイ。僕は許すんじゃないよ」
じゃあ、何で止めたんだ？

「吸魂鬼に引き渡すんだ。こいつはアズカバンに行けばいい」

ハリーの言葉に文字通り「命拾い」したペティグリューは、両腕でハリーの膝を抱く。

「ハリーから手を離せ」
私は杖を構えて、ペティグリューに突きつける。

ハリーはペティグリューに言った。
「お前の為に止めたんじゃない。僕の父さんは、親友がお前のような者のせいで、殺人者になるのを望まないと思っただけだ。それから、レイ、」
ハリーは私を見た。
「これは君の為でもある。あんな奴のせいで、君のお父さんを殺人犯にしたくない」

父さんを見たら、ハッとした顔になっていた。

ハーマイオニーが、私の肩にそっと手を置く。
「レイ。もし先生が彼を殺せば、あなたは『人殺しの娘』になるわ。理由はどうであれ、人殺しは人殺しよ。そうしたらあなたは、きっと辛い思いをするわ」

そんなこと言われたら、もう私は何も言えなくなる。

冷静に考えれば、ハリーが一番正しかった。
ペティグリューは、アズカバンに行くべきだなんだ。
そこで一生、自分が犯した罪の重さに苦しめばいい。

そうして、私達は校舎に戻ることになった。
ペティグリューを魔法省に突き出せば、シリウスの無実は証明され、シリウスは名誉を回復できる。
一方、ペティグリューは、アズカバンに送られることになるんだ。

父さんがペティグリューをしばり上げる。
もちろん「もし変身したら、やはり殺す」と釘を刺すことは忘れなかった。

私はもう一度ロンの脚に手をかざして、薬師如来の真言を唱えた。
「伶、君も顔をひどく怪我してるね。Ｅｐｉｓｋｅｙ！」
父さんがクルックシャンクスに引っかかれた顔の傷に杖を当てると、傷がスッと消えた。

ふと、私はスネイプが気になった。
「さて、彼はどうしよう？……気付けの呪文をかけた方がいいかな？」
スネイプは、気絶して床にのびたままになっている。

「無理に目を覚まさせる必要はないだろう。我々が安全に城に戻るまで、このままにしておこう」
父さんはクールに言った。

何だか父さんの言葉に「今、スネイプが目を覚ますと厄介だ」ってニュアンスが感じられるけど……気のせい、だよね？

父さんはホイホイっと杖を振って意識のないスネイプの体を宙に浮かせた。
そして、落ちていた透明マントを拾い上げてローブのポケットにしまった。

ペティグリューは逃げられないように、左手を父さん、右手をロンにつながれた。

私達は暴れ柳に向かって暗いトンネルを進んでいく。
先頭はクルックシャンクス。
それから、父さん、ペティグリュー、ロン。
その後ろに私、スネイプの杖を使ってスネイプを宙吊りにしたシリウス。
最後がハリーとハーマイオニーだ。

途中、何度もスネイプの頭がゴツンゴツンと天井にぶつかっていた。
「シリウス。スネイプの頭、気をつけてよ。頭ぶつけて気を失ってるんだから、ケガがひどくなったらどうすんの？」
「ああ、レイ。ついうっかりしていた。どうも使い慣れない杖だとコントロールが定まらなくてな。どうやら私は杖に嫌われたようだな」
シリウスはヘラヘラ言い訳をしていたけど、たぶんワザとだ。

正しくは「杖がシリウスを嫌っている」じゃなくて、「シリウスが杖の主（スネイプ）を嫌っている」でしょうが。

そうして私達は、ついに暴れ柳の下まで戻ってきた。
空は雲に覆われて真っ暗だ。

「ちょっとでも変な真似をしてみろ、ピーター」
父さんは、ペティグリューに再び釘を刺す。

それにしても、あのシリウス・ブラックが無実だったとは！
しかも、本当に１２人のマグルを吹っ飛ばしたのは、死んだはずのピーター・ペティグリューだなんてね。
こりゃあ、明日の日刊預言者新聞の一面トップ間違いなしだよ！

このまま上手くいけば、ハリーとシリウスは、一緒に暮らせるかもしれない。
ハリーは、同居している親戚の人達と上手くいってないようだから、そうなったらいいね。

そう思っていた矢先だった。
急に雲が切れ、月の光が差し込んできた。
父さんの手が急に震えだし、杖を取り落とした。

「マズイ。父さん、薬飲んでなかったんだ!!」
「どうしましょう……あの薬を飲んでないわ！」
私とハーマイオニーは同時に叫んだ。

変身が始まってしまった!!!
父さんは唸り声をあげ、狼に変わっていく。

シリウスが「逃げろ！」と叫ぶ。

けど、ハリーは、父さんとペティグリューに縄でつながったままのロンを助けようとした。
ハリーは縄を解こうとしていたけど、うまくいかない。
「私に任せて逃げろ」
シリウスがもがくハリーを急かす。
その間も、父さんの体は大きくなっていく。
ビリビリとローブが裂け、全身をムクムクと深い毛が覆っていく。
やがて変身が完了した狼は、私達に牙を剥いて襲いかかってきた。
しかし、シリウスが犬に変身して止めに入ったため、間一髪、私達は咬まれずに済んだ。
変身して理性を失った父さんは、犬になったシリウスに追い払われ、禁じられた森へと駆け出して行ってしまった。
けど、あろうことか、そのすきにペティグリューが父さんが落とした杖で、ロンに攻撃してきた。
私はペティグリューを押さえ込もうとしたけど、奴は私が痛めている左腕を嫌と言うほど叩く。
痛っ!!
私はたまらず、手を離してしまった。
ハリーがペティグリューが持っていた杖を取り上げようと、武装解除術を放つが、間に合わない。
ペティグリューは杖を捨てて鼠に姿を変え、ロープをするりと抜けて駆け出した。
「シリウス、あいつが逃げた!」

ハリーに言われ、人間に戻ったシリウスが鼠の後を追った。

しばらくして、湖の方からキャンキャンという犬の鳴き声が聞こえてきた。

シリウスの身に何か起きたのか？

まさかペティグリューにやられたのか？

それとも父さんに襲われた？

いや、狼になった父さんは森へ行ってしまったから、方向が違うよね？

とにかく、私、ハリー、ハーマイオニーは、犬の鳴き声がした湖の方へ走った。

湖に近づくにつれ、辺りの温度が急に冷たくなってきた。

まるで、その空間だけ冬が来たみたいだ。

吐き出す息が白い。

シリウスは湖のほとりにいた。

彼は人の姿で頭を守るように両手で抱え込み、地面にうずくまっていた。

シリウスが使っていたスネイプの杖が、地面に落ちていた。

湖の周囲から、こっちに向かって数百体もの吸魂鬼の大群が迫ってきていた。

４３・吸魂鬼と守護霊

「ハーマイオニー、レイ、何か幸せなことを考えて！」
迫ってくる吸魂鬼へ杖を構えながら、ハリーが叫ぶ。

吸魂鬼には守護霊の呪文。
守護霊を作り出すには幸せな思い出が必要だ。

「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ」
ハリーは眉をギュッと寄せて呪文を唱え始める。

私の幸せな思い出……。
去年、クィディッチ全日本大会で準優勝したこと？

「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ」
私は準優勝した瞬間を思い出し、呪文を唱えてみた。

けど、ダメだ。
決勝で私がゴールした直後、対戦相手の安倍学園のシーカーにスニッチ取られ、逆転優勝されたことも思い出した！

ダメだ、他の思い出……。

「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ　Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ　Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ」
私が悩む間にも、ハリーは必死に呪文を唱え続けている。

だけど、幸せな思い出が……浮かばない。

そうこうしているうちにも、周りの気温はどんどん下がり続ける。

吸魂鬼の群れは、どんどん近づいて来る。
シリウスは耐えていたけど、そろそろ限界が近い。
「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ！」
幸せな思い出が浮かばないけど、私はせめて声だけは大きく張り上げて叫んだ。
ハーマイオニーも一緒になって、必死に呪文を唱えていたけど、上手くいかない。
「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ！　Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ!!」
ハリーも何度も何度も呪文を唱えていた。
吸魂鬼は私達の周りを囲み、ジリジリと距離を詰めてくる。
じゃあ、これならどうだ!?
私は杖を懐にしまい、右手の人差し指と中指を伸ばし、残りの指を折って手刀を作る。
意識を指先に集中させて深呼吸。
そして、ありったけの大声を張り上げ、九字の真言を叫んだ。
「臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前！」
念を込め、手刀を縦横に切るように動かすと、吸魂鬼が後ずさりした。
「臨兵闘者皆陣烈在前！」
再び九字の真言を唱えると、吸魂鬼はまた後ずさりした。
私は立て続けに真言を唱える。
「臨兵闘者皆陣烈在前！　臨兵闘者皆陣烈在前！……」

お、これ、いけるかな？
そう思ったのもつかの間だった。

いったん後退したかに見えた吸魂鬼達が、再び距離を詰めてきた。
わわっ、しかも、何だかさっきより数が増えている気が!!?

しまった!!!
「九字切り」は、術者の力が相手よりも弱いと、かえって相手を刺激して逆効果だったんだ！
それって、陰陽術の基礎中の基礎なのに、忘れていた！

間もなく、シリウス、それからハーマイオニーが倒れた。
ごめん、私のせいだ。

「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ!!」
ハリーが叫ぶ。

ついに吸魂鬼の手がハリーに届いた。
ハリーにキスをする気だ！

私はハリーに伸びた吸魂鬼の手を引き剥がそうとした。
冷たくてヌメっとした気味の悪い感触がして、背筋が寒くなる。

その時、急にまわりが白く輝く光に包まれた。
何か銀色のものが、向かってくるのが見える。

それは私達を吸魂鬼から守るように、ぐるぐると周りを走り回った。
よく見ると、頭から立派な角が生えた牡鹿だった。

これが守護霊（パトローナス）？

守護霊がハリーへ突進すると、吸魂鬼はサッとハリーから手を離して消えた。
だけど一歩遅くて、ハリーは力尽きて倒れた。

マズイ、残るのは私だけだ。
どうする如月伶!?

さっきの守護霊のおかげで、吸魂鬼の数はかなり減り、だいぶ遠ざかってはいた。
けど、完全に消えたわけじゃない。
このままだと、また吸魂鬼が集まってきて、みんなが襲われるのは目に見えている。

さあ、考えろ。
吸魂鬼にどう立ち向かう？
九字切りは使えない、ていうか逆効果。

あ、チョコレート！

私は今頃になって、ポケットにチョコレートを入れていたことを思い出した。
さっそくチョコを取り出して口に入れると、体が温かくなり頭が回り始めた。

吸魂鬼を追い払うには、強力な守護霊が必要だ。
さっきの牡鹿を出したのは、どこの誰だかわからないから、頼るわけにはいかない。

シリウス、ハリー、ハーマイオニーは気絶している。

父さんは狼になっていて、それどころじゃない。
当然、私にはこんな高度な呪文なんて無理だ。

あ、待てよ？
まともな守護霊を出せそうな人が1人いたぞ！
ちょうど、彼の杖もここにある。
私は落ちていた杖を拾い上げて、ダッシュで校舎の近くまで戻った。

目的の人物……セブルス・スネイプは地面の上でだらしなくのびていた。

「先生、スネイプ先生！　しっかりして下さい！　もうっ、Ｅｎｅｒｖａｔｅ！」
杖を振って気付けの呪文を唱えると、スネイプはようやく目を開けた。

「キサラ、ギ、か？」
「先生、気分はどうですか？　吐き気は？」
頭を打った後で吐き気がするのはヤバイので、一応確認しておく。
「吐き気はない」
それを聞いて一安心だ。

「ここは？　お前は……？」
スネイプは頭を振って体を起こして立ち上がり、あたりを見渡す。
「それよりも、吸魂鬼が湖に！　とりあえず、コレと、コレを！」
私はスネイプに杖とチョコレートを渡しながら叫んだ。
「お願いします！　早くなんとかしてください！」

スネイプはチョコレートを胡散臭そうに見た。

「チョコレートに毒なんか入れてませんから、さっさと食べて下さい！」
すると、苦虫を噛み潰したような顔で、スネイプは銀紙を剥いてチョコを口に入れた。
そんなマズそうに食べないで欲しいなぁ。

スネイプと一緒に湖に戻ると、吸魂鬼は再び倒れたハリー達に襲いかかろうとしていた。
さっきより少ないが、それでも5、6体はいた。

スネイプは迷いなく、杖を構えて唱えた。
「Ｅｘｐｅｃｔｏ　ｐａｔｒｏｎｕｍ！」

杖の先から、白銀の４本脚の動物が出てきた。
さっき見た守護霊とよく似ているようだけど、角がないから牝鹿だね。

牝鹿は、軽やかに私達のまわりを駆け回って、残った吸魂鬼を蹴散らしていく。
やがて完全に吸魂鬼は消え去った。

私は力が抜けて地面にへたり込む。

「キサラギ？」
スネイプが私を見た。

ああ、助かったんだ……。
ホッとした私は、遠くへ意識を手放してしまった。